
ドイツさんと私

タナカハナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドイツさんと私

【Nコード】

N0649Z

【作者名】

タナカハナ

【あらすじ】

見た目小学生のOL鈴木麦子が家に帰ると、そこにはなぜかゴリラーのようなドイツ人。どこかすつとぼけた日本語を話すドイツ人と、文字通りの意味で振り回される麦子との恋愛とビールと何かの日々。●実際の人物とはまったく関係ありません ●ドイツ語は適当です ●主人公編四話完結。ドイツ人編六話完結。現在番外連載中

玄関にゴリラ

ある日、家に帰るとゴリラがいた。

しかも、うちの玄関ポーチ。仕事柄目を使いすぎたのかな、と思って擦ってみても、そのゴリラは一向に消えない。消えないどころか、すごい存在感を発している。

目算で身長二メートル弱。清潔感のある白いシャツからちらりに見える腕には、むきむきの筋肉。

——ん？ 白いシャツ？

どうしてゴリラがシャツなんか着ちゃってるんだろう、と近くに寄ってみる。すると、私のその気配に気がついたのか、それはくると振り返った。

「コンバンハ！」

しゃ、しゃべったあああ！

どこぞで目にしたCMかくや、というテンションで、私は口を開いたそれを見上げる。

ポーチに取り付けられた暖色の灯りの下、きらきらと光る金色の髪。私を見詰める瞳は綺麗な青色。

つまり、ゴリラはゴリラではなく、ただのかい外人だったのだ。

「こ、こんばん、は？」

だがしかし、なぜこの巨大な外国人がうちの前に居座っているのか、という疑問はまだ解消されていない。

ものすごく威圧感のあるその顔を見上げながら、とりあえず私は

当たり障りない挨拶を返す。そして、じりじりと警戒心を露わにしながら玄関へと歩み寄った。うお、近くで見るとさらに巨大！

「隣に、来ました。オミヤゲ？」

なんで最後に疑問型、と心の中で軽く突っ込みつつ、外人が差し出すそれに視線を落とすと。

なんということでしょう！

どこかの番組ナレーションのような感想が、頭の中を駆けめぐった。外人が手にしているのは、あきらかにワイン。しかも、白。そしてドイツ産。

一瞬にしてそれだけの情報を読みとった私は、自然とにやける顔を直しつつ、差し出されたそれをうやうやしい仕草で受け取る。

「わざわざご丁寧に、ありがとうございます」

よそ行きの顔で笑ってみせると、なぜか外人はその白い頬をうっすらと染めた。顔とがたいに似合わず、照れ屋らしい。

にしても、でかい。近くで見れば見るほど、遠近感が狂う。

鍛え上げられた体躯はよけいなものの一切ついていない筋肉質。

それはボディビルダーのような不自然なものではなく、どちらかといえば軍人さんのような、持久力ありますって感じの付き方。私の好みだ。

その上に乗っかっている顔も、いかにも外国人ですっていう彫りの深さ。整ってはいるのだけれど、いかつさが全面に出ているため、これ絶対子供泣くよねっていう仕上がり。もったいないなあ。

薄い金色の髪は短く整えられ、青い瞳が少し柔らかく私を見つめていた。

ん？　　そういえばなんで見つめ合ってるわけ？

「あのう、ええつと……」

「オリヴァーです。オリヴァー・ロルフ・ビルケンシュトックです。ドイツから来ました」

「オリヴァー、さん？」

「オリーのフロインドウ、オリーと呼びます」

フロインドウってなんだよ、ドイツ人。

よくわかんないけど、とりあえず笑っとけ、と再びよそ行き笑顔をむけると、ドイツ人も今度は満面の笑みで答える。ただし、顔は怖い。

それが、私——鈴木^{すずき}麦子と隣のドイツ人、オリヴァー・ロルフ・ビルケンシュトックとの初遭遇だった。

引っ越しの挨拶にいただいたワインは、さすがドイツ産。

甘くて、スパークリングで、めっちゃうまかった。あんまし誉められたことではないが、近くのスーパーで同じ銘柄の値段を見ても、そこそこいいお値段。ダンケ、ドイツ人！

両親はともにアルコールを摂取しない人たちなので、二本あったそれはすべて私の胃の中に消えた。

小さなコップ半分のビールでも酔っぱらう両親から、どうしてこんな酒豪が生まれたのかはわからないが、ただで飲む酒ほどうまいものはないね！

現金にも、そんなことでお隣さんを敬っていた私だったのだが。

「オカエリナサイ！ 夕飯はおでんです」

なぜそのドイツ人がうちにいる！

会社から帰って玄関に入ったら、いきなり壁があった。というか、壁だと思ったら、件のドイツ人だった。

見慣れた玄関が、すんごく小さく見えるのは私の目の錯覚じゃないと思う。

品のいいグレイのシャツと黒いスラックスに身を包んだドイツ人は、私からの返答を待っているのか、にこにこしたまま動かない。いや狭い、狭いから。

「た、ただいま？」

「今日、ドイツのビール持ってきましたよ。コムギ、ビア好きですよ」

好きですかって訊いてよ、そこは。まあ、間違っではないけれどもさあ。ていうか、ドイツ産？ ドイツ産のビールって言ったか、今！

いやいや待て待て、落ち着け私。その前に正すべきことがひとつあったぞ、ドイツ人。

「コムギってなに、コムギって。私は麦子！」

「ムギコはコムギ。ムッタア、オリーにコムギいいよって」

確実に五十センチは上にある理性的なゴリラ顔を睨み付けると、ドイツ人はいたずらを怒られたような表情をして、たどたどしく弁解する。

えらい低音のいい声でんなしやべり方されると、殴りたくなるくらいに可愛いじゃないか。というのはいって。

「つまり、お母さんがオリーに『麦子のことはコムギって呼んでいいのよ』なんて勝手なことをぬかしやがったと。そういうことでオーケー？」

「Ja！」

あの天然母がよけいなことを！

ただでさえ低身長に童顔のこの外見のせいで、不当な扱いを社会から受けているというのに。できれば、正しく「麦子さん」と呼んでいただきたい！

二十五歳の淑女らしく扱ってもらいたいんだよ、無理っぽいけどね、すでに。きょとんとしてこちらを見ているドイツ人に、私は大きくため息をつく。ここは気を取り直して！

「オリー、おでんは初めてなの？」

「初めてです。ムツタア、オリーのうち来て、入れって言いました。オリーはとても嬉しゅうございます」

なぜ最後だけそうなる。

吹き出すのをこらえ、目をキラキラさせるドイツ人を従えてダイニングへと移動。本国にいる時、知り合いの日本人と日本映画で言葉を学んだという彼は、時々面白い言葉遣いをする。あえて、訂正はしない。

部屋に入ると、母はテーブルにおでん鍋をセッティングしているところだった。冬はこれこれ、これだよねえ。

あ、そういう重要なことをさっき聞いた気がする。

「ドイツビールあるって？」

「あら、おかえりなさい。オリーちゃん、誘っちゃったあ」「ああ、うん。今さら言われなくてもすごい存在感あるしね」

私と母のやり取りをにこにこしながら見ているドイツ人は、やっぱりいいかい。

これで「悪い子いねがあ！」って来たら、なまはげに勝てる。ぶちぎりで。

「コムギ、ビーアはここです。オリーのダチ、送ってくれたよー」

「おっ、オリー、すっかり『ダチ』をマスターしたね」

「した！」

誉めて伸ばす。うん、成功成功。

初めて会った時にドイツ人が言っていた『フロインドゥ』ってのがわからず、辞書を引いた私。それが日本語で言うところの『友達』だとわかって、斜め上に教えました。いいんだ、『ダチ』って格好いいし。

まるで忠実な大型犬種のように、できたできたと喜ぶドイツ人の腹を、よしよしと撫でてやる。できれば頭を撫でてやりたいところだけれど、悲しいことに私の手が届くのは腹あたりまでだった。屈辱！

それをくすぐったそうに受けていたドイツ人。何を思ったのかそのでっかく厚い手で、お返しとばかりに私の頭を撫で回してきた。ちよ、やめ、首が首がぐくぐくするから！

「あらあ、仲良し！ 素敵ねえ」

「お母さんっ、止めてっ！ 止めてよ、私死ぬから！ 頸椎けいついやられて死んでしまうから！」

「コムギ、バカかわいいですねえ」

「いやそれ嬉しくないから。全然嬉しくないかんねっ！？」

なんとかその手の下から抜け出した私は、とにかくまずは着替えしてくる、と慌てて自分の部屋へと一時避難したのだった。

おでんとすき焼きとソーセージ

「いただきますーす！」

部屋着に着替えた私が食卓につくと同時に、三人手を合わせて鍋に一礼。ちなみに、部屋着がユニクロの子供用だということは、私だけの秘密だ。

さっそくビールに手を伸ばす私を、それを持ってきたドイツ人は嬉しそうに見ている。

「コムギはドイツの人みたいです」

「まあ、負けないくらいにビール好きなのことは認めるよ」

日本人がドイツドイツと呼ぶ国は、本来は『ドイツランド』と発音するらしい。

このムキムキのドイツ人が、『ドイツ』と口にする様は、激しく可愛い。チュっってもう、ねえ？

そのドイツ人も持参した馬鹿でかいジョッキでぐびり、とビールに口をつけた。彼が言うにはこれが普通サイズとのことだが……あなどれんな、ドイツ！

にしても、うまい。

ワインに引き続き、これだって輸入食品を扱う店に行けば、けっこうな値段するぞう。しかもわざわざ本国から送ってきたって。もしかして、金持ち？

ちくわぶの熱さに、はふはふ言いながら涙目になっているドイツ人を横目で見てみると、何を思ったのか新しくビールを開けて差し出される。

そうかそうか、あんたの中では私はそういう生き物か。よし、ありがたくいただく。

「麦子ったらあ。本当に、誰に似たのかしらねえ。こんなちっちゃいのに、そんなにどこに入っていくのかしら」

「ちっさい言わないっ」

「コムギ、バカ可愛いですよ」

「フロローになってないっ」

お客様の中に、ツツコミの方はいらっしやいませんか！と叫び出したくなるような惨状に、今はここにいない父の存在を思う。が、よく考えれば気の優しい父は常識人ではあるが、天然おっ通りの母にさえツツコミをいれられない人なのであった。

しかたなく、昆布を口に放り込みながら考える。ここは話題転換を要求しよう。うん、それがいい。

「ねえ、オリーは日本でなにやってる人なの？」

なぜかおでん鍋の中に入っているソーセージを箸で器用につまみながら、ドイツ人は私の問いかけにこちらを見る。ドイツ人とソーセージ。絵的には間違ってる。

どうせ母が『ドイツソーセージ』くらいの短絡的な勢いで、普段は入れないそれをぶちこんだということだろう。味は悪くはないけどさ。

「オリーは、守る人です」

「守る人？　なにそれ、何から？」

なぜか甲斐甲斐しく手渡された三本目のビールを飲みながら、私は首を傾げる。

ていうか、おまえは私の嫁さんか。ふたまで丁寧に開けてくれるから、私は飲むだけ。それでいいのか、ドイツ人！

「タマが飛んでくる。オリーはそれから、守る人です。仲間に指示します。怒ります。蹴り返して、仲間助けます」

うええええ。なにその危険なお仕事。

そのがたいからして、どうやっても堅気のお人じゃないとは思ってたけれど、それはつまり――。

「まあ、かっこいいっ。SPねっ、SPなのねえっ」

「SP？ オリー、GKですよ？」

「ドイツではそう言うのかしら？ 身体をはるお仕事なのねえ」

もっと食べなさい、と何やら感激しきりの母が、ドイツ人の皿に大根やらはんぺんやらを特盛りにする。

SPかどうかはともかく、このドイツ人が何かの警備員らしいってことはわかった。

見た目はともかく、意外と細やかで優しい彼がそんな荒事を生業にしているとは、意外である。怒るところなんて、想像もつかないけれどねえ。

見慣れてくると多少可愛く感じられるその笑顔を見つめていると、何を思ったのかドイツ人、今度は袋の中からワインを取りだしてみせた。

「ヴァイスヴァイン？」

「オリーは私を正しく誤解しているよ！ いただきますっ」

文句は忘れず、しかし私は素早く立ち上がって食器棚からワイングラスを二脚取りだし、目の前に置く。

心得ているとばかりに見事な所作で手早くコルクを抜いたドイツ人が、なみなみとそれに淡い金色の液体を注ぎ、私たち二人は気分良く杯を持ち上げた。

「こういう時、ドイツではなんて言うの？」

「プロースト！」

嬉しそうにそう言う彼につられて、私も思わずにっこりと笑う。

「プロースト！」

そんなこんなで始まった、いかついドイツ人との近所付き合い。その私たちふたりは今、なぜか近所のスーパーで一緒に買い物なんかをしてしまっている。

しかも、まるで恋人のように手まで繋いでいる。な、なぜ？

隣で口笛を吹いてご機嫌なドイツ人を恐る恐る見上げると、それに気がついた彼はますますその笑顔をきらめかせた。

こらこら、そこらの子供さんが顔を引きつらせていますよ、ドイツ産なまはげに。

「ムッタアが、今日はスキヤキですよ。お買い物、行って来い！オリー、スキヤキの歌、歌います？」

「歌わんでいい、てかスキヤキの歌ってなんぞ！」

ぶんぶんと繋いだ手を振るドイツ人に、私は文字通り振り回される。やめれ！

合わさった手のひらの大きさもそうだが、歩幅もずいぶん違うはずなのに、気がつけばドイツ人は私に合わせて歩いていてくれた。

それに気付いて、なんとなくそわそわする。この小学生的外見から、今まで学校や会社ではさんざん子供扱いはされてきた。けれど、こういう風に女の子扱いされたことはない。欧州のエスコート術なのか！？

しかし、所詮はゴリラと見た目小学生。スーパーに入ったときから、周りの目が痛い。

なんていうか、「あれは親子？」「いや、違うでしょう」みたいな会話がね、背中から聞こえてくるわけですよ。

うう、早くお買い物すませて返ろう。

「ええっとオリー、野菜から行くよー……っておい！ 何してんの！」

渡された買い物メモを見ていた私がそう言って、静かになった隣を見てみれば、店内で目立ちに目立ちまくっているドイツ人の姿はソーセージコーナーの前。お前はパブロフの犬かつ！

慌ててそちらに近寄って行くと、その気配を感じて振り返ったドイツ人の瞳がすっごく輝いている。もう眩しいくらいの青い瞳。

「コムギ！ これ素敵ですね！ グートウシェーン！」

「はあ？」

野球のグローブかと思えるほどにでかいその右手に握られていたのは、まさかの子供用ソーセージ。魚肉。しかも、戦隊もの。

まだ隣の女の子向け魔法少女にひかれなかっただけ、マシなのか？

「これ、カコイイ！ コムギ、買って！ 買って！」

「どこのお子様なのよ……」

ものすごい勢いでアピールしてくるドイツ人に呆れた視線を送るが、当人はどこ吹く風でこちらに迫る。だから、遠近感狂うからそんなに近付くなって。

「そんなの、高い割には中身があんまし入ってないし、却下」

「悲しゅうございますよ！　オリーはこれが必要なものだと考えます。素晴らしいデザイン、オリジネル！　中には四つ。ファータア、ムッタア、コムギにオリー。最高です。仲良しの証ですね！　いかがですか？」

「いかがですもなにも」

あなたはなぜスーパーのソーセージコーナーで、とどろく美声を使って演説なんかを始めちゃったりしているんですか、と小一時間こっちが問いつめたいわ。

さっきまでは怖いもの見たさだったお客さん達が、あまりのくだらないこのやり取りに、くすくすと笑い声を漏らしている。

期待に満ちた顔でつきだされたそれを受け取るかどうか迷っていると、くいと服の裾を誰かに引かれた。

驚いてそちらを見れば、小学生低学年の男の子がひとり。何だかしたり顔で私を見詰めている。

「姉ちゃん、買ってやれよ。可哀想だろうが！」

哀れむような瞳を向けられたドイツ人は、わかってるんだかわかってないんだか、思わぬ援護射撃に大きく頷いた。なにこれ、私悪もんくさくない？

頼んだぞ、となぜか偉そうに言い置いて、同じソーセージを掴んだ男の子は、先で待つ母親のもとに走っていく。た、頼まれてもな

あ。

「コムギ……」

「あーもう、わかった！　ひとつね、ひとつだけだからねっ」

やけになってそう叫ぶと、オリーはぱっと顔を輝かせ、突然私の身体をぎゅうっと抱き込む。ええええ。

大きな背中を折り曲げて私を胸の中に閉じこめると、頭のとっぺんに頬をすりすりとすり寄せてきた。

ちよ、ちよ、ちよ！　あの、なんか心なしか私の身体、地面から浮いてますよね！？

「Ich liebe Dich、コムギ……」

「わわわわかった、よくわかんないけどわかったからっ」

「Sei doch immer bei mir nahe zum Greifen……」

ええい、何を言っているのかわからん！　ジャパニーズプリーズ！

ドイツ人はじたばたと暴れる私の身体をそっと離すと、少しだけ頬を染めて微笑む。その青い瞳がなんだか熱っぽく私を見つめるのは、なんでだろう？

呼吸的な意味で真っ赤になった私に、再びそのいかつい顔が近付いて、そして。

ちゅっ。

鈴木麦子二十五歳、初めてのキスは近所のスーパー。しかも、ソーセイジコーナーの前でしたー！。

日独同盟破棄!?

「日独同盟を破棄したい。切実に、ものすごく!」

日本酒の入ったコップを割れない程度にがつん、とこたつの天版に叩きつけ、私は隣に座るでかい生き物を睨み付けた。

ダイニングから続く居間、テレビの前のこたつにて。なぜか満足げな顔をしたドイツ人は、心得たように私のコップにお酒をつぎ足している。いや、間違っただけじゃない。

「みかん、おいしいですね」

「田舎からの直送だぞ、当然! ……じゃなくて、ちょっと近いっ」

そもそもこたつって四面あるじゃないの。どうしてわざわざ隣に座るのかなあ!?

しかも、無理矢理隣に身体を押し込んできたドイツ人は、ぎゅうぎゅうと私に寄ってくる。おいこら、懐くんじゃないっ。

「狭いっ! オリーはあっちに座ってっ」

「狭い? オリーは狭くないですよ?」

でっかい手でちまちまとみかんの皮をむくドイツ人は、私の言うことがまったくわからないとでもいうように、ことごと首を傾げてみせた。か、可愛くなんかないんだからねっ。

「誰があんたの意見を訊いた! 私が狭いのっ。潰れるのっ」

「に、日本酒、おかわりっ」

「Ja!」

あのあと、なんだか客室にお泊まりしていたドイツ人に私が叩き起こされたのは、次の日の朝。日曜日の七時三十分。正気の沙汰とは思えない。私の日曜日を返してよう!

ていうか、未婚女性の寝室に勝手に入ってくるって、あんたの国は騎士の国だろうがっ。

「コムギ、早く早く。始まりますよ!」

「ううう、何がよ……? って、ちょ、抱き上げるなっ」

何かそわそわしているなと思っていたら、なかなか起きあがらない私に焦れたドイツ人は力業に訴えた。

つまり、パジャマ姿の私をベッドから抱き上げ、そのまま階段を下りて居間へと向かう暴挙に出たのだ。小学生体型とはいえそれなりに重いはずの私を抱えても、ちっとも危なげのない足取り。素早くテレビの前までやってくると、こたつの中に私を押し込んだ。

そして、キッチンからオレンジジュースを持ってきて私に渡す。そのまま当然のように私を背後から抱き締め、彼もこたつへと足を伸ばした。待て、この位置はもう決定なんですか。

寝起きの頭に次々と浮かぶ疑問は、あわあわという不明瞭な言葉でしか出てこない。そんなことにおかまいなし。ぷちん、という音とともにテレビを点けると、ドイツ人は私の頭を顎でぐりぐりと撫でてきた。

痛い痛い痛いってばっ。

「ソーセージ、始まりますね」
「意味がわからない！」

画面を太い指でさすドイツ人に不機嫌を伝えつつ、私はオレンジジュースを一口飲む。気遣いのできるいい人ではあるんだよ。ちょっと斜め上に行きがちだけど。

まだ眠気の取れない目をごしごしと擦っていると、どこから出てきたんだか、まだほかほかしている濡れタオルで顔を拭われた。なんか、介護？

少しずつ覚醒していく頭の隅でそんなことを考えていると、目尻にちゅっとキスされる。

ゆ、油断も隙もあったもんじゃないね！

「ほら、コムギ！」

赤くなった頬を誤魔化すように首を振った私に、妙にはずんだ声でドイツ人が再び話しかけた。だから、なにがどうしてなんだというの！

促されるまま、仕方なくテレビに目をやった私がそこで見たものは――。

『あーいーとーゆーうきー！ かかげーとーゆくーんーだー！ ライオンジャー！』

……ああ、ソーセージ。うん、ソーセージね……。

何が悲しくて二十五歳独身女性が、三十五歳ドイツ人と一緒に日曜の朝から戦隊ヒーローを見なければならぬのか。

そんな疑問に思いつき脱力してしまった私は、背後にある広い胸に背を預け、大きくため息をついた。その行動に何を勘違いした

んだか、より密着してきたドイツ人は、ライオンジャーについて一
所懸命説明をしてくれる。

「ライオンジャー、悪いと戦います。レッヒトウントフライハイ
ト！」

「うんうん、はいはい。ライオンジャー、かっこいいねっ」

いい加減あきれて適当にそう返すと、ドイツ人はなぜか一転、悲
しそうな顔になる。

まるでジャーマンシェパードがご主人に叱られて、耳と尻尾を垂
らしているが如く。あれ、でも今私、ちゃんと同意したでしょうが。
何が不満じゃっ。

「オリーとライオンジャー、どっち？」

「は？」

「オリーとライオンジャー、どっちが素敵ですか？ どっちを愛し
ていますか？」

ええええええええ。そういう話なの！？

口元は微笑んでいるけど、真っ青なその目がまったく笑ってない。
顔怖い、顔が怖いよ。

どう答えればこの地獄から抜け出せるっていうのっ。

「コムギ！」

ええいっ。

迫り来る悪鬼の如き顔に耐えきれず、私は思わずぎゅっとその首
に腕を回した。しかし、太い首に身体だ。膝立ちになって両腕を回
しているというのに、私では彼の身体を抱き締めきれない。

その鍛え上げられた固い身体の感触に、走り込みと筋トレを趣味

とする私はつい感動してしまった。胸板厚いなあ！

すると突然、強い力で抱き締め返される。ぐああああっ。さばおりっ、さばおりになってるってえ！

「ラブ注入！」

「どこで覚えたそんな言葉ーっ！　ていうか出ちゃうっ、内蔵が出ちゃうっ」

「コムギ、M o e c h t e s t d u m e i n e F r a u w e r d e n ! ? 」

「くくく、苦しいってば！　もうっ、わかった、わかったってばああああ！」

その後さんざん締め付けられてぐったりした私の顔に、ちゅっちゅとキスを降らせたドイツ人は、朝ご飯までしっかり食べて自分の家へと帰って行った。

この時、自分が何に同意してしまったのか、私はまだ知らない。なんていうか、ドイツ語なんて嫌いだっ。

モアフェイマスセレブゴリラ！

そんなこんなでひどい週末を送った、月曜の朝。

いつも通りに出勤した私は、隣の席の後輩がいそいと机の下に何かを挟み込んでいるのを目撃した。あれは……グラビア？

「羊子ちゃん、羊子ちゃん、なにに、それ。沖縄消防団の半裸カレンダー？」

「いやだ、麦子先輩っ。いつ私がそんな破廉恥なもの持ってきました？」

「先週」

お弁当組がお昼を食べる会議室で披露したことを、よもや忘れたとはいわせんぞ！

しかも、それはいまだこの残念な美人である後輩のロッカーに、思いつきり貼られている。どの口が言うかつ、と後輩をぴよぴよ口の刑に処した私は、改めて机の下の写真に目をやった。

それは、どこかで見たような、いかつい顔の外人が写ったポスタ
ー。

薄い金色の短髪に、青い瞳。高い鼻にがっしりとした輪郭。太い首に分厚い身体は、何かのユニフォームに包まれ、白い網の前で仁王立ちになっていた。なんていうか、浅草によくいる風と雷の神様っぽい感じ。写真なのに、威圧感が半端ない。んん？

いやあ、世界にはよく似た人間が三人いるっていうけれど、ねえ？

「あらっ、麦子先輩も好きですか、この人！ いい具合にムキムキで素晴らしいですよえ。この不動明王かってところが素敵……」

うっとりとして舐めるような視線で、羊子ちゃんは机に挟んだその写真を見つめて言う。

普段から「細マッチョとかもうあり得ないです！ マッチョって単語に謝れ！」と憤慨する後輩は、無類の筋肉好きだ。

羊子ちゃん、お願いだから帰ってきて！ 現実には！

「いや、好きっていうか、なんかよく似た生き物を最近見かけるといいうか」

「えっ！ それ本人じゃないんですかっ。彼、日本に長期滞在中なんですよ！」

「ち、違うと思うなあ。だって、その人警備の仕事してるって言うてたし」

俄然本気モードに入った羊子ちゃんをいなしながら、私は誤魔化すように笑う。

いやいや、まさか、ねえ。だってこれ、どう見ても有名人じゃないの。ばりばりに。

あのすつとぼけた日本語を話すドイツ人と、絶対違うって。違う違う。違うはずだ！

「なんか、飛んでくるタマから何かを守ってる人らしいよ。部下に指示出したり、蹴り返して助けるんだって。だから、こんな風に雑誌に載ってるわけないってえ」

「せせせせ先輩？」

前にドイツ人から聞いたことをそのまんま伝えた私に、羊子ちゃんがイケてるDJ状態に陥ってしまう。なにになに、どうした。

そして、がしりとおもむろに私の肩を掴み顔を近付けると、内緒話でもするようにひっそりと口を開いた。

「先輩、その人もしかしてオリヴァー・ビルケンシュトックさん、じゃないですよ？」

「え、オリーだけど？」

何で知ってるの、と私が訊き返そうとした瞬間。
羊子ちゃんが爆発した。

「のおおおおおおおおおおおおおおっ！」

幸いにしてまだ出勤ラッシュには早い時間だったため、遠くにいる営業部長がびくうっとこちらを振り返っただけで済む。

私は片手を上げ、何でもないことをアピール。部長は私にむかつて軽くうなずくと、またもとの体勢に戻ってくれた。いい人だなあ。当の羊子ちゃんといえば、思いつき叫んだきり、そのまま真っ白い灰になっちまっている。叩いたら直るかな、これ。

しょうがなく、私たちが社内で密かに作っている、自主的運動部の合い言葉をささやいてみた。

「好きな痛みはっ？」

「筋肉痛！ って違あああうっ！」

反射的に反応して復活してくれた羊子ちゃんは、ひとりで見事なノリツツコミをしてみせると、ぶんぶんと首を大きく振って仕切直した。

「麦子先輩、よおおおく聞いてくださいね。そのオリーはですね、サッカー選手なんですよ！ しかも、超有名所ですっ。世界レベルですっ。モアフェイマスセレブ！」

なんだその怪しい英語は、と突っ込もうとして止まる。今、なんて言った？

サッカー選手で、有名人。しかも世界レベルで？ あのドイツ人が？

いや、だってあの人、日曜だって土曜だって家にいるし。そりゃあ、毎朝一緒に走り込みしたりしてるけど、基本仕事してるのかしてないのか怪しいところだし。

まあ、平日私が会社にいる間は何をしているのか知らないけどさ。お金にはまったく困ってもないみたいだけどさ。

「ないない！ 他人のそら似に違うないよ！」

「同姓同名のそっくりさんは、もうそれ本人ですから！」

「だだだだって、このゴリラがサッカーしてるの見たことないよっ。身体は鍛えてるみたいだけど、基本自宅警備員だよっ」

「引退したんですよ、ついこの間。ドイツの名門クラブでずうっと第一GKで、しかもドイツ代表選手。なんでかすぐに来日して、どっかのチームの臨時コーチしてるはずですよ？」

「サッカー詳しくないし！」

ショックから回復した羊子ちゃんに代わって、今度は私がガクガクブルブルと震え出す。聞いてない。まったく聞いてない。

いや、ドイツ人は言ったつもりかもしれないけれど、私を含めて母も彼が警備の仕事をしてるって今の今まで信じてたんだよ。母はきっとまだ信じているよ！

油が切れたロボットののような動作で、私はショック状態のまま無言で席に戻り、ノートパソコンを開く。忘れよう。ここから一時間前の記憶を削除しよう。ええと、デリートボタンはどこだ。

「麦子先輩、それ電源入ってないです。それに、デリートキーをどっただけ押しても、現実には消えないですからねー」

冷静な後輩のツツコミが痛い。ううう。

そんな風に始まった私の月曜日が、前日のごとく散々だったことは言うまでもない。あきらかに挙動不審な私を、同僚や上司は心配そうに遠巻きに見る。なぜか色々な菓子を献上されるのは、私の見た目があれだから。

いつもなら「Not! 子供扱い」と断るが、今日はそんな余裕すらなかった。頭の中をゴリラ的な何かがぐるぐると駆けめぐる。午後になっても立ち直れない私は、上司から早退命令を発令され、会社から帰されてしまった。しかも、なぜか羊子ちゃんがロッカーに常備していた、あのドイツ人の写真集なるものも持って――。

『オリヴァー・ビルケンシュトック 霊長類最強ゴールキーパー!』

会社から帰り、早々と部屋着に着替えてベットに転がった私は、羊子ちゃんから借りてきたその本をぱらぱらとめくってみた。中身は意外と硬派な記事と写真が満載。いい太股だあ、とか思っていないよ、多分。

そこに写っていたのは、雄叫びを上げているような顔。横っ飛びになってボールをキャッチしている姿。仲間と肩を組んで笑って、時にゴールに寄りかかり涙を落とす写真たち。

それは私の見たことのない、隣のドイツ人の姿だった。なんとなく、赤面。

恥ずかしさを誤魔化すように、私はひとりごちてみる。

「これ、本当にオリーなのかなあ」

「本当にオリーですよ」

「うわああああああっ」

こっそりとエロ本を見ていたら、母親に乱入されてしまった男子中学生かっつくくらい、私はベットの上で跳ねる。かけられたその声に振り返れば、奴がいた！

だから、なんで、うちにいるの！ ドイツ人！

私は慌てて枕の下に写真集を隠そうとするが、間に合わない。それはさっさとドイツ人に取り上げられてしまった。

そしてなにやら真面目な顔で写真集と私を見比べると、満面の笑みになる。うわあ、嫌な予感しかない、この展開。

「本物がここにいますよ、コムギ……」

ぎしっとドイツ人の重みにベットが軋む。ななななんだ、この生々しい音っ。

寝っ転がった私の身体を、囲い込むようにのしかかってくるドイツ人に息を飲む。そっと、その手のひらが私の頬に触れ、親指がゆっくりと肌を撫でた。

ぞわり、と不快ではない感覚が背筋を駆け上る。

「フォートよりもオリーのほうが、ガンツグウート！」

そう言うなり唇に柔らかい感触。何度されても慣れない口付けに身体の力が抜け、私はベットへと沈み込んでしまった。よくわからないけど、ずるい、と思う。

角度を変えて何度でも重なってくるそれが、いつの間にか私の唇を割って深く深く。何もかも飲み込むように、奪うように、どこまでも追いかけてくる舌。

酸素を求めてドイツ人のがっしりとした肩を叩けば、ものすごく

未練たらしく、最後に軽いキスを残してそれは離れていった。

甘く痺れる頭も身体も、筋肉質な彼の高い体温に支配されている。ざらりと耳に触れたドイツ人の顎。その髭のそり残しの感触にまで、反応してしまう。

「アレスクラア？」

上質のベルベットでも撫でているような低音を耳に吹き込まれ、私は意味もわからずがくがくと頷く。

そんな私にドイツ人は満足そうな笑顔をむけた。

大きくて固い手のひらが、乱れた私の前髪をさらりと撫でつけ、そのこそばゆさに私は少し肩をすくめる。

「I c h b i n i n d i c h v e r l i e b t .」

小さくささやかれた異国の言葉が切なく響いて、私はそっとドイツ人に手を伸ばし——むにとその頬を思いつきり摘んだ。調子に乗るでないっ。

多分真っ赤になっいるであろう顔のまま、四つん這いで私を覗き込むドイツ人を睨み付ける。それでもへらりと嬉しそうに笑うドイツ人は、もう本当にどうしようもない。

再びゆっくりと寄せられる唇に、私は今度こそ諦めてそっと目を閉じた。

モアフエイマスセレブゴリラ！（後書き）

ドイツさんと私、ここでいったん完結となります。

このあと、オリ―視点のお話を続けようと思っ
ていますので、よろしければそちらも覗いてくだ
さると嬉しいですよ。

妖精との出逢い

初めて彼女を見たとき、俺の身体はパンツァーフアウストの直撃を受けたかのように、ものすごい衝撃にみまわれた。

ドイツからほとんど身ひとつで来日して三日目の夜。

引っ越しの挨拶は大事だろうと、本国から持参したワイン二本を手隣の家までやってきたはいいが、チャイムを押しても返事はなし。そのまましばらく反応をうかがうが、どうやら留守だったらしい。

多少がっかりして、また後で来ようと振り返ったそこに、彼女がいた。

見るからに華奢な身体はぴしりとしたスーツで包まれ、一見して働く女性なのだとわかる。しかし、肩から提げた鞆のほうが大きく見えるくらい、彼女は小さかった。

自分が手をかざせば余裕で包み込めるほどに小作りな顔には、印象的な大きな黒い瞳。繊細な睫毛に縁取られたそれが、綺麗に切り揃えられた前髪の下から、警戒心も露わにこちらを見つめていた。
「がん、と脳みそを揺さぶる衝撃。これは、まさか妖精か!？」

「コンバンハ!」

反射的にかけた俺の声に、小さな彼女はびくうっと肩を揺らす。大きな瞳がさらに大きくまん丸くなり、魅力的な桜色の唇がぽかんと開けられた。

彼女はどうかやらこの家の住人らしい。警戒しながらも意を決したように、そろりそろりとこちらに歩み寄ってくる。

その姿たるや、まさに皇帝ペンギンのヒナ！

いや、むしろ俺の大好きなティディベアそのもの！

今すぐにも抱き締めて、自分の家まで持って帰りたい衝動を抑えつつ、俺はすぐそばまでやってきた彼女に持っていたワインを差し出した。

「隣に、来ました。オミヤゲ？」

その言葉に彼女の視線は俺の手元に落とされ、一瞬の後、ぱっと上げられた顔には大きな喜びが溢れていた。

輝かんばかりのその可愛らしい笑みに、俺の胸が不規則に脈打つ。おかしい。健康面に不安はなかったはずだが。

ぼんやりと彼女を見つめる俺にむかって、小さな手がそっと差し出された。俺ははっと我に返り、袋を渡したところで細い指に指が触れ、再び身体にびりびりとした何かがほとばしる。不快ではない。むしろ、快楽に近いその感覚。

「わざわざご丁寧に、ありがとうございます」

そうして、ずいぶんと高い位置にある俺の顔を覗き込むように、彼女はもう一度につこりと笑顔を見せてくれた。

三度目の衝撃。

チャンピオンズリーグの決勝でPK合戦になった時にも感じなかった、興奮。息切れ。目眩の症状に、俺は自分の頬が熱くなるのを感じる。これは、もしかや……恋、なんだろうか。

できるならばこのまま、ずっとずっと彼女の姿を目に焼き付けていたい！

そんな風にじっと凝視している俺に、彼女は少しいぶかしげに眉

をひそめ、困ったように声をあげた。

「あとう、ええっと……」

「オリヴァーです。オリヴァー・ロルフ・ビルケンシュトックです。ドイツから来ました」

すかさず自分をアピール。ナイスパンチングだ、俺。

絶対絶対絶対絶対、彼女に自分を覚えてほしい！

その小鳥のような声で自分の名前を呼んでほしい！

「Sie」なんてすつとばし、「du」と話しかけられたって、喜んでそれに応えよう！

「オリヴァー、さん？」

「オリーのフロインドウ、オリーと呼びます」

そう俺が重ねて言えば、彼女は少し考えた後、大人びた微笑みをこちらに向けた。俺も今度こそとびっきりの笑顔でそれに応える。

本国にいるときのように、この可憐な妖精にどうか怖がられていませんように、との願いを込めて。満面の笑みで。

それが俺——オリヴァー・ロルフ・ビルケンシュトックと、隣の小妖精、鈴木麦子との運命の出会いだった。

そもそも俺が本国ドイツから、遠く離れたここ日本にやってきたのは、日常につきまとうわずらわしさから逃れるためだった。

長年人生の一部だったゴールキーパーという仕事を辞してから、

俺を追いかける記者たちときたら、やれいつ監督になるんだ、いつ結婚するのかとこうるさい。

心底疲れていたそんな時に出会ったのが、かの有名な日本のアニメーション。

それは古き日本を舞台にした、心温まるファンタジー。二人の幼い姉妹がふくろうのような森の妖精と心を通わせる物語。素晴らしいすぎる！

俺は泣いた。三日ほど泣いた。号泣だった。

話自体もそうだが、俺が特に心惹かれたのは森の妖精。その中でも、あの小さい白いやつ。それがちょこまかと歩く姿は、俺のゴールマウスを見事に突き刺さった。

こんななりをしていても、昔から小さく可愛らしいものが大好きで、本当のプライベートな寝室にはこれでもか、というほどシュタイフ社製のティディベアが並べられている。もちろん、ひとりひとりに名前まで付けて。

幸い俺は独り者だし、金にも困ってはいない。そこで急に思い立つ。そうだ、日本、行こう！

そうして、取るものも取りあえず、俺は憧れの地日本へとやって来たのだった――。

『聞いてくれ、モトハシ。俺は昨日妖精に会った。いや、天使かもしれない』

「スタッフー、医療スタッフー！」

開口一番俺がドイツ語でそう告げると、クラブチームで一緒だったことのある元MFで現コーチのモトハシは、青ざめた顔でスタッフを呼んだ。

『なんだ、誰か怪我でもしたのか？ この大事な時期に』
『うん、なんか確実にひとり、痛いこと言ってる人がいるよね。俺の目の前に』

季節は冬だというのに、なぜか額から汗を流しながら、モトハシはわけのわからないことを口にする。思わずしかめっ面になった俺を見て、呼ばれて出てきたスタッフは一瞬にして回れ右。そのままスタッフルームへと戻っていった。

怖がられるのには慣れているが、さすがにちよつと寂しい。

あからさまにへこんだ俺を見て、モトハシは笑って肩を叩いた。

『すぐ慣れるって。時が経てばわかることがあるって言うだろう？』

「Ja, Kommt Zeit, kommt Rat.」

『そうそう、それ。せっかく日本語だって勉強したんだし、どんな話しかけてみるって。特にキーパーたちなんか、おまえに憧れて目えきらつきらせてんだから。俺がお前を引っ張ってきた時なんか、しばらく俺、神様扱いされたもんね』

にやつと彼独特のいたずら坊主のような笑顔に、俺もつられて笑みをこぼす。

俺が今臨時コーチをしているこのクラブチームは、現在ドイツで言うところのツヴァイテリーガに位置している。

現役時代、日本から移籍してきたモトハシと俺とは、彼が帰国して引退してから交流が続く、今回来日するにあたって色々世話をしてもらったのだ。

その中のひとつに今の住居もあったが、そう考えるとモトハシは俺と彼女の恋のキューピッドなのかもしれない。

ここはひとつ、モトハシの言うように日本語を使ってこの気持ちを伝えてみようか。うむ、それがいい。

「モトハシサン、オリー、あなたを大切にしたい！」

俺が最大限の感謝の意を声高に叫ぶと、練習場で柔軟をしていた選手やスタッフ一同が、一斉にこちらに顔を向けた。何か、見てはいけないものでも見てしまったかのような彼らの表情に、モトハシは泣きそうな顔で叫ぶ。

「ちがああああうっ！ 誤解だっ！ 誤解すんなああああっ！」

感謝を受けて当然だというのに、謙遜をするモトハシは本当にいい奴だ。

日本人とは本当にシャイな民族だなあ、と俺は微笑ましくそれを見守るのだった。

妖精との出逢い（後書き）

オリー編、はじまりました。

彼の性格からして麦子の時とは違い、ちょっと固めな感じになるかとは思いますが、しょっぱなから一目惚れしてましたw
まさかのドイツ版オトメンです。また、しばらくお付き合い頂けると嬉しいです。

キスとみかんとミソズツペ

初めて彼女——コムギにキスをしたのは、近所のスーパーのウルストコーナー前だった。

『ずっと、俺のそばにいてくれ……』

そうささやいて、この胸の中に抱き締めた彼女の身体は予想以上に小さく細く、そして今まで感じたことのないくらい柔らかかった。強く強くそれを感じたいような、壊してしまいたいようで怖いような、相反する幸福感に俺の頭はどうにかなくなってしまおう。

サッカーで鍛えた理性を総動員しようやく身体を離れた俺が、そっとコムギの顔を覗き込むと、彼女は可愛らしく赤く染まった顔でこちらを見上げた。

少し、非難するようなその瞳は、しかし俺のなけなしの理性をぶちやぶる破壊力を持っていた。苦しかったせいか、大きな黒い瞳がうるんで。

そして俺は、思わずその薄紅色の唇に自分のそれを重ねていた。信じられないほどの甘い、甘い感触。一瞬だけのその触れあいに、暴走しそうになる自分自身を抑え付けるにひどく苦労する。

ここは人前だ。人前なんだ。押し倒すわけにはいかない。……多分。

何か他のことを考えろ、考えるんだ、オリヴァー。そう、ローマ教皇だ。教皇の顔を思い出せ！

「おっ、オリー？　大丈夫？」

一瞬にして赤から青へと変わった俺の顔色に、恥ずかしそうに辺りを気にしていたコムギが慌てて手を伸ばしてくる。

さすがは教皇。想像以上の破壊力をもって、俺の中の悪魔を追い払ってくださった。気分は……あまりよくないが。

しかし、小さなコムギの手のひらが心配そうにお腹をさすってくれるのは、嬉しい。もしかして、これが試練を乗り越えた俺への恩恵か！

「コムギ、I c h l i e b e d i c h i m m e r u n d e w i g .
」

永遠に君を愛する、なんてまさか自分が誰かに告げることになるうとは、今の今まで想像もしていなかった。

むしろ、そんな風に愛に夢中になっている奴らを、「イタリア人でもあるまいし」などと冷ややかに見たこともあった。そんな自分が、今や目の前の妖精に夢中。

その言葉に、コムギは仕方ないともいうような優しい目をして、ぽんぽんと俺の腕を叩いて頷いた。

「わかったってば。もう、早く買い物しないと遅くなっちゃうよ？」
「Ja！」

当然のように指しだした俺の手に、少し戸惑ったようなコムギは、それでもそうっとその手を重ねてくれた。潰さないように、傷つけないように、小鳥を包み込むような繊細さをもってその手を握る。

その時俺は確信したのだ。絶対に、彼女と結婚するんだ、と。

『ということで、日本式プロポーズの言葉を教えてくれ』
「またパンチングでゴール狙うようなことを……」

本屋でそれらしい本を買い込んだ方がいいが、自分が日本語は話せても読み書きがまだ完璧ではない、ということをしつかり忘れていた。

そう言って、すべての本をどさっとモトハシの目の前に置く。すると彼は頭を抱えて机に突っ伏してしまった。既婚者である彼が頼りなのに。

ドイツであれば同棲したままの事実婚でもいいだろうが、ここは日本、そうもいかない。特に、コムギに対して俺はいい加減なことはしたくないのだ。

将来をしつかりと約束する前に手を出せば、あの優しい両親が心配するだろう。正直、このままでは俺の理性が保たない。

『……婚約して、彼女に早く手を出したい』

『いやいや、その本音は隠しとけよ!』

ぼそりと俺が呟けば、机から勢いよく顔を上げたモトハシが叫ぶ。そうして再び頭を抱えると、何かを思いついたのか、ぼしりと机を叩いて立ち上がった。

「こういう時こそ、うちの選手たちだろう!」

「センシュ……シュピーラア?」

「そう、シュピーラア。その彼女と歳が近い奴らに助言してもらったほうがいいって。ラートだよ、ラート。そうすりゃ懇親にもなるしなっ」

「R a t……」

なるほど、そう言えば主力選手はみなコムギと歳が近い。意外と参考になるかもしれないな。さすがだ、モトハシ！

「ダンケシェーン、モトハシ！」

「ぐわあっ」

感謝を伝えるべく、俺は目の前のモトハシを強く強く抱き締める。何から何まで、本当にしてもしたりないくらいだ。

腕の中で照れて暴れるモトハシの身体をいったん離し、その頬を両手で挟み込む。そして、俺はドイツ人はあまりしないキスというやり方で、最大限の感謝を示した。

右に、左に、もう一度右に、とその時。

がちやつとミーティングルームのドアが開き、事務の女性が顔を覗かせた。彼女は俺たち二人を見て瞬間的に固まると、そのままそつとドアを閉めて出て行ってしまふ。

『なぜだ、ササキサンが戻ってしまった。俺かお前に用事ではなかったのか？』

「うわああああああ！！！」

俺がモトハシにそう告げると、彼はなぜか叫び声を上げ、出ていったササキサンを追いかけて行ってしまふ。現役時代と変わらず熱いな、モトハシ！

日本人は本当に仕事熱心だ、と俺は感心してそれを見送ったのだつた。

そんなことがあってから、数日後。待ちに待ったチャンスが俺の

前にやってきた。

コムギのムッティに「田舎からみかんが届いたの、食べに来て来て!」との誘いを受けたのだ。神は俺を見守ってくださいている!俺は多少よそ行きの服に身を包むと、いそいそと隣の家の子を鳴らした。

少し間があって開けられたドアから顔を覗かせたのは、毎日でも見ていたいほど愛しいコムギだった。ああ、今日もあの日本アニメの妖精のように、可愛らしい……。

「あ、オリー、早かったねえ」

「グーテンアーベントウ、コムギ!」

「こんばんは、かなあ?」

「Ja!」

聞き取れたドイツ語に喜ぶ顔にすかさずキスを贈ると、コムギは手にしていた調理器具で俺の頭を軽く叩いた。照れる姿も初々しく、たまらない。

こちらを睨み付ける彼女は、まるでコアリクイの威嚇姿にも匹敵する可愛らしさだ。

「もう、油断も隙もないなあ。早く入って! おみそ汁火にかけたままなんだから!」

「ミソズッペ?」

ぱたぱたとキッチンにむかって駆けていく小さな背を追って、俺も今や自分の家並みに慣れてしまった廊下を抜ける。キッチンから続くダイニングに入ると、ミソ独特の匂いが鼻に届いた。

なんだろうか、この幸福感。この場所こそが人類の追い求めてきた楽園なんではないだろうか。そんな感激にひたりつつ、俺はこちらに背をむけて立つ彼女の背に近づいた。

「今日はコムギ、食事つくるですか？」

「みそ汁だね。お母さん、ご近所にみかんのおすそわけ行ってるけど、もうすぐ帰ってくるよ。あ、そこのお椀取ってくれる？ 三つね。お父さん、今日も残業だから」

真剣な表情で鍋を見つめるコムギが、こちらを見ずに指示を出す。これは……なんだかとても、新婚ぽい！

俺は言われたとおり、食器棚から三つ分の木でできたお椀を出す。そうか、コムギのファーターアは帰っていないのか。できれば家族が全員揃ったところでプロポーズしたかったのだが、仕方がない。

「オリー、みそ汁よそうから、悪いけどあっちのテーブルに持っていってくれない？」

「かしこまった！」

大まじめに頷いてみせた俺に、コムギはなぜか爆笑しながらお椀を渡す。「熱いから気を付けてね」という言葉だけで、天にも昇る心地だ。

結婚すれば、これが毎日……そう思うと、自然と気合いが入る。それに、昼間若い選手たちから教えてもらったプロポーズの中に、確かミソズツペに関するものもあったはず。

よし、それでいこう！

決意を新たに、テーブルにミソズツペを並べ終わると、俺はいそいそと再びコムギのもとへとむかった。

コムギのムツタアが帰ってきたところで、俺たちはダイニングで

の食事を開始した。

コムギの手料理、コムギの手料理、コムギの手料理。しかも、初めて味わうのだから、感激も深まる。

「オリー、みそ汁の味、大丈夫？」

一口一口大事に味わっている俺を見て、みそ汁が苦手だと誤解したのか、心配そうにコムギが訊いてくる。

ああ、もうだめだ。コムギのことが愛おしすぎて、我慢できない！俺はお椀と箸を置き、目の前に座る彼女の目をしっかりと見つめる。緊張のため、顔が引きつっているのがわかるが、仕方がない。そんな俺の態度に何かを感じたのか、コムギとコムギのムッタも箸を置いて俺を見つめ返してくる。こんな緊張感は、W杯決勝でも味わえないだろう。

「コムギ、オリーは大切な話をします」

そう前置きをすると、コムギはかすかに首を傾げながらこくりと頷く。

こうなればもう、後には引けない。俺は昼間、チームの第一GKであるイリエに聞いたセリフを、必死に頭に思い浮かべた。

彼曰く、日本で最もポピュラーなポーズの言葉らしい。

それさえ言えば絶対に伝わる！と、モトハシも自信を持って後押しをしてくれた。もしもそれで駄目だったらと、第二案まで考えてくれたキーパーチームにも感謝。しかし、緊張でそのふたつのセリフを正確に思い出すことができない。

まあ、あとは勢いでなんとか伝わるだろう！ 大切なのは気持ちだ！

こくり、と生唾を飲み、俺は覚悟を決めてその言葉をコムギに放った。

「毎日みそ汁で、オリーのパンツを洗ってほしい！」

「無理です！」

一世一代のプロポーズは、その日、なぜか失敗に終わった。

やはり日本語は難しい。機会を見てまた明日、今度はドイツ語で頑張ろうと、俺は決意を新たにしていたのだった――。

独日友好条約！

「オリーとライオンジャー、どっちが素敵ですか？ どっちを愛していますか？」

俺の軽い嫉妬に、情熱的な抱擁で答えてくれたコムギ。その柔らかい感触に、俺の理性は一瞬にして吹き飛んだ。コムギが、照れ屋のコムギが、自分から、俺に！

気がついたら俺は思いきりその細い身体を抱き締めていた。恥ずかしさに逃れようとするそのささやかな抵抗が、なお俺の欲望を煽っていく。

『コムギ、俺の妻になってくれないか！？』

顔を真っ赤に染め、俺の腕の中でおも恥ずかしがるコムギに、昨日言えなかったその言葉をささやく。やはり、母国語で話すのが一番伝わる気がするな。

俺のその懇願に、彼女は何度も何度も頷くと、くたりと力を抜いてこちらに身を預けてきた。心なしか上がっている吐息が、妙に色っぽい。

ああ、早く。早くこの奇蹟を俺だけのものにしてしまいたい！コムギの了承は得られたのだから、あとはファータアとムッタアに報告をして、それから日本ではどういう順序を踏むのかを教わらないとな。

「A n d e r e L ? n d e r , a n d e r e S i t t e n .
」、郷に入らば、郷に従えとはよく言ったものだ。

「おはよう、オリーちゃん。朝食食べていくわよね？」

「モルゲン！ ムッタア、恐^{おそ}れます！」

ひとときの熱い抱擁の後、照れたのか荒い息をしてぐったりとしてしまったコムギを残し、俺は一足先にキッチンへと足を運んだ。

もちろん、朝食を用意してくれているムッタアに、機を見て婚約の相談をするためだ。

やはり、これに関しては女親のほうがいいのだろう。

ときばきとチーズオムレツやコンスープなどを並べていくムッタアを、それとなく手伝う。といっても、俺ができることといえば、出来たての料理をダイニングに並べていくくらいだが。

「オリーちゃんのところでは、朝はどんなものを食べるのかしら」

「ドイチュでは、朝と夜は冷たいです。温かいは、お昼。お腹空いた時、午前中にちよつと食べるますよ」

「あらあ。じゃあ、こういうのは嫌い？」

ほかほかと美味しそうな湯気をたてるオムレツを指さし、ムッタアは眉尻を下げる。それを見た俺は、慌てて首を振った。

「ムッタアの料理、レツカー！ おいしい！」

「そう？ ならよかったわあ。これが鈴木家のスタイルなの。だから、麦子と結婚したらこういう朝食になると思うのよねえ」

にっこりと、俺を見上げてコムギによく似た笑顔を見せたムッタアは、ちらりと居間のほうを見ながらひそひそと続ける。

「麦子の指のサイズは、七号よ！」

「ムッタア……！」

「日本では婚約指輪を贈るのが、そこそこポピュラーなやり方なの。」

オリー、頑張るのよっ」

何も言わずとも理解してくれているムッタアに、俺は感激のあまり少しだけ涙ぐんでしまった。これで、ムッタアの了解はとれたも同然！

ファータアにはおいおい挨拶に来るとして、まずは指輪だな！

そう決意を新たにした俺は朝食をとってから家に帰ると、そのまま即行宝石店へと駆け込むこととなった。

「で、さっそく指輪を注文してきたって、そういうことか？」
「です！」

俺のプロポーズ大作戦に協力してくれたお礼に、キーパーたちにはみっちりとしたトレーニングを、モトハシには居酒屋での食事を贈る。

今日のトレーニングにイリエたちは、途中から涙を流して喜んでくれていた。指導する俺も、とても嬉しい。明日からずっとこんな感じでいこうかと思っていたら、モトハシに慌てて止められてしまったのだが、なんでだろう？

俺は頼んだビールピッチャーを傾けながら、それをなぜか啞然とした表情で見守るモトハシに頷いてみせた。

『すぐにでも欲しかったんだが、こういうのは焦っても良いことはないからな。せっかくなので、俺とコムギが会った日付も一緒に彫ってもらうことにした』

『ああ、うん。おまえから“焦っても仕方ない”みたいな言葉が聞

けるとは思わなかったんだけどその前にちよつといいか』

モトハシの真剣な顔に、俺も手にしていたピッチャーをテーブルの上に置いて向き直る。もしかしたら、婚約指輪についてなにか助言があるのだろうか。

まさか、日本では指輪は一緒に選ばなければならなかったのか！？ だったら、もうひとつ購入することも検討しよう。いや、むしろ何個でもコムギと一緒に指輪を選んでみたい。

彼女の喜ぶ顔を想像して笑顔を浮かべる俺に、モトハシは呆れたように口を開いた。

『オリー、悪いんだけどビールのピッチャーってのは、ひとり分じゃないんだぜ？』

『何を馬鹿なことを。モトハシ、このピッチャーというのはどこからどう見ても、ひとり分だ。日本ではひとりワンピッチャーだろう？ 安心しろ、もうひとつちゃんと頼んである』

『ものすごく遠慮したい、その飲み方！』

まったくモトハシは……というか、日本人というものは慎重深い人たちだ。こちらの奢りなのだから、遠慮せずともいいんだが。

タイミングよく店員が持ってきたピッチャーを受け取り、俺はモトハシを安心させるように微笑んだ。

『俺とお前の仲だ。遠慮はするな』

『命の危険を感じる仲だな……』

ぼそりと日本語で何かを呟くと、モトハシは急にテンションを上げてピッチャー同士をこつんとぶつけた。

『もういいっ、とにかくオリー、おめでとう！』

『ありがとうモトハシ!』

そのまま一気に半分ほどあけてしまう。これぞ、男同士の語り合いに必要なもの。

最初、日本のビールはなぜこんなに冷えているのだろうかと不満だったが、今やこの冷たさが逆にいい。

頼んだヴルストやエダマメをつまみながら、ピッチャー三杯目になった辺り。とろんとした目のモトハシは、なんだか楽しそうに左右に揺れながら、ばしつと目の前の机を叩いた。

「オリー、とにかくなあ、しーずーカーにいなんだぞおっ」

「しーずーカーにいい？」

「そうだっ。相手はあ、一般人なんだからなっ。あんまし騒がしくしちゃ駄目だ! できるだけスマートに、静かに事を運ぶのが鉄則だっ!」

確かに、一理ある。

コムギはそんなに騒がしいことが好きではないみたいだし、ここはモトハシの言うように『静かに』行動したほうがいいのだろう。さすがモトハシ。いい助言だ!

「モトハシ、オリー、“静かに”行動しますよ!」

「それでよしっ」

再びプローストと声を上げ、俺たち二人はピッチャーを空にする。そしてその後、なぜかたったのピッチャー四杯でふらふらになったモトハシを、俺が家まで送っていくこととなった。あれだけで酔ってしまうとは、モトハシはよっぽど疲れていたに違いない。

それでも俺のために時間を作ってくれた彼に感謝して、俺は飲み足りなさにもう一軒、居酒屋へと足を向けた。

そしてそれからひと月後。指輪を受け取った俺は、静かに行動を開始した。

コムギのムツタアから聞いた住所を便りに、彼女の勤める会社に向かう。途中、やはりこれは外せないだろうと、花屋で真っ赤な薔薇の花束を購入し、俺はひたすら静かにひと言も話さずに、その扉を開けた。

「いらっしやいま、せ……！？」

受付カウンターのような席についていたコムギが、入ってきた俺の姿を目にとめて言葉を失う。

この日のために新調したスーツだったが、気に入らなかったのだろうか。俺は密かにそんなことを心配しつつ、けれどここまで来て逃げることは許されないと決意を新たに彼女へと歩み寄った。

コムギが立ち尽くしているのを見て、隣に座っていた同僚らしき女性もこちらに向き直り、そしてそのままあんぐりと口を開けて固まる。同じように、そのフロアにいるすべての人々が俺に注目していた。

俺はそれにかまわず、足音すら立てないよう、静かに静かに彼女に近づく。そして、あと数歩のところまで立ち止まると、おもむろに片膝をつき、指輪の入った箱を開け花束とともに、コムギに差し出した。

言葉はなくとも、俺の気持ちはきつと彼女に伝わる！

そう信じて、俺はモトハシの助言通り、ただひたすら無言で“静かに”コムギに求婚したのだった――。

プロポーズ大作戦 1

君に夢中なんだ。

そうささやくと、腕の囲いから手を伸ばしたコムギが真っ赤な顔で、ぎゅっと俺の頬をつねり上げた。

ひどく甘いその痛みに、自分の顔がとんでもなく緩んでいくのがわかる。彼女はなぜこんなに可愛らしいんだろうか。そんな気持ちを抑えきれずに、もう一度唇を寄せた俺に、コムギはゆっくりと目を閉じた。

ハレルヤ！

あの時、絶対に彼女は俺を好いてくれていると思っていた。

だがしかし、モトハシの助言通りプロポーズをした俺に、コムギは「絶交」を言い渡した。

ぽかんとしている彼女の右手に指輪をはめる俺に、その場にいた誰もが惜しめない祝福を贈ってくれたというのに。

きつと、突然のことだったからだろう。最初、俺の行動に真っ赤になったコムギは、次に周りのその反応を見て、今度はその顔を真っ青に変えた。そして、心配してその頭を撫でる俺の手を振り払い早口で何かをまくし立てると、さっさと俺を会社から追い払った。

やはり、静かすぎたのだろうか。帰り道、さきぼとの彼女の言葉を思い返して、自主反省会。

それとも、持っていた指輪が気に入らなかった？ 薔薇の本数が足りなかったとか？

なぜかはわからないが、何となくまた失敗してしまったことだけを理解した俺は、そのままひとり寂しく家へと帰ったのだった。コムギの家へと。

「あらあ、どうしたのオリーちゃん。しょんぼりして」

「ムッタア……」

「入って入って。今日はいいホッケが手に入ったのよ！」

にこにこしながらそう促すムッティに逆らわず、俺はうなだれたまま家の中へとお邪魔した。もうすでに、ここは第二のマイホームである。

成人して間もなく両親を失った俺にとって、コムギのムッタアやこの家は、夢に描いた温かい家庭の姿だった。

「はい、ココア。外は寒かったでしょう？」

そう言って手渡されたカップの温もりに、俺の涙腺はみるみるうちに崩壊した。

ココアを手にしてしくしくと泣く俺は、端から見たら情けないことこの上なかっただろう。この姿をかつてのチームメイトが見たら、神に祈りを捧げるかもしれない。世界に終わりが来ないようにと。

しかしムッタアはただ優しく俺の頭を撫でてくれた。

「ムッタア、オリー、コムギに駄目って言われたです」

「いやねえ、あの子ったら。照れてるのよ、それは。昔からちよつと意地っ張りなのよね、麦子ってば」

ぼんぼんと自信をなくして丸まった俺の背を、宥めるようにムッティが叩く。そうして、手にしたままのココアを「冷めちゃうわよ」と勧めてくれた。

それに逆らわず一口飲めば、悲しい心の中に染みるように穏やかな甘さが広がる。少し、気持ちが落ち着いたのが自分でもわかった。そんな気持ちが伝わったのか、ムッタアはにっこりと笑う。

「大丈夫よ、オリーちゃん。麦子だって今頃言い過ぎたなあ、なんて落ち込んでる頃だから。一所懸命ちゃんと説明すれば、気持ちだって伝わるわ。オリーちゃんが諦めないかぎり、ねっ」

「Ja、ダンケシェーン、ムッタア」

ようやく顔を上げムッタアを見て笑顔になった時、玄関から恋い焦がれてやまないコムギの帰宅を告げる声が聞こえてきた。

俺は慌ててカップをダイニングテーブルに置くと、ムッタアに大きく頷いて見せ、急いでコムギのところへとむかう。そうだ、もう一度だけでもきちんと話そう。

俺がどんなにコムギを愛おしいと思っているのか、そばにいてほしいと思っているのか、それだけでも伝えたいんだ。

「コムギ！」

「どわあっ、おっ、オリー!？」

ひどく疲れたようなコムギの姿にたまらずぎゅっと抱きつけば、彼女は拒絶するでもなくそれを受け入れてくれた。

むしろ、恐る恐るではあるが俺の腰に手を回し、優しい手つきでさすってくれる。

その彼女の行動に俺は嬉しくなって、少し身をかめると頬をコムギの頭へと擦りつけた。

「痛い痛い痛いっ、痛いってば、オリー！」

「コムギ、オリーは話がしたいです！」

「わかった、わかったから、ちょっと離れてっ。首がもげるって！」

ばしばしと背を叩くコムギに、俺は名残惜しくもゆっくりと身体を離す。そしてコムギを見ると、彼女は頬を赤く染めたまま、二階の自分の部屋を指さした。

「とにかく、私も今日のこととか訊きたいことあるし。私の部屋に行こう」

「Ja！」

どこか怒ったように、ぶっきらぼうに告げられた言葉に俺は同意して、階段を上がるコムギのあとに続く。

コムギの部屋……それは、この前初めて深い深いキスをした思い出の場所でもある。どうか、最後まで理性が保ちますように、と気合いを入れて俺は神に祈った。

部屋に入るとコムギは鞆を降ろし、小さな丸いテーブル近くへと腰を下ろす。「座って」と俺も促され、大人しくコムギを抱えて座ろうとして、叩かれた。

「そうじゃなくて！ オリーはそっち！ 私の前に座るの！」

「えー」

「えーじゃないっ！」

思わず不満の声を上げた俺に声を荒げたコムギは、それでも大人しく指示に従った俺を見て、再び真面目な顔へと戻る。

腕を組んでこちらを睨む彼女は、可愛い。座っていても体格差によって、少しこちらを見上げるようになる黒い瞳が、俺の理性を試しているかのようだ。頑張れ、俺。

「それで、どういうこと？ これ、どういう意味？」

コムギがテーブルの上へと置いたのは、昼間俺が彼女に渡したエングレージングの箱だった。多分、指輪はその中そのまま入れられているんだろう。

身につけてもらえていないことに軽くショックを受けながら、俺は気を取り直して彼女へと説明を始める。

俺はコムギの笑顔が欲しいのだ。ずっと傍にいて、笑っていて欲しいのだ。

「オリー、コムギに楽しくしてもらいたい。だから、ダチに相談しました。ダチ、オリーに“静かに”やりなさいって言った」

ムッタアの言ったとおり俺は一所懸命コムギに説明するが、なぜか彼女の顔はだんだん曇っていく。どうしたことだろうか。

「静かにやるって、どういうこと？」

いつもと違って固く感じるその声に、俺は少し焦る。

どう言えば彼女はわかってくれるんだろう。できれば、ちゃんと彼女の国の言葉で、日本語で伝えたい。

コムギに喜んでもらいたくて、サプライズのプロポーズをしたのだと。サプライズ……サプライズ……これは日本語でなんて言うんだ？ ええと、確か……。

「ドッキリです！」

そう、多分この単語で合っているはず。

そう自信満々に答えた俺に、コムギは見る見るうちに顔を強張らせた。なぜだ？

「ドッキリ、って……」

「オリー、コムギ笑わせたい。だから、静かにこっそりドッキリしました。コムギ、楽しい？　コムギ、笑える？」

俯いてしまったコムギの顔を覗き込むように、そう俺は言葉を重ねる。

俺のこの気持ちはコムギに伝わったのだろうか。彼女の笑顔を、答えを知りたくて近づいた俺に、コムギはがばっと顔を上げると突然大きく腕を振りかぶって、そして。

「さいっていつ！　大っ嫌い！　出て行ってよ、オリーのばかあつ！」

叩かれた頬の熱さに呆然とする俺を無理矢理部屋の外へと追いやり、コムギは泣きながら部屋へと閉じこもってしまった。

俺はわけもわからず部屋の前に立ち尽くし、何度もコムギに声をかける。

しかし返ってくるのは沈黙ばかりで、仕方なく、俺は張り裂けそうな胸を抱えてムッタアのもとへと戻った。

ムッタアは俺の顔を見て何かを理解し、心配いらないと言ってくれたが、俺はその言葉に首を振ってコムギの家をあとする。

嫌われてしまった、その事実だけがひどく重く俺の心にのしかかっていた。

プロポーズ大作戦 2

（さいっていつ！ 大っ嫌い！ 出て行ってよ、オリーのほかあつ！）

愛しいコムギにそう拒絶されてから二週間あまり。俺は彼女とまったく顔を合わせることはなかった。

なにしろコムギは徹底的に俺を避けていたし、俺は俺でリーグが終盤戦ということで地味に忙しく、アウェイやなにやらも重なり、なかなかまとまった時間がとれない。

それに加えて、断り切れなかった取材を受けていたりしたら、あつという間にそれだけの時間が経ってしまったのだ。

俺は焦る。

もうコムギは俺のことなんか忘れてしまったんじゃないのだろうか。

もしかして、落ち込んだ彼女を誰か他の男が慰めていたりするんじゃないだろうか。

そんなことばかりが頭の中をぐるぐると回り、ついに俺はお気に入りのテディベアを抱いても眠れなくなってしまっていた。

『オリー、今日はいいいから早く帰って休めって』

目の下に隈をつくった俺にモトハシが声をかける。

俺が黙って首を振るとその背後から、いつかのスタッフがひよっこり顔を覗かせた。前に俺を怖がっていたその女性は、緊張したような面持ちでこちらになにかを差し出した。

そして意を決したように口を開く。

「あのっ、お疲れだって聞いて……その、この栄養ドリンクけっこう効くんです！」

見ればその手に握られていたのは、金色のラベルの栄養剤。

言い切って少し笑みを浮かべた彼女の手から、俺は驚きを隠せないままそれを受け取った。怖がられているとばかり思っていたんだが。

きよんとしたその顔がよっぽど面白かったのか、モトハシが笑いながら俺の肩を叩いた。

『だから言っただろう。時が経てばわかってもらえるって』

その言葉に、改めて目の前でこちらを見上げるスタッフを見る。彼女は緊張していて、けれども俺と目が合うとにっこりと笑ってくれた。

最初に会ったときには、こちらを見るのも怖がっていたのに。

ドリンクを受け取ったまま無言でいる俺の脇を、モトハシが肘でつついた。ぱちり、と器用に片目をつむって見せ、俺に何かを促す。そうか。

「ダンケシェーン！　オリー、ちょう頑張りますよ！」

できるだけ優しくそうに見えるように微笑むと、スタッフはとても嬉しそうに笑顔を返してくれた。そして勢いよく頭を下げると、スタッフルームへと戻っていく。

その姿に俺は、ここしばらくのみんなのことを思い出した。

めっきり食欲の減退している俺を、ご飯を食べに行こうと誘ってくれたキーパーたち。来日してからの疲れが出てきたんじゃないか

と心配して、休みを調整してくれたフロント。いつも何かと声をかけてくれるモトハシ。他の選手たちもみな、最近は覚え立てのドイツ語で話しかけてくれていた。

そしてこの栄養剤。

不覚にも俺は泣き出しそうな心地になって、ぐっと奥歯を噛み締めた。

そうだ。諦めなければ、伝えようと努力すれば、きっと気持ちは伝わるんだ。

俺はコムギに対して自分を押しつけるばかりで、きちんと彼女の気持ちを考えていただろうか。わかってほしいと言うばかりで、彼女の言葉を訊こうとしただろうか。

『元気が戻ってきたみたいだな、オリー』

『モトハシ！』

『俺の知ってるビルケンシュトックは、一回の失敗くらいじゃ諦めない奴だったと思うけどなあ？』

いつもの彼の笑みに、俺は大きく頷いてみせる。

大事な試合でミスしたときもあったし、あと少しのところで力及ばず優勝を逃したこともあった。けれど俺は絶対に諦めなかったから、今こうしてここにいるんだ。

『ということではいい、これチケット。ホーム最終戦のやつ。これ持って会いに行ってこいよ』

「モトハシ……！ オリーはモトハシが大好きですよ！」

「なんでそういうとこだけ日本語になるんだあああっ」

叫ぶモトハシをぐっと抱き締め感謝の意を表すと、俺はありがとうそれを受け取り、彼が勧めてくれたようにそのまま早めにグラウンドをあとにした。

コムギにこの気持ちをわかってもらえるまで、コムギの気持ちを聞かせてもらえるまで、絶対に踏ん張ってみようと心に誓って――。

ところが、である。

コムギの帰宅を、彼女の家の前で――今日はムツタアが留守であったため――待っていた俺の目に入ってきたのは、抱き合うようにして歩いてきた男女の姿。

薄暗い街灯の明かりに照れされたその顔は、間違いなく俺の愛するコムギ。そして、その身体に手を回して歩いてくるのは、俺の知らぬ男。

それを見た瞬間、体中の血液が沸騰したような、反対に凍り付いたような。そんな強く複雑な想いが駆けめぐり、俺は無意識にその二人に向かって駆け出していた。

「コムギ！」

ありったけの大声を出して近づくと、名を呼ばれたコムギよりも先に、男のほうがびくりと肩を揺らしてこちらを見た。

一見すると真面目そうな若い男。そいつはなぜかぐったりとしているコムギの腰に手を回し、その身体を支えている。俺は威嚇するようにそいつを睨み付けた。

「コムギ、どうしたですか！ あなたは悪いことをしてますか！」

「えっ、あの、俺……」

「Schaisse！」

吐き捨てるようにそう言って、俺は強引に男からコムギの身体を
かつさろう。

その小さくて華奢な身体をそっと持ち上げると、俺は再び目の前
の男を射殺す勢いで睨んだ。男はその俺の顔をまじまじと見つめ、
それからなぜか満面の笑みを浮かべる。

「ビルケンシュトックさん！？ オリヴァー・ビルケンシュトック
さんですよね！」

「……Ja」
「すごい！ 本物！ 俺、ドイツ代表のファンで、ビルケンさん
のことすごい尊敬してました！ チャンピオンズリーグのPKの
時とか、マジ神がかってて……やっぱい、俺本物に会っちゃったよ
！」

なんだか変な方向に行っている気がする。

男のあまりに無邪気な様子に、俺は入っていた肩の力が抜けてい
くのがわかった。どうやら、俺が考えていたようなことではないら
しい。

抱え上げられ、俺の胸に寄りかかったコムギが低く唸る。それに
気がついた男が、あっと声を上げて口を開いた。

「今日、会社で早めの忘年会だったんですけど、なんか鈴木さんす
っごくペース早くて、潰れちゃったんですよ。普段はこんなことな
いんですけど……。それで俺が同じ方向だってことでここまで連れ
てきて……。あっ、変なこととか下心とかまったくありませんから！
俺、ちゃんと彼女いるし！」

ころころと変わる表情に完全に毒気を抜かれた俺は、わかったと
いうように頷いてみせる。とりあえずこいつは悪い奴ではないらし
い。

「ダンケシェーン、あー……」

「木村です！」

「ダンケ、キムラ。コムギ、オリーが持って帰ります」

ぺこりと日本風に頭を下げると、キムラはひどく恐縮してしまった。そこでモトハシからもらったチケットが二枚あることを思いだした俺は、お礼にとそれを彼に渡す。すると、キムラは目をきらきら輝かせて喜び、「必ず彼女と見に行きますっ」と宣言し、来た道を戻っていった。

サツカーを愛する人間に悪い奴はいない。

俺はひとつ大きく頷くと、気持ちよさそうに眠ったままのコムギを抱え直し、家へと歩みを進めた。まあ、とりあえず俺のうちに運んで寝かしつけよう。

寝室のテディベアに囲まれ眠るコムギを想像し、俺はちよつとだけ湧いた下心を神に懺悔した。

プロポーズ大作戦 3

すやすやと、俺のベットでティディベアに囲まれ眠るコムギ。
そのあまりの可愛らしさに焼き切れそうな理性をなんとか押しとどめ、俺は「これくらいなら……」とか思いつつ、携帯電話でその寝顔を写したりした。ここまでなら、まだカードは黄色のはず。
そしてゆっくりと髪に手を滑らせ、そのなめらかな感触を楽しんでいるうち、いつの間にかうとうとしてしまっていたらしい。

「オリー、オリーってば！」

ぺちぺちと小さな手に頬を叩かれ、俺は深い眠りの中から意識を浮かび上がらせる。ゆっくりと目を開くと、目の前には天使。

ベットサイドの小さな明かりに照らされて、真っ直ぐな黒髪が濡れたように光っている。それと同色の瞳は、どこか気まずそうに俺を見つめ、小さな唇から俺の名前がこぼれた。

「オリー、起きて！」

「コムギ……？」

ベットの隅にうつぶせになっている俺の頭に、コムギの華奢な指がそっと触れた。あまり上等とはいえないだろうごわついた髪を、さつき俺がそうしていたようにゆっくりとすいてくれる。

ここはなんていう天国なんだろうか。

俺がそんなことを考えながらまた瞳を閉じようとする、その手が頬をぎゅっとなんだ。痛い。……痛い？

そこでようやく、はっきりとした意識が戻る。

がばりと身を起こした俺は、今し方つねられた頬に手をあて、それからベットのの上にちょこんと座るコムギを見た。

「ようやく起きた！　ずっと呼んでるのに、全然反応ないんだもん。黙って帰るに帰れないし」

少し拗ねたような言い方に、俺は胸がぎゅっと掴まれたような感覚を覚える。この目の前の可愛らしい人は、もう俺と目も合わせてくれないんじゃないかと、そう絶望していたのに。

泣きそうになりながら恐る恐る伸ばした俺の手を、コムギは拒絶することなくじっと見つめる。

そうっと触れた頬は、アルコールの余韻が残って少しだけ熱い。目の下を親指で撫でれば、コムギはくすぐったそうに身をすくめた。そして、両手でそっと俺のその手を包み込む。

「コムギ……コムギ、ごめんなさい。ごめんなさい、だから聞いて欲しい」

「オリー？」

頬から手を外し、包んでくれていたその手を改めて握り直して、俺はもう一度自分の気持ちを伝えることから始める。

何回でも、何回でも。つたない日本語でも、わかってももらえるまで。

「オリーは、コムギの笑顔が好き。天使みたい。コムギが笑うと、オリーの胸がとってもあったかい。だから、オリーはずっとずっとコムギに笑顔してほしい」

どこに恋したのか、なんで彼女だったのか。

一目惚れなんて本当に存在するのか……そんなこと、本当にどう

でもいいくらいにコムギが好きだ。

この出逢いのために全部の運を使い果たしたんだって言われても、ちっとも惜しくなんかない。むしろ、それ以上のものを、もうもらった気分にいる。

俺の言葉に、戸惑ったように彼女の黒い瞳が揺れた。

「オリーの隣で、いてほしい。他の男性に笑うの、だめです。オリはコムギを独占したい。だから、指輪買いました。コムギ、指輪嫌い？　オリーのこと……嫌い？」

「え……」

一番訊きたくて、一番訊きたくなかったことを告げると、コムギは大きな瞳をさらに大きく見開いた。握っている手が、少し震える。その右手の指のどこにも、俺が贈った指輪はつけられていない。それがすべての答えのような気がして、俺は不覚にも泣きそうになってしまった。コムギの手から片手を外し、慌てて顔を覆い隠す。情けないことこの上ない。

そのままひどく落ち込んでいきそうになった俺の頬に、今度はコムギの手が触れた。ちよつと髭がそり残されたそこを、小さな手が撫でていく。

俺がびっくりして覆っていた手を外すと、真剣にこちらを見つめるコムギの瞳に囚われた。

「ねえ、ドツキリってどういう意味なの？」

問われた言葉の真意がわからず、俺は軽く首を傾げた。すると、むにゅと再び頬をつままれる。少し痛いけど、嬉しい。

思わず緩んだ顔を見て、コムギは機嫌を損ねたように眉を寄せた。

「真剣に訊いてるのっ！　大事なことなんだからね！」

「Aua! 痛いですよ、コムギ!」

その声に限界まで引つ張られた頬をぱっと離して、コムギは不機嫌な表情のまま俺を睨む。腕組みをして、怒っているんだぞというアピールをするコムギは、やっぱり可愛い。

今、携帯を取りだしたら……駄目だろうな、やはり。

俺はじんじんする頬をさすりながら、さっきのコムギの問いに口を開いた。

「ドッキリは、コムギをびっくりさせる。びっくりするのは、喜ぶですね。オリーの日本語、間違ってますか? サプライズ、ドッキリ言わない?」

「サプライズ……のことだったの?」

「Ja」

逆に問い返されて頷けば、なぜかコムギは後ろに向かって倒れ込んでしまう。

まさか気分でも悪くなったのだろうか、とびっくりしてベットに上りその顔を覗き込めば、コムギは瞳を涙で潤ませていた。

泣いてる! 俺のせいかな!? そんなにプロポーズが嫌だったのか?

軽くパニックになる俺に気がつかず、コムギはぼろぼろと涙を流しながら俺を見る。

「馬鹿オリー! そんなの、ドッキリって言わないよっ」

「コムギ、ごめんなさい。コムギ、怒った? オリーのこと嫌い?」
「違うの!」

仰向けになっていたコムギががばりと起きあがり、覗き込むようにしていた俺の首に強く強く抱きついた。

突然の柔らかな感触に戸惑いつつ、それでも俺はその身体を壊さないようにそっと抱き締め返す。これは……どういうことだろうか。肩に寄せられた頬から涙が流れていくのがわかって、俺はとりあえず宥めるようにその薄い背中を優しく撫でる。

すると、耳元で涙に濡れたコムギの声が聞こえてきた。

「ドッキリっていうのは、いたずらってことだよ、オリー。私ね、オリーにからかわれたんだって思ったから怒ったの。プロポーズされたと思ったのに、それがいたずらなんだよって言われたから、すごく悲しかったの」

「コムギ……違いますよ、コムギ。オリーはいたずらしてないよ！オリーはコムギにプロポーズしましたよ、本当のことですよ！」
「うん……」

うち明けられた言葉にびっくりして、俺はコムギの顔を見ようとその身体をゆっくり離す。

覗き込んだコムギの顔は涙に濡れて、けれど何だかとても嬉しそうに微笑んでいた。それは、俺が一番見たかった彼女の微笑み。

本物の、俺の天使。俺だけの。

何だかとても眩しく感じられて、俺は少し目を伏せ、そして吸い寄せられるようにその唇に自分のそれを近付ける。コムギは頬を染め、拒絶することなく俺を受け入れてくれた。

最初は軽く重ね、それから舌で可愛らしい下唇を舐めてやると、コムギはくすぐったそうに身をよじる。それがまたたまらなく愛おしくて、唇で唇を挟みこみ、その先を促した。

恥じらうように薄く開けられたそこに、深く、深く俺が入り込む。直接的な感触を甘いと感じるのは、俺の頭がもういかれてしまっているからだろうか。

それでもこの腕に彼女がいて、こうして口付けができるのなら、もうそれでいい。

それ以上いけばもう戻れない、というぎりぎりのところで俺はなんとか踏みとどまり、コムギから唇を離した。

ひどく名残惜しくて、そのまま鼻や目元に口付けると、彼女はうつとりとした吐息を漏らす。俺の我慢は限界だったが、でもまだ肝心なことを彼女に訊いていない。

この先は、それからでも遅くはない！

「コムギ、オリーと結婚してくれますか？」

両手で小さな小さな顔を包み込み、そう真面目に問えば、コムギはその手に手を重ねにつこりと美しい笑みを俺にくれる。

軽く頷いて、さっきとは違う感情のこもった涙を流して。

「仕方がないから、オリーのパンツ、毎日みそ汁で洗ってあげるよ！」

その言葉に、俺は比喻ではなく本当に天にも昇る気持ちでコムギを抱き締めた。世界で一番の幸せを手にしたのは自分だと、今ならどこへ向かってでも恥ずかしくなく宣言できる。

そうして俺はコムギと一緒に寝転がる。ここがベットの上だなんて、最高の奇蹟だ！

俺はコムギの額に軽くキスをすると手を伸ばし、ベットサイドの明かりを落とした。

明日の朝、この天使を腕に抱いて目が覚ますことできるそのことを、神に感謝しながら――。

プロポーズ大作戦 3 (後書き)

オリー編、これにて完結です。ありがとうございました。
この後、ちよつと時間をおくかもしれませんが、番外編を書いてみたいと思います。

ゴールキーパーはテディベアの夢を見るか？（前書き）

直接的な表現はありませんが、事後の雰囲気があります。
苦手な方はご注意ください。

ゴールキーパーはテディベアの夢を見るか？

(コムギーっ！ コムギコムギコムギーっ！)

真っ暗闇の中、私はなぜか巨大なテディベアに追いかけていられた。

真っ黒なビーズの瞳にふかふかの茶色い身体。丸く可愛い耳をぴこぴこと動かしながら、水兵さんスタイルのそのクマは嬉しそうに私の名を呼び走ってくる。しかも、顔に似合わず野太い声で。

当然、私は全力疾走で逃げまくる。じよ、冗談じゃない！

いくら相手が見るからに柔らかそうな、可愛いぬいぐるみであつても、自分の十倍もありそうなものがどすどすと走ってくれば、逃げる。

(コムギーっ、大好きですよ、コムギーっ)

(ぎゃああああ、来ないでええええっ)

くりんくりんの毛に包まれた丸い手がこちらに伸ばされ、抵抗虚しく私はその巨大テディベアに、呆気なく捕獲されてしまった。そのままぎゅうぎゅうと抱き締められる。

よっぱどいい素材なのか肌触りはよく、押しつけられる丸いお腹もちょうどよい弾力。これが普通サイズで家にいたなら、私も素直に愛でられただろう。

けれど。

(コムギ！)

体毛が鼻に入ってこそばゆいとか、もう、そういう問題じゃない。息もつけぬほどの強い抱擁に、私は命の危険を感じ、必死に手足を動かしてそこから抜け出そうと試みる。が、そんな私を逃がすまいと、そのテディベアはさらに腕に力を込めてきた。

(I c h l i e b e D i c h ! !)

くくくくく、苦しいいいいいいい！

このままでは死ぬ、と遠く意識の中でそう思った瞬間、私はぱちりと夢から目を醒ました。

目の前には見慣れない部屋の壁。控えめな青色で塗られたそこに、うつすらとした光があたって、まるで海の中にいるような錯覚を覚える。

ここはどこだっけ、と思う前に、先ほどまで見ていたのが夢だとわかり、ほっと息を吐いた。……いや、つこうとして、ひどく胸が苦しいのに気がつく。

何かが私のお腹に巻き付いて、そこを締め上げている。く、苦しいっ。

あんな夢を見た原因はこれかと、とにかくそれを取り外そうとして……。

それは人間の腕。

光が当たって輝く薄い色の毛に包まれた、男の人の。

私の倍はありそうな、がっちりとした筋肉質の、腕。

オリーの。

そこまで確認すると、それに釣られるように甦ってきた昨夜の記憶に、私は声にならない悲鳴を上げてしまった。意味もなくじたばたと暴れてみる。

その動きに、腕の持ち主であるオリーが、私の背後でもそもそと

動く気配がした。背中側があったかいと思ったら、彼は私を抱きかかえるようにして眠っているらしい。

大きな大きな体温に包まれた私は、まるでぬいぐるみにでもなったよう。

ぬくぬくで、少し気だるくて、胸を占める安心感に私はため息をつく。そして何だか薄れていく意識に、これが幸せってやつなのかなあ、と思い始め――再び覚醒。

いやいやいや、違う違う。これ、酸欠だから！ 惑うことなく酸欠だから！

「オリーっ！　ねえ、ちょっとオリー！」

べしべしと唯一自由になる手で、腹に回ったオリーの腕を叩く。すると、背後の身体がまたかすかに動いて、冬眠明けのクマのような唸り声が聞こえた。耳元で低く掠れたその声に、自分の中のどこかが不快でない震えを覚える。

ち、違う！　そんなうっとりしてる場合じゃない！　命危険！

「起きてっば、オリー！　苦しいんだっばあっ！」

遠慮容赦なく後ろに向かって入れた肘が少しは効いたのか、ようやく腹を締め上げていた腕がゆるまった。そこでようやく深呼吸。

真面目にちよつと花畑を見た。あ、危ない……。

いまだ抱きかかえられたまま、それでも少しは自由になった私は、改めて部屋の中を見渡した。

もうすでに日は高いところまで昇っているらしい。小さく灯ったベット脇のスタンドより、薄く引かれていたカーテンから入ってくる光のほうが、強く部屋の中を照らしていた。

目が覚めて初めてに見た薄い青色の壁。落ち着いた緑色のカーテン。それがかけられた窓辺に置かれているのは、小さな観葉植物。空い

た壁のスペースには、水色のユニフォームと赤いタオルマフラー。ベットサイドのシンプルな棚の上に、電気スタンドと何個かの写真立て。その中で笑う小さな頃のオリーと、優しそうな男女の姿。これは、お母さんとお父さん？

そうしてなんとか顔をそらしてベットの上を見ると、そこにあったのは――。

「く、クマ？」

ちよこんと行儀よく並んだ六体のクマ。

それぞれに個性的な服と姿をして、黒い瞳がこちらをじっと見つめていた。

ある子はどっかで見たとような水兵服に身を包み、ある子は首に大きな赤いリボン。毛並みも短いベージュから、くるくると癖のある焦げ茶色と、多種多様。

それにしても、なぜ、クマ！

む、とその疑問に眉を寄せた時、そこに柔らかなキスが降ってきた。

「モルゲン、コムギ……」

「うあおっ、おっ、おはよう、オリー！」

挨拶というには少々過剰なほどのキスに、私が動揺しながらなんとかそう返す。すると、少しだけ身を起こしてこちらを覗き込んでいた青色の瞳が、ずっと優しくに細められた。

ひどく甘ったるいその顔に、知らず知らず頬が熱くなる。

確かにゴリラというか、ドイツ式なまはげというか、いかついんだけど。でも、基本的にオリーって整った顔をしてるんだよね。

左右対称で、鼻がすらりと高くて、金色の眉毛はちょっと薄く感じるけど、その下にある瞳は深い青色でとても綺麗。こんな近くで

見て初めて、睫毛まで金色なんだってわかった。

つまり、こんな近距離で微笑まれると……照れる。

「コムギ、身体痛いですか？ オリー、昨日頑張りましたよ」

「そういうこと言わないっ！」

満面の笑みで甘い空気をぶち壊したオリーの頬を、私は軽くつつね
ってやる。すると、へらりとさらに相好を崩したオリーは、私のそ
の手をそっと掴むと、そこにも軽く唇を当てた。

なっ、なんじゃこりゃあああ！

酸欠の金魚のようにぱくぱくと口を開け閉めする私に、続いてち
ゅっとリップ音を立ててキスをする、オリーはベットのの上に起き
あがった。

何も身につけていないその上半身に、羊子ちゃん並とはいかない
までも、筋肉大好きな私の目が釘付けになる。

厚みのある肩に、背中に、綺麗についた良質の筋肉。どこにも丸
みのない身体は、すべて真っ直ぐな線で構成されている。女性の、
曲線でできた身体とはどこもかしこも違う、安定感のある造り。

その腕に、胸に、身体全体に包み込まれると、もう怖いものなん
てなんにもないって気持ちになる。何があっても、大丈夫。

じっと見つめる私の視線に気がついたオリーが、ちょっと照れた
ようにその頬を染めた。

「コムギ、オリーの身体、気に入りましたか？」

「だからっ、そういうこと言わないでっばっ」

直接的な表現の、その裏に込められた意味まで正確に理解してし
まった私は、真っ赤になってオリーの腕をぺしりと叩いた。

嬉しそうに笑ってオリーは、ベットから立ち上がり、下に落ちて
いた衣服を手早く身につけていく。異性の生着替えなんて刺激が強

すぎて、私は慌てて目を逸らした。み、見てないからねっ、あんなところやこんなところなんて、見てないからねっ！ お尻にくくばができてるなんて、思ってたないからねっ！

ぶるぶると頭を振りながら私も毛布で身体を隠し、自分の服をかき集める。ちよっとしわになっちゃってるけど、まあ帰る家は隣だし、この際気にしないで身につける。

しかし、ものすごく気恥ずかしい。はたしてこれに慣れることができるのだろうか、私。

ん？ 慣れるって慣れるって慣れるってなんだ！？

自分のその想像力に頭を抱えていると、突然ふわりと抱き上げられて、気がついた時にはオリーの腕の中にいた。

背後にそろそろ馴染みつつある、少し高めの体温。

するっと髪をかき上げられ、うなじに唇の感触。それが恥ずかしくなるくらいの音を立て、そこにひとつ、キスを落として離れた。

「コムギ、辛いですか？」

「だだだ、大丈夫だってば！ ええと、その、あの、いっぱい気を遣ってもらって、えっと」

いかん。口を開けば開くほど、どつぼにはまっていく。

こういう時なんて答えればいいのかなんて、そんなん道德の教科書にも書いてなかったよ！ 書いてあっても嫌だけど！

なんとか、なんとかさういう話題から離れなければ、ときよろきよろと視線を巡らせる私の目に飛び込んできたのは、さっき見た六体のクマだった。

「おっ、オリー！ なんでこんなにクマがいるの！？」

「Nein！ クマ違います。ヴィンセント、アンゲラ、ルートヴィヒ、ヨアヒム、ハイディ、ミヒャエルですよ！」

「わかんない、ドイツ人わかんない……」

どうやら一体一体に名前までつけているらしいオリーに、私はさつきとは別の意味で頭を抱えた。これがドイツ基準なの？ いや、絶対違うだろうな……。

そんな私に構わずに、オリーが綺麗に並んでいるテディベアの中から、ひとつを取りあげて私に差し出す。

「オリー？」

「ヴィンセントです。オリーのムッタアとファータア、オリーが短い頃くれました。オリーの一番のフロインドウ。誰もいなくなっても、ヴィンセントがいてくれました」

「オリーのお父さんとお母さんがくれたの？」

「Ja」

そつと背後から私の膝に乗せられたそのクマは、小さな頃から一緒だという言葉通り、少しでも毛羽だっってしまったている。けれど、とっても大事にしてきたんだろう。ちっともくたびれた感じはしなかった。

私が優しく頭を撫でてやると、オリーはクマごと私をぎゅっと抱き締める。

「ムッタアとファータア、ワーゲンにぶつかりました。だからオリーは、ひとりです」

肩口に埋められた唇からそんな言葉がぽつりとこぼれ落ち、私ははっとしてベットサイドに飾られた写真に目をやった。

優しそうに、楽しそうに、幸せそうに笑うオリーと両親の姿。それはまだ少年といってもいい姿をした彼までで、大人になってからのものはない。ワーゲン——車の事故で……？

「オリー……」

今、彼はどんな顔をしているのか、背後から抱き締められている私には見えない。

もしかしたら見せたくないのかもしれないけど。それでも、私は彼をぎゅっとしてあげたくなって、何とかもぞもぞと動いてみる。

すると、突然またふわりと身体が浮いて、今度はオリーと顔を合わせるような体勢に変わった。

驚いて腕の中のクマを抱き締める私に、オリーはにっこりと無邪気な笑みを浮かべてみせる。

「だから、コムギ。ふたりは、いっぱいいっぱい子供、作りますよ！」

なに、その、超展開！

ていうか、今の今まであった私の切ない気持ちを返して！

あまりのことに言葉を失った私に気がつかず、オリーは額に頬にとまたキスを降らせていく。ちょ、ちょ、ちょ！

「子供っ、子供って！」

「Ja！ オリーはサッカーチーム作るですよ！ いっぱいで賑やかは素敵で楽しい！ コムギも一緒に頑張る！」

「ちよっ、ちよっ待って、頑張るって頑張るって、えええええ！」

素早い仕草で腕の中のクマを取り上げられたかと思ったら、なんでもかそのまま再びベットへと寝っ転がされ、私は悲鳴を上げる。

じたばたと暴れる私をマウントポジションで見下ろし、オリーは

「コムギ、落ち着いて」なんて声をかけてきた。

いやいや、どう考えてもそっちが落ち着いてよ！

するっと耳元から首筋に流れた、厚く固い感触の手のひらに、私

の身体が知らずに揺れた。それを見て、オリーはますます嬉しそうに笑う。

ちちちちち、違うっ、これは違うのっ！

「コムギ、可愛い……」

近づいてきたその青い瞳が、もはや止められないほどの熱を孕んでいるのが見え、そして私の言葉も何もかもが唇の中へと吸い込まれてしまう。

上唇を軽く食^はまれ、背筋を走る甘い痺れに思わず開いたそこへと、オリーの熱が入り込んで追いかけられる。そんなことを繰り返しているうちに私の身体からはすっかり力が抜けて、それを感じたのだろうオリーはそっと身を離して微笑んだ。

「頑張りましたよ、コムギ！」

息も絶え絶えでそれに反論もできない私は、オリーのそのあらゆる意味でやる気満々の顔をただただ睨み付けるだけだった。

そしてそれが、ますます彼の熱を煽るだけのことだったと知るのは、また別のお話。

とにかく今は、再びゆっくりと近づいてきたオリーの瞳にそっと目を閉じ、私はそれを受け止めることに集中した――。

鈴木家の野望

家に帰ったら、居間でゴリラが雄叫びを上げていた。

居間に置かれたこたつでテレビを見ながら、その大きな肩を震わせ「サツキっ、メイっ」と、どこかで聞いた名前を呟いている。涙声で。

——ん？ 名前を呟いている？

どうしてゴリラが言葉を話せるんだろうと、よくよくその姿を見れば、そこにいたのはゴリラではなく、ものすごく大きな外国人だった。

ここは自分の家だよな、と確認しながら近づく、その気配を感じたのか外人がくると振り返る。

「コムギのフアーター！」

青い目を真っ赤にしたゴリラ——もとい外人は、大きな身体の割に機敏な動きで立ち上がり、数歩で僕の前までやってくるとおもむろにがしっと抱きついてきた。

その精神的衝撃に、持っていた通勤鞆を床に落とす。とりあえず、いったい君は誰なんだ！

「あら、敦行さん、おかえりなさい」

「お父さん、お帰りー」

あらん限りの力を持って僕に抱きついている外人の後ろから、探し求めてやまない家族のおかえりコールがかかる。それに僕はほっと胸をなで下ろ——せないほど苦しいので、そちらにむかってギブ

アップの信号を送った。

「あっ、こらっ、オリー！ お父さんを絞め殺す気！？」

「コムギ、これはオリーの気持ちの強さです」

「いいから離して！ 死んじゃう！ 死んじゃうから！」

駆け寄ってきた麦子がべしべしとその広い背中を叩くと、オリーと呼ばれた外国人はようやく僕から離れてくれた。ああ、空気って素晴らしい！

ネクタイをゆるめ深呼吸をする僕の背を、麦子が心配そうにさすってくれる。娘よ、ありがとう。

「大丈夫？ お父さん」

「だ、大丈夫。もう大丈夫だよ、ありがとう」

不安そうにこちらを見上げる麦子に笑ってそう言っていると、僕は改めて目の前に立ちはだかる外国人を見やった。

黄金色の髪は短く整えられ、青い瞳は今は私をとらえて細められている。なんだかとても恐ろしい形相に見えるが、多分、これは微笑まれていると思うといいのだろう。いかつい。とてもいかつい。

鍛え上げられた体躯はさっき締め上げられて充分に理解したし、とにかく近年稀に見る巨人ではある。それも、筋肉のしっかりついた、まさに欧米人。

しかし、とそこまで彼を観察しながら、僕は首を捻った。

この外人さんを、僕はどこかで見たことがあるような気がするのだが――。

「お父さん、こちらオリー。一週間前に隣に引っ越してきたの。お父さんは出張だったから、知らなかったよね」

「Ich freue mich, Sie kennen zu

lernen! オリバー・ロルフ・ビルケンシュトックです。
ドイツから来ました! ムッタア、コムギ、大変親切でした」

低く心地よい声で挨拶の言葉を告げると、そのオリーは分厚く大きな手で僕の手をがっしりと掴む。そしてぶんぶんと上下に容赦なく振った。

シェイクハンドだとはわかるが、その力に手だけではなく腕全体が持っていていかれて、僕はがくがくと揺さぶられながらなんとか頷く。

「は、初めまして、ビルケンシュトックさん。僕は鈴木敦行すずきあつゆきです」

「オリーはオリーですよ! あー、アチュユキ?」

「敦行です」

「アチュ……アチュ……」

どうも「つ」の発音が上手くできないらしく、ビルケンシュトック——本人が言うにはオリーは、一所懸命その大きな口の中で僕の名前を転がす。

その様子がなんだかとてもおかしくて、僕は出会い頭の衝撃からようやく肩の力を抜くことができた。

「オリー、あなたの好きなように呼んでください」

笑ってそう言えば、オリーはその青の瞳をぱつと輝かせ、傍で成り行きを見守っていた麦子に確認するように口を開いた。

「コムギ、ファータアだから、オオムギ!」

「それはなしっ!」

思いがけず被って否定した私たち親子を見て、オリーはなぜか嬉しそうに笑う。

それが私と隣のドイツ人、オリバー・ロルフ・ビルケンシュトックとの異文化交流の始まり。

そのうち家に入り浸るようになった彼が、私のことを「ファータ」と呼び始めるのは、このすぐあとからだった――。

「これはね、鈴木家最大のチャンスだと思うのよ」

夫婦の寝室のベットの^上、のんびりと新聞を読んでいた僕にむかって、そう強い口調で宣言したのは僕の奥さん――玉菜さん^{たまな}である。いつも後ろでまとめられている真っ直ぐな黒髪は、寝る前ということもあって、今は肩まで降ろされている。それが、ぐっと拳を握る彼女の動きとともにさらりと揺れて、僕は少しだけどきつとする。何かを決意した大きな黒い瞳は、娘である麦子とお揃いで。奥さんの素敵なところはすべて娘にきちんと受け継がれたんだなあ、と僕は嬉しく思っていた。

「鈴木家最大のチャンスって何ですか、玉菜さん」

「聞いてくれる？」

「もちろん」

読んでいた新聞をサイドボードへと置き、ついでに眼鏡も外してその上に乗せる。そうして奥さんに向き直ると、彼女は満足そうに微笑んだ。

僕は何はともあれ、彼女が嬉しそうにしているのが好きなのだ。

「ねえ、敦行さん。私とあなたが付き合ったきっかけを覚えてる？」

「忘れるわけじゃないですよ、玉菜さん。それは、僕が『鈴木』であな
たが『佐藤』だったからじゃないですか」

彼女と最初に出会ったのは大学生になりたての頃。

流されるままに入った、『お馬さんを愛でる会』という競馬サー
クルの新歓コンパの席でのことだった。

競馬観戦という活動内容に反して、そこそこ女性の姿もあったサ
ークルだが、僕と奥さんが言葉を交わすようになったのは偶然では
ない。実は僕も彼女も、飲み会に参加していながら、お酒はほとん
ど飲めない体質だったのである。

なので、必然と盛り上がる中心からは外れ、静かな隅のほうで料
理をつまむことになる。そこに奥さんはいた。

ああ、なんて可愛いんだらう。

それが第一印象。今から思えば、僕はもうその時点で彼女に恋し
ていたんだ。

ナンパなどしたことがない僕が、さっさとその隣の席を確保して、
多少強引に自己紹介など始めてしまったのがいい証拠。

『こんばんは、初めまして。僕は鈴木敦行といいます。よろしけれ
ば、お名前を教えてくださいませんか？』

その僕の言葉にちょっとしたときよんとして、彼女はそれからくすく
すと笑い始めた。

何かおかしいことをしてしまったのだろうか、と不安になりかけ
た僕に「ごめんなさい」とひと言そえて、彼女は言う。

『私、佐藤玉菜。ねえ、面白いと思いませんか？　鈴木と佐藤なんて』

問われた内容に僕は首を捻る。

生まれてこの方、鈴木という名字で笑われたことも面白がられた

こともない。むしろ、歩いていて石を投げれば、高確率で「鈴木さん」にあたるくらいの、ありふれすぎた名前だ。

そこまで考えて、彼女の名乗った名字に思い当たる。その僕の表情を正確に読みとって、彼女は頷いた。

『私たちの名前ってありふれていて面白くないでしょう？ しかも、うちの両親なんて二人揃って佐藤なものだから、私は小さい頃からこう言われてきたの。「結婚するなら絶対に三文字以上の名字の人にして」って』

『奇遇ですねえ。僕もそうですよ。特に僕は次男だから、婿に行って名字を変えろって半ば本気で言われてます』

『まあ。じゃあ、残念ね』

僕がそう言ったとたんに形の良い眉を下げ、心底悲しそうにこちらを見つめる彼女に、僕は胸がぎゅっと詰まるのを感じた。

その時はよくわからなかったけれど、ただこの人にこんな風な顔をしてほしくない、そう思った僕は、慌てて言葉を重ねる。

『何か、不快なことでも？』

すっかりしよげてしまった彼女は、小さく首を振ってから顔を上げ、真っ直ぐにその黒い瞳で僕を見つめた。

その深い色に、僕はお酒を一滴も飲んでいないのに、くらくらと囚われてしまう。

そして彼女の次の言葉で、僕は完全にダウンしてしまうのだった。

『だって、それじゃああなたと恋ができないわ』

そう言われて「そうですね」と引き下がるほど、僕の一目惚れは軽くなかった。

強引に、ひどく滅茶苦茶に説得の言葉を重ね、僕は彼女——今の奥さんと恋に落ちることになる。

大学を卒業しても僕たちの恋人関係は続き、いざ結婚の段になって両家に挨拶に行った僕たちは、お互いの両親からものすごくがっかりされたりもした。よりによって、鈴木と佐藤が、なんて。

だから、娘が産まれた時に僕たちは冗談半分に言ったのだ。「この子こそは珍しい名字の人と結婚できればいいね」と。

もちろん、素敵な人と出逢って素敵な恋をして、幸せな結婚をしてくれればそれでいいのだけれど。

そこまで思い出していた僕は、それを察して黙っていてくれた奥さんに笑いかける。

「そうか、そんなこともありましたよねえ」

「思い出してくれた？　じゃあ、オリーちゃんの名字もついでに思い出してみてくれない？」

「オリー君の？」

言われて、近頃とても頻繁に家へと遊びにやってくる、あのいかつい彼の顔を思い浮かべる。

確か、彼の名前は——。

「ビルケン、シュトック……じゃないですか？」

「ぴんぽーんっ。さすが旦那様！　ねえ、敦行さん、数えてみてよ。ビ、ル、ケ、ン、シュ、ト、ッ、ク！　八文字よ、八文字！　素晴らしいことじゃない？」

「はあ……」

なんだか急に飛んだ展開にうまくついていけず、僕はきらきらと目を輝かせる奥さんに、気の抜けた返事を返す。奥さんは天然だ。いつもその突飛な言葉にツッコミを入れてくれる娘は、今ここにはいない。

「あの、それがどうしましたか」

「どうしましたじゃないわよ、敦行さん。これで、鈴木家佐藤家の野望がついに結実するんだわ！ 麦子・ビルケンシュトック……素敵！」

「ええっ」

あまりのことに、思わず大きな声を出してしまう。

いつの間にそんな展開になったのだろう。僕の可愛い娘と、その倍以上はありそうな立派な体躯のドイツ人。

確かに、やたらとオリー君が娘のことをかまっているように感じたが、それは彼が意外と可愛らしいものが好きらしい、ということなのかと思っていたのに。

なんだか、悲しい。

「あら、反対なの？ 敦行さん」

「そうではないのですが……なにか、切ないものですね。ついこの間まで小さかった——いえ、今でも充分小さいんですけど。その娘が、もう恋をする歳になったのかなあ、と思うと。ねえ……」

「ちょっと遅いくらいじゃないかしら？ あの子の年の頃は、もう私たち付き合っていたんだし。私ねえ、もうお義母さまに電話しちゃったわよ！ ついに鈴木家から八文字の名字が産まれますって」

「それは、その……よかった、ですね」

複雑に響いた僕の言葉には気がつかず、奥さんはにこにここと「お義母さま、とってもお喜びだったわよ」と教えてくれる。あの母は

……諦めていなかったのか。

はあ、と思わず出てしまったため息に何を感じたのか、奥さんは僕に身を寄せると、頭を優しく撫でてくれる。

「大丈夫。オリーちゃん、麦子とちよつと歳も体格も離れてるけど、とってもいい人よ？ 麦子のこと一番に考えてくれて、愛してくれてるわ」

「そうですね……二人を見ていると、何だか僕たちを思い出します」「私も！ ねえ、きつと私たち、すぐにお祖母ちゃんとお祖父ちゃんになっちゃうかも」

ちゅ、と額に軽く触れたその柔らかな感触に、僕はいつまでも慣れることなく胸をときめかせる。そして、その心のままに奥さんを強く抱き締めた。

この人と出会ってそんなに時間が経ったのかと、僕はその切なくなるくらいの幸せを噛み締める。

「愛してます、玉菜さん」

「私もよ、敦行さん」

額をくっつけて、思い出が刻まれてお互い少し増えたしわにキスを贈りあって。

そうして僕たちは、お祖父ちゃんとお祖母ちゃんになってしまった前に、まだやり残したことがあるとベットの沈んだのだった。

鈴木家の野望（後書き）

麦子の両親は熱々。

彼女はそれを我慢できない

小さい頃から、白馬に乗ったきらきらの王子様にはなんの魅力も感じなかった。

あんな乳臭くてほっそい男のどこがいいんだろう、なんて幼いながら考えたことを考えていた私の好みといえば、筋肉。その一言に尽きる。

それも無駄に鍛えられた装飾的な筋肉では駄目。例えば消防士や自衛官、サッカー選手や柔道選手に格闘技の、そういう必要なところに必要な筋肉が必要なだけ였습니다！って感じの奴じゃないと駄目。肉は赤身が一番！

だからむしろ、王子様の護衛役だとか傭兵だとかはたまた敵役だとか、昔っからそういうムキムキな男臭い人に惹かれる質なのである。

その筋肉大好きのある意味肉食系である私が、どうして今現在、ほっそり草食系代表みたいな営業部長さまに押し倒されていたりするんだ！？

「狩野羊子さん、何を考えているんですか？」
かのうようせい

「き、筋肉について色々回想を！」

「好きですよ、筋肉」

私に覆い被さっている細身の営業部長様——和久井基^{わくいはじめ}さんは、こんな状態だというのに、いつもと変わらないのんびりとした口調で問いかけてくる。

それについ答えてしまう私も私だけれど、いやこれはその、パニ

ツクです。プチどころがメガトンパニックです。

そんな場合ではないでしょう！と私の中の仕分け人が声を上げるが、筋肉愛にはうち勝てなかったらしい。思い切り筋肉への想いを叫んでしまった。

「大好きですよ、筋肉！」

「そうですか。それならよかった。僕の努力も報われます」

え、え、えええ！？

にっこりと笑ってそのまま私へと近づいてきた唇に、反射的に目を閉じる。

ふわっと重なったその温度は思ったほど不快ではなく、いつも微笑をたたえている薄い唇の形がくつきりと感じられた。男の人だからだろうか、少しかさついたそれは軽く触れたと思うと、呆気なく私から離れていく。

もっとすごい展開を頭の中で瞬時に妄想していた私は、ほっとした反面「これだけ！？」という複雑な気持ちを心で叫びつつ、目を開けた。

別にそれ以上のめくるめく何かを期待してたわけじゃないけどね！
ないと、思うけど。

そんな私の葛藤を知ってか知らずか、和久井部長はやっぱり優しい微笑みで口を開く。

「僕ねえ、最近ボクササイズを始めたんですよ」

この、いかにもこれから僕たちアハンウフンなことおっぱじめますよって体勢で、突然そんなことを言い始めた部長に、私は思いきり「はあ！？」と声を上げてしまった。

あ、いや、その、上司にむかってその口の利き方はないだろうとは思ったが、それを言うなら部下に対してこの体勢もないだろう。

あああ、もう何言ってるの、落ち着けっ！ 落ち着け私っ！

「だって狩野さん、格闘家みたいな割れた腹筋がお好きなんですよ？」

「ちょうど好きですけど！ 否定しませんけど！ それが今この状態と何か関係があるんでしょうか！」

言った。言ってやったよ！

うっかりと部長のかもしれない出す癒しのマイペースに飲み込まれてしまったが、ようやくここからは私のターン！とばかりに反撃を開始する。

両手を部長に掴まれ、ベットに縫いつけられていなければ、ここでガッツポーズも追加したかったが仕方ない。すると、部長は変わらず笑顔のまま次の話題に移る。

「狩野さん先週、営業の神林君に告白されましたよね」

「なななな、なんで知ってるんですかあっ」

「僕、営業部長なので」

「関係あるかああああっ」

相手が上司であるという遠慮をかなぐり捨てツツコミを入れた私に、よくわからない答えを出す部長。営業部長って、営業部長って、そんなことまで仕事ですか！？

予想外のところから入ったジャブに、わたたと動揺する私を見て、部長は「まあ、それは嘘ですけど」っとしれっと追加した。

この人、黒い。絶対に、六代目三遊亭圓楽さんより腹黒い！

「ボールペンのインクが切れてしましまして、備品倉庫に行ったらたまたま、ですよ」

「のおおおおおおお」

のたうち回りたいっ。のたうち回りたいので、離してくださいっ、部長！

見る見るうちに自分の顔が赤くなっていくのがわかって、私は上からその様子をじっと見ている部長から目を逸らす。そう、確かに。確かに告白されました。はい、さーれーまーしーた！

半ば自棄になって、私は先週備品倉庫で起こった甘酸っぱい記憶を引きずり出す。あれはいつも通り、切れたコピー用紙を補充するため倉庫に入った時だった――。

コピーしようと思ったら紙切れで、しかもいつもの棚にすら用紙が入っていないくて。

仕方なく私は隣の席の麦子先輩に声をかけ、事務から離れた場所にある備品倉庫へと赴いたのだった。

ここからA4コピー用紙の束を五つほど運ぶとなると、すごい重い。だから、いつもなら少し在庫が減るたびに使用者がきちんと補充することになってるはずだったんだけど。これは営業の男どもの仕業に違いない！

もう、使っていて切れたら補充しろよなあ、なんてぶつくさ呟いていた私の後ろから、その営業さんが同じように倉庫に入ってきた。見慣れないその顔は、確か今年入社したばかりの新人君で、名前は……肉は赤身君だ！

正式名称は思い出せないが、筋肉名称は私の中でばっちり管理されている。

多分、学生時代はサッカーとかバスケットか、そういう有酸素運動激しい系の部活とかサークルとかで活躍してましたって感じの、柔らかそうな脂肪の少ないいい筋肉を持っている。これでその若さゆ

えの細さがなければ、私の中の筋肉番付ではもつと上位を取れただろう、という将来有望な新人君。

その彼が、なぜか顔を真っ赤にして私へと迫ってきた。えええ。

「狩野さんっ、あ、あのっ、俺っ、好きですっ」

「備品倉庫が？」

「狩野さんが！」

ちっ、ノリツッコミで誤魔化そうとしたのに。

私のその「あらやだ私ったら天然なの」という擬体をあっさりと跳ね返し、赤身君はがしっと私の肩を両手で掴んだ。そしてそのまま、倉庫の壁に押しつけられる。

「ちょ、ちよっと！」

「好きなんですっ！俺と付き合ってください！」

「却下！」

言うが早いか、私は即座にお断りの言葉を告げる。すると赤身君はちよっと泣きそうになりながらも、ぐぐっとさらに私に顔と身体を近付けてきた。

例えるならば、雨の日に捨てられた柴犬の子供みたいな黒い瞳で、じっと私を見つめてくる。ごめん、私猫派だし。

「何ですか！」

「圧倒的な筋肉量不足です！ミルコ・クロコップまでとは言わないけど、もう少ししないと駄目！なので却下！」

「そんなあ！だったら俺、これから鍛えますっ。俺の伸びしろに期待してくださいっ」

「なし！私が男性に対して期待する筋肉は、三十代から光る筋肉です。あと十年後に期待します」

そう言っただけなら自由な手で尻を叩いてやると、赤身君はがつくりと肩を落とし、しかも涙ぐんで倉庫から退場していった。うむ、素直なのはよいことだ。

いい筋肉育てろよ！と、その後ろ姿に敬礼を送り、私はまたコピー用紙補充の作業へと戻ったのだった。

まさか、その一連のやり取りを、この和久井部長に目撃されていたとは……！

「圧倒的な筋肉量不足が原因だと知って、神林君ジム通いを始めましたよ。先週から」

若いっていいですね、とどこか他人事のように寸評を下した部長に、私は心の中で十回くらい呪いの言葉を送りつける。禿げろ禿げろ禿げろ禿げろ……。

しかし、私を押し倒している部長の髪の毛は、四十代に差し掛かろうというのにふっさふさのさらさらで、とてもじゃないが近いうちに禿げそうにもない。

むしろ、女の私から見ても羨ましいくらいのキューティクルの持ち主だ。栗色の髪に、薄いフレームの奥からこちらを見つめる、同色の瞳。全体的に色素の薄いその顔立ちには、柔和に整ってはいるが、決してなよなよとはしていない。簡単に言えば、美中年様だ。

前任である営業部長も、ワイルド熊系な美形だったが、それとはまた正反対の美形。私たち営業事務員たちの、密かなアイドルである。

いや、見ているだけならいい。だがしかし、私の好みは筋肉！

筋肉一筋！

「焦りましたねえ。あのまま神林君に若さで押し切られたんじゃ、僕には太刀打ちできませんから。せっかく、ボクササイズで頑張って腹筋を割ったのに、それじゃああんまりでしょう？」

「腹筋！？」

この期に及んでそこに反応してしまう自分を、私は愛おしいと思うんだ。うん。誰も言ってくれないので、自分で自分を全肯定。

それでよく、隣の席のちっちゃくて可愛いハムスター的な麦子先輩には、ピヨピヨ口の刑という懲罰をくらうが、それはそれで萌えるのでよし。違う、そうじゃなくって！

私のその反応に気をよくしたのか、部長は何か黒さ漂う微笑みを一変させ、なんだかお気に入りのおもちゃを自慢するような笑顔になって私に問う。

「見たいですか？」

何気なさを装ったその声音に騙され、危うく素直に頷きそうになって——かろうじて止める。今年最大級の理性を動員した。もう、今年も残すところあと一週間だけでも。

そう、そうだ。さっきまで営業と事務との忘年会だったはずだ。

なんでかいいつも以上にハイペースで飲み続ける麦子先輩は、珍しいことに早々と沈んでしまって、それを営業の木村さんに預けたところまでは記憶にある。男の人に可愛らしい先輩を預けるのは心配だったが、この和久井部長が「彼なら大丈夫でしょう」とのお墨付きを出した為、そのまま見送った。

確かに、木村さんには彼女もいるらしいし、普段から馬鹿正直で曲がったことは嫌いな人柄なので信用はある。そのまま、じゃあ僕たちも帰りましょうか、と部長に言われてそれに頷いたらこんなこ

とに。

ああ、気付いてなかったけど、私めちゃくちゃ酔っぱらってました。今さら、もう遅い気もするけど、そんなことを思い出す。

「ぶ、部長、早まらないで！ 奥さんが家で美味しいお茶漬けつくって待ってますよ！」

「今からお茶漬け作っていたら、漬かりすぎて美味しくないですよ。あと、僕に奥さんと呼べる方はおりませんので、安心してくださいね」

安心できません、まったくできません。むしろ、危険な香りがしています！

その言葉にぶるぶると首を振る私に何を思ったのか、少し悲しげに眉をひそめた部長がひっそりとため息をついた。麗しいです、部長。

「なんとなくこの歳まで独身を通してきましたが、どうも最近周りがうるさくて困りますね。ジムに通って体を鍛えだした辺りから、営業さんたちが僕にゲイ疑惑をかけまして。僕としてはもう少し穏便にゆっくりとあなたを落とすつもりだったんですが、まあ、そろそろ頃合いということなのかな、と思ったんです」

「ここここ、頃合いって！ 落とすって！」

「ずっとあなたのことを想って、あなたのために腹筋まで割ったのに、ぽっと出の男なんかにあなたをかつさらわれたりしたら、僕は泣くに泣けませんから」

だから、先に既成事実を作ってしまおうかなあ、と。

そう続けられ、私はあまりの言われように頭がくらくらしてきてしまった。なんだこの告白。ていうか、告白！？

「ねえ、狩野さん。僕の腹筋、触ってみたくありませんか？」

私がショックとパニックと何かでぐるぐると目を回していると、いつの間にか上半身裸になった部長がこちらを見て妖しく微笑んだ。ぐわあああ、なんだその色気！ 四十手前の男の色気！

言われるままに視線を落としていけば、程良く引き締まった胸板の下に、美しく割れた腹筋がこれでもか！と私に自身を主張していた。しかも、私の好みにドストライクな奴。

無意識にこぼれそうになるヨダレを飲み込めば、私たち以外に誰もいない静かなやる気に満ちあふれたホテルの部屋に、ごくつという生々しい音が響き渡った。あわわわわ。

気まづくなつてちらりと部長の顔を見上げると、なぜか彼は物凄く満足げな表情をしている。

「ね、我慢しなくていいですよ。これはあなたの腹筋なんですから」

「わ。わ。私の腹筋……」

その甘美な響きに、私の理性は崩壊寸前だった。

だって、私の腹筋だよ！？ 私がなぞったり、叩いたり、キスしたりしてもいい腹筋でことなんだよね！？

色々な角度からライトを当てて陰影を造り、それを一眼レフカメラに収めた上で、私だけの腹筋写真集を作っても許される被写体だってことだよね！？

「ほら、早く触ってみてください」

ささやくようにそう言った部長は、押さえていた私の両手を離し、そうしてゆっくりと自分の腹筋へと導いた。

そっと手のひらで触れたそれは固く、お酒のせいなのか少し熱く

感じられる。そのまま人足し指でなざると、部長の身体がぴくりと揺れた。その可愛らしい反応に、ついに私の理性は爆発し、木っ端微塵にどこかに吹き飛んだ。

がばりと勢いよく身を起こし、ぐるんと部長と自分との体勢を入れ替えると、おもむろに私を誘う腹筋に唇を寄せる。ああ、この感触！ この感触なんだよおお！

しっかりとついた段々ひとつひとつにキスをして、頬を擦りつけていた私の身体を、突然部長の腕ががっしりとホールドした。えっ、なんですか。

きょとんとして私が部長を見上げると、彼の人はずっごくとっても果てしなく黒い微笑みで口を開いた。

「触りましたね？ 舐めましたね？」

「えっ」

「もう返品はききませんよ？ 食品会社の事務さんなら、わかっていると思いますけど」

「ええっ」

その言葉に、今自分が部長の腹筋に対してやってしまったことを、思い返す。

さ、触りましたとも。な、舐めたというか、吸い付きましたとも。ええと、これ、生もの？ 食品！？

ざーっと血の気の失せていく私に対して、物凄く機嫌の好さそうな部長がぐいっと私の身体を自分のほうへと引き寄せた。近づく部長の瞳が、そらせないほどの欲望を内に秘め、私を見つめている。ああ、もう……。

「やつ、やつちまったー……」

「はい、やられました」

再び満面の笑みを浮かべ、今度は突然に深く口づけてきた部長を受け止め、私はついに降参する。さすが百戦錬磨の叩き上げ営業部長！

これ以上ないというくらいに隙間なく合わせられたその唇に、悔し紛れに軽く食いつくと、ますます口付けは深くなる。仕方がないので、私はそっと目を閉じてその部長の動きに応えた。

だって私は今、この気持ちを一慢できそうにないのだから！

彼女はそれを我慢できない（後書き）

肉食系女子、草食系男性の反撃をくらう。ジバ腹筋！

そして私は途方に暮れる

想像してみてほしい。

日曜日のゆっくりとした朝。いつもより遅い時間に起きて二度寝の誘惑を振り切り、ぐうぐうと存在を主張するお腹を宥めながら階下のキッチンへ行くと、そこにあった。

すでに高く昇った陽の光に、きらきらと光る金髪を後ろへ撫でつけて綺麗に固め、見るからに上等なモノトーンのスーツに身を包んだ巨体が。そしてそれが、なぜかピンクのふりふりエプロンをつけてキッチンに立っている光景が！

思わず三回は見直した。もちろん、寝ぼけた私の頭が生み出した妄想だと思いたくて！

するとその気配を感じたのか、キッチンに立ったそのある意味R指定本体が、くるとこちらを振り返る。そして、破顔一笑。

「モルゲン、コムギ！ 今、オリーが朝ご飯製造していますよ！」
「ああ、うん、おはようございます……」

ねえ、なんでオリーはふりふりエプロンなの？

この短い朝の挨拶の間に、私は何か人生に大切なものを諦めた。ものすごい勢いで。

その格好についてどこから突っ込もうかと思案する私の鼻に、何かが焼ける香ばしい香り。釣られてお腹が大きく音を立てた。

それを聞き逃すことなく、なんでかすっごく嬉しそうに笑ったオリーが「コムギ、フェアフォンデレですよ」と、われのわからないことを言う。

こういう時、そろそろ私も少しドイツ語勉強しようかな、と思う。

今までありとあらゆる重要な場面において、このドイツ語に誤魔化されてきた気がするからね。

そんなことを考えている間に、ダイニングテーブルについた私の前に、美味しそうな料理ののったプレートが置かれた。加えて、生クリームたっぷりのコーヒー。

「Guten Appetit!」

自信満々に差し出されたそれを、とりあえずじっと観察してみる。スライスされた何か肉っぽいものの上に、しっかりと焼かれた目玉焼き。付け合わせには薄く切って炒められたじゃがいも多数。目玉焼きの黄色の上に乗せられたハーブの緑が、おしゃれである。悔しいことに、とても美味しそう。

用意されたナイフとフォークを握りしめ、ちらっとオリーを見れば、なんか珍しい生き物の食事シーンでも見るかのように熱い瞳とかが合う。

「オリー、その……そんなに見られてると食べにくいんだけど」

「オリーは今からベルリンの壁です」

「もうそれ崩壊したでしょ!」

会社の後輩羊子ちゃんにするように、ついそのほっぺを挟んでピヨピヨ口にしてやる。すると、オリーはむしろ嬉しそうに笑って、私の手のひらにちゅっと音を立ててキスをした。ななな、なにをする!

もう、私の人生に置けるキスの容量を超えてるよ!

「冷たいの美味しくないよ、コムギ」

「わかった、わかったから手を離す!」

唇を付けたままで喋り出したオリーから、素早く手を取り戻す。
そして、私はちよつとだけ赤くなった頬を誤魔化すように、目玉焼きにナイフを突き立てた。

固めの焼き方は、私の好みである。

もしかして、前に一緒に食事した時のその言葉を、ずっと覚えていてくれたんだろうか。

「あのね、その……ありがとう」

「B i t t e S c h o ” n !」

いつ見てもどこから見ても、捕らえた獲物を今から食べますって
いう肉食獣的笑顔を浮かべ、オリーは手を伸ばして私の頭を撫でた。
珍しくそうつと、繊細な動きで乱れた前髪を整えてくれる。

優しいけれど、明らかに父親とは違う触れ方をされた私は、ひどく恥ずかしくなってしまうって無理矢理会話の方向を変えた。

「きよ、今日はどこか出かける予定なの？　なんかスーツとかだけ
どっ」

「J a、オリー、今日はメンセツです。モトハシと一緒にします」
「面接!？」

オリーの口から似合わない単語が飛び出して、私は思わず声を大きくして訊き返した。

そういえば、サッカーチームの臨時コーチだとかそこらへんの、
オリーのお仕事事情を私は詳しく知らない。

もしかや転職するとか？　ていうか、モトハシさんて、誰？

頭の中にいっぱい疑問符を浮かべている私を見て、何を思ったのかオリーはテーブルの向こう側から身を乗り出し、唇に軽いキスをした。

……私、オリーといううちに、来世分までキスするかもしれない

……。

私のその気持ちを知ってか知らずか、とたんに機嫌がMAXになったオリーは、エプロンを外してきっちり畳むと、「イッテキマース」と元気よく出かけていった。

お、おまえはイタリア人かっ!!

追いつかなかったツツコミを心の中で入れつつ、私は急激にあがってしまった体温にくらくらしながら、ブランチを続けたのだった。まさかその時、あんな悲劇が起きると思わずに――。

「おや、今日はオリー君、いないんですか？」

夜になってお母さんとのデートから帰宅したお父さんが、開口一番そんなことを訊く。

ああ、うん。あのでかいの、いないとすぐ目立つもんね。いるだけで威風堂々だもんね。

簡単な夕食を済ませ、いつも通りにこたつに入っていた私は、ネクタイをゆるめているお父さんを振り返った。

「なんかねえ、面接だって言ってたよ」

「面接？　オリー君はコーチの職についているんじゃないかな？」

「そうだと思うんだけど、詳しく聞く前に出かけちゃったから……」

もっともなお父さんの疑問にろくに答えることもできず、私はみかんを口に放り込んだ。何気なく時計を見れば、もうすでに午後十二時に迫っている。

帰ってくれば必ずうちに寄るはずだから、オリーはまだその『面接』とやらから帰宅してないってことだね。なんだか、こうしてひとりで過ごす休日も、久しぶり。

私が会社に行っている間や、本腰を入れてコーチの仕事をし出したオリーとは、平日はすれ違い気味。なので、休日の夜は必ずオリーがべったりと私に引っ付いているが、もはや私の日常になりつつあったんだけど。

背中に感じない体温や、その大きな身体がないだけで、こんなに心にぽっかりと穴が開いてしまったような気持ちになるとは思わなかった。

「麦子、オリーちゃんがいなくて寂しいんでしよう！」
「何言ってるの、お母さん！」

ぼんやりしていたところを不意に突っ込まれ、私はむせながら否定する。う、みかん丸飲みしちゃったよ……。

その慌てようにお父さんのあとから入ってきたらしいお母さんが、にやにやと意地悪な笑みを浮かべている。素直になっちゃいなさい、とでも言うように。

ああいやだ、この万年新婚夫婦め！

スーツを脱ぐお父さんの手伝いを、甲斐甲斐しくしているお母さんを横目で睨みながら、私は大きなため息をついた。まあ、少しくらいは寂しい、けどね。

そんな気持ちを誤魔化すようにお茶を飲みつつ、私はテレビの電源を点ける。すると、そこには――。

『はい、今週も始まりました、たべっちFCです！』

『今日はスペシャルゲストとして、元日本代表MF、本橋涼太郎さんと――』

『なんと、世界的GK、元ドイツ代表、オリヴァー・ビルケンシュ

トックさんにお越し頂いていまーす!』

ぶほわあっと思いい切り茶を吹く。吹いただけにとどまらず、気管に入ったそれにむせる。

「あらやだ、大丈夫なの、麦子!」と背中をさすってくれるお母さんに何度も頷きながら、私は涙目のままテレビ画面に釘付けとなった。

そこには、どこからどう見てもお昼に私が見たままの服装をした、オリヴァーがいつものなまはげスマイルで映し出されている。めめめめめ、面接って言ったじゃんよ!

「あれ、これはオリー君じゃないですか」

「まあ、本当! スーツがよく似合ってるわねえ」

「ななななな、何で!?!」

テレビの中のオリーを見て、こたつに寄ってきたマイペース両親はこの際無視する。

ちよっと待って、ちよっと待って。面接ってこんな意味があったっけ!?!

面接って就職のために色々と履歴を訊かれるってことでしょ、簡単に言うとは!

『やー、そうですかあ、オリーさんは正式にゼームレング街田にGKコーチとして就任なさると!』

『Ja、これが最初のアルバイトですよ』

『お陰様で、来季J1昇格なもんで、フロントから宣伝に行っサポーター倍増させてこいって厳命されて!』

『それは、オリーさんを客寄せパンダにってことですかあ?』

『パンダというより、ゴリラ的な何かですけどね』

『それではここで、お二人の現役時代の活躍映像を見てみましょう

！
』

……しゅ、就職のために色々と履歴を訊かれるってこと、ですね。
うん、間違ってる。

なんか負けた気がする、と私はものすごい疲れを感じて、ただ呆然とテレビ画面を見つめ続ける。

そんな私に「お父さんとお母さん、部屋にいるからね」と、両親はなにか斜め上のほうに気を利かせて引き上げて行ってしまった。別に、いてくれて構わないんだけど。

その私の目に、次から次へと現役時代のオリーの映像が飛び込んできた。

彼の部屋に飾ってあったユニフォームに身を包んで、今よりずっとずっと険しい顔で何かを叫んでいる。

肩を組んで見守るチームメイトの前を通り、ゴールの前に立つオリー。これはPKやってやつか。蹴られたボールを何度も華麗にはじき飛ばして、そして最後。オリーが歓喜の雄叫びを上げて走り出すと、チームメイトや監督までも興奮してその身体を抱き締めた。

『以上、オリーさんのチャンピオンズリーグでのPK戦を見ていただきましたが……』

『いやあ、めっちゃすごいじゃないですかあ。神がかってますよね！
』

『ダンケ！ でも、オリーだけじゃないです。他のセンシュ、決めました。だから、勝てたですよ』

きっと、その時すごく嬉しかったんだろうな。

画面からでも伝わってくる彼の喜びに、私の頬が無意識に笑みの形になる。今日は遅くなるだろうから、明日の夜にでもその時のこと聞きたいなあ。

なんて私がいい話だなあ、と油断していたそこに。

『ところでオリーさん、ご婚約されたとか!』

『Ja』

『ええー、幸せオーラですねえ、羨ましいですつ。お相手はどんな方なんですか?』

司会であるたべっちと女性アナウンサーの問いに、オリーはにっこり満面の笑みを見せた。やややややや、やばいやばいやばい。これすつごくやばい予感がしまくるよ!

オリー、壁になって! 今だけでいいからベルリンの壁復活してえええええ!!

『コムギはとっても優しいですね! 来る時、オリーにちゅうしてくれたですね!』

『うわあ、のろけだあ!』

嘘つくなあつ、オリヴァー・ビルケンシュトック!

したのは、あなただ、あなた! どっちかって言うまでもなく、私は奪われました!

強く強くテレビ画面に呪いの視線を送ろうと、その口を閉じさせることは敵わない。しかも、この番組、生放送……終わった。私の人生、終わった。

ていうか、これサッカー番組でしょうつ。もっとサッカーの話してよおとおおつ。

『じゃあ、そんな幸せいっぱいのおリーさん、最後にひとつだけその婚約者さんの素敵なところを教えて下さい!』

そんなたべっちの余計極まりない質問に、オリーは眉を寄せて考え込んだ。

よおーしよし、そのまま時間切れになれっ。生放送だもん、あんまり悩む時間だってないはず。ほら、ね、そろそろ次のVTRとかにいつちゃってよ。いつてよ！

なんて私の祈りも虚しく、すぐにぱっと顔を輝かせたオリーは、なぜか自信満々に言ってるのけたのだった。

『オッパイ大きいですね！』

ビール樽で溺死すればいいのに、このドイツ人。

その後、一週間鈴木家に出入り禁止の上、完全なる無視をくらったオリーが本橋さんに泣きつき、事の真相を明かされることになる。それはふたりがドイツで同じクラブにいた時のこと。チームメイトであるイタリア人に、本橋さんが日本語を聞かれたことが原因だった。

「女の子にカワイイねって、日本語ではどう言うの？」との質問に、いたずら大好きな本橋さんはこう答えたというのだ。「オッパイ大きいですね」だと。

それを伝え聞いて真面目にメモまで取って勉強してしまったオリーは、だから私の魅力について聞かれた時に答えたのだ。「可愛いところですよ」と、教えられたその日本語で！

必死に土下座をする二人の男に、私はもうため息しか出てこなかった。

そして決める。すぐにでも独和辞典を買いに行こうと！

その後、この話の顛末を聞いた本橋さんの奥様から、本橋さんが苛烈な制裁を受けたというのはまた別のお話――。

そして私は途方に暮れる（後書き）

オリーが作っていたのは、レバーケーゼ。そして日曜夜のサッカー番組といえば、あれです。

おっばい云々の話は、元大リーガー佐々木選手の話を元にしました。なにやってんだ、佐々木！

緑の海の騎士は恋する 1

あ、と思った時にはもう遅かった。

突き刺さるような衝撃と、あとからやってきた痛み。ひどい、苦痛。息が苦しくて、暴れ出す前に全身から力が抜けていくのがわかる。誰かの声。悲鳴。真っ白になっていく意識の中で、俺はただ緑の海に沈む幻を見ていた。

最初に目に飛び込んできたのは、今にも泣き出しそうな大きな茶色の瞳。それから、肩の辺りでどこことなくユーモラスに揺れる、ポニーテール。

「……内藤、さん？」

乾いた喉からなんとか声を絞り出すと、目の前の見慣れた顔がぐしゃりと歪んだ。まだぼんやりと霞む頭であれっと思う間もなく、俺の身体にぎゅうつと彼女——内藤駒子ないとうこまこさんが抱きついてくる。柔らかな感触。

そこでようやくばっちり目目が覚めた俺は、みっともなく動揺してなんとか起きあがろうと試みる。そういえば、俺、なんで寝てるんだろう？

そんな俺から身体を離れた内藤さんは、身を起こそうと慌てる俺をベツトに押しとどめた。

「駄目だよ、入江君。もう少し寝てなくちゃ！ 今、先生呼んでく

るからね！」

「あ、いや、その、俺……どうして」

「覚えてないの？」

きよろきよろと辺りを見回せば、ここはどこかの病室らしかった。クリーム色の清潔な室内には、俺と内藤さんのふたり。

寝かされていたベットには、今まで首辺りを冷やしていたと思われるアイスノンがひとつ。

ずきつと痛んだ頭に手をやれば、額にはガーゼが当てられていた。それに触ったとたん、その時の記憶が鮮やかに甦ってくる。

前がかりに攻め込んでいたところへのカウンター。

懸命に戻ってくるDF。間に合わない。

その網を抜けて正面にやってきた敵FW。手強い相手。一对一。

少し焦った相手が蹴りこんできたボールを受け止める。いや、取りこぼす。まずい。

転がった身体を伸ばし、ぽつんと残されたボールに必死に近づく。もう少し。

グローブに包まれた手がボールに届く。抱え込もうとした、そこへ。

迫るスパイク。衝撃。

白。

暗転。

「ああ……！」

一気に戻ってきた記憶に、俺は思わず顔をしかめた。

サッカー選手として、ゴールキーパーとして多くの試合でひやりとした経験はあるが、こんな風に激突したことは初めてだ。しかも、フィールドで気を失うなんて。

「そうだっ、試合！ 試合はどうなったの、内藤さん！」

「起きちゃだめだって！ 大丈夫、試合勝ったよ。佐々さんが交代して」

「そっか……よかった」

ほっと息を吐くと、安心したからなのか急に痛みを意識して、小さく呻いてしまう。すると内藤さんは顔を青くして、「ごめんっ、すぐ先生呼んでくる！」と大慌てで病室から出ていった——と思ったら、すぐに引き返して来た。そして、どことなく決まり悪そうに俺を見て言う。なんだ？

「あの、目が覚めたらナースコールしてって言われてたんだっ……」

赤くなったその顔に俺は思わず吹き出して、そんな俺を見てほっとしたように、内藤さんは照れたような笑みを浮かべた。

俺が頭の上にぶらさがるナースコールを押すと、内藤さんは横になってる俺のところまで近づいてくる。そして、なんだろうと見ている俺の頭に、恐る恐るそうっと触れた。びっくりして彼女を見上げれば、満面の笑顔。

「入江君頑張ったね。あそこで身体張って止めてくれたから、今日勝てたんだよ」

その言葉に、俺は見る見るうちに顔が熱くなるのを感じた。そして離れていったその手を惜しみながら思う。

ああ、俺、内藤さんのこと本当に好きなんだ——と。

俺がゴールキーパーを目指すようになったのは、今から十五年前のこと。テレビであるひとりのキーパーの言葉を聞いてからだ。それは彼のチームがアウェイに乗り込んでの試合。当然、サポーターは相手側が多く、常にトップに君臨する彼のチームはひどいブーイングの嵐に見舞われていた。

そんな中、彼が放った一言。

「Das ganze Stadion wird gegen uns sein, was schoeneres gibt es nicht.」

（スタジアム全体が俺達の敵だ、こんなに素晴らしいことはないだろう？）

ひどく楽しそうな笑顔の中で、挑戦的に輝く青い瞳が強烈に俺の印象に残った。

それまで背が飛び抜けて高いから、との理由でキーパーをさせられていた小学生の俺は、その日から熱心に練習を重ねるようになる。今まで目立つポジションであるFWやMFなんかを羨ましく感じていたが、それは違いうってことに気付いたんだ。キーパーって格好いい、心の底からそう思わせてくれた。

俺もいつかあんな風になりたい。

まるで神様を崇めるような気持ちを抱いてきた、その世界的ゴールキーパー。元ドイツ代表オリバー・ビルケンシュトックさんは今、俺の目の前で――おにぎりを頬張っている。

「イリエ！ 頭おかしい？」

練習場に入ってきた俺に気がついたオリーさんが、あらゆる意味で足りない日本語をかけてくる。もはや、その言葉の意味を正しく理解することにも慣れてきた、冬。

俺は笑って彼に近づいた。

「もう大丈夫ですよ。今日から練習復帰っす！」

冗談めかしてこんこん、と自分の頭を叩いてみせると、おにぎりを飲み込んだオリーさんは満面の笑顔になった。多分、子供だったら泣く感じの。

そうしてそのでかくて厚い手のひらで、俺の頭をわしわしと撫でる。これのほうが、スパイクと激突した時よりも痛い気がするんだけど。

「Bravo、Bravo、イリエ！ 身体は大切に。だけど、キーパー、あの気持ちも大事ですよ」

「あっ、ありがとうございますっ」

憧れの人からかけられた賞賛の言葉に、俺は涙ぐみそうになって頭を下げる。その俺の肩をばしと叩いていたオリーさんが、ふっと視線を俺の背後に流した。

それにつられるようにして振り向けば、そこにはいつもの茶色いポニーテール。ユニフォームを両手に抱えた内藤さんの後ろ姿があった。

冬の寒空の下でも、ぴんと伸びた背筋が綺麗だと思わず見とれる俺の頭を飛び越すように、オリーさんが彼女の名を呼ぶ。

「コマコ！」

「あっ、オリーさん、と入江君！」

その声に驚いたようにこちらを振り向いた彼女は、オリーさんと俺を見てにっこりと笑った。俺の見間違いでなければ、特にオリーさんにむけての笑顔だった気がするけど……このふたり、いつの間に名前で呼び合うようになったんだろう。

ついこの間までは、いかつくて大きくて、どこか厳格な雰囲気を発するオリーさんのことを、内藤さんはちょっとだけ苦手にしていたはずなのに。

嬉しそうにこちらに駆け寄ってくる彼女に、俺はざわざわとする胸の内を隠すように、笑顔を返した。

「入江君、もういいんだ？」

「この通り、ばっちり。あの時はついてくれてありがとう、内藤さん」

「い、いいよう、そんな！ 入江君はこっちにご家族いないし、頭は本当怖いからね」

改めて頭を下げた俺に、内藤さんは少し顔を赤くして首を振る。俺が病室で目を覚ます前から、内藤さんがずっとついていてくれたんだと、さっき本橋さんが教えてくれた。その顔がにやにやしていたのは、この際忘れることにする。

「コマコ、いい子ですね」

俺たちのやり取りをそばで聞いていたオリーさんが、そう言っただけで俺にしたように内藤さんの頭を撫でた。俺よりは少し、優しい力加減で。

すると、内藤さんは少し首をちぢこませ、ひどく眩しそうにオリーさんを見上げた。その表情に俺はあっと軽い目眩を覚える。だって、それは――。

「おい、オリー！ ちょっといいかあ！」

「Ja！ イリエ、コマコ、Bis dan！」

遠くから彼を呼ぶ声に答え、オリーさんは俺たちに軽く手を振ると、そちらのほうへと走って行ってしまった。

なんとなく、自分のに微妙な雰囲気になってしまったその場を誤魔化すように、俺はオリーさんの消えたほうを見ている内藤さんに声をかける。

「あー、内藤さん、オリーさんと仲良くなったんだ？」

俺のその言葉にはっと我に返った内藤さんは、顔を真っ赤にして、さっきよりも激しく首を振る。もう、それだけで答えをもらって気がしないでもないが。

「なっ、仲良くなったっていうか、あの……話してみたらなんているか、イメージと違って。その、優しくてっ。だから、怖くなくなっただけ……」

「そ、そうなんだ。わかるよ。ぱっと見はすっげえいかついけど、中身はけっこう可愛いところある人だよな」

「そうなのっ！ 可愛いっ！ やっぱり入江君、いつも一緒にいるからわかるんだね！」

俺の何気ない感想に、内藤さんは目をキラキラさせて大きく同意する。その笑顔に俺は引きつった笑みを返すしかない。

後半四十分。一對零で迎えたところで、だめ押し点を入れた気分。

俺はほんのわずかに残された期待にすぎるように、内藤さんに問いかける。

「もしかして、オリーさんのこと好き、とか？」

瞬間、これ以上ないってくらいに赤くなった彼女は、手にしていたユニフォームをすべて芝生に落としてしまった。あー……。

小さく悲鳴を上げてそれを拾い始める彼女を手伝いつつ、俺は複雑なため息をついてしまった。それをどう捉えたのか、内藤さんは慌てて俺に言い募る。

「ち、違うよっ！　じゃなくて、その、間違っではないんだけどね
！　あの……」

ちよっと悲しそうに眉を下げて、口だけで微笑む。
なんだかこっちまでぎゅっと胸を掴まれたような、そんな切ない表情をして彼女は言う。

「知ってるんだよ、婚約者さんのこと。だからね……」

片想いの、となぜかすごく嬉しそうに呟いて、「秘密だからね
！」と俺に念を押し去っていった。俺はなんとかそれに頷き返し、
そうしてその小さな背中を呆然と見送る。マジかよ。

別の意味で痛くなってきた頭を抱え、俺はゾンビのようにふらふらとロッカールームへ向かったのだった。

いりええいじ
入江衛司、二十五歳。

J2ゼームレング街田の正ゴールキーパー、三年目。
今、この瞬間、片想いから失恋に降格が決定しました――。

緑の海の騎士は恋する 1 (後書き)

オリーにプロポーズの言葉を伝授してくれたキーパー入江君の話。
少し続きます。

緑の海の騎士は恋する 2

オリーさんの婚約者である鈴木麦子さんを、ひと言で表すなら『ミニハム』だ。

癖のないさりとした肩までの黒髪に、同じ色のくりっとした瞳。つんと通った鼻に桜色の唇。それがすべて小さな顔に可愛らしく配置されて、華奢な身体とも相まってすごく美少女なのだ。美女、と呼ぶべき年齢だけれども。

オリーさんと並べば、どこからどう見ても立派な美女と野獣。ゴリラと小学生。犯罪者とロリータ……は言い過ぎか。とりあえず、そんな麦子さんが俺と同じ年だってことは驚きだった。

「入江君、どうしたの？ 遠慮しないでどんどん食べてね！」
「あ、はいっ。頂いてます！」

黒目の大きな瞳に見つめられ、俺はどきりとする胸を誤魔化すように、鍋から白菜と肉をお椀に移す。

すると今度はその隣に座っているオリーさんが、俺に大量のしらたきを突き出した。ええと、食べろってことですかね。

「オリーのしらたきランドウ、直輸入です！」
「鍋の中に勝手に領土作らないっ！ そもそもなんでしらたきかなあ？」

そう文句を言いながらも、麦子さんはオリーさんのお椀に野菜と肉を取り分けてやる。その甲斐甲斐しい仕草に、もはやオリーさんのいかつい顔はとろけかけていた。

これは、もしや俺ってお邪魔なのでは？

そもそも、なんで俺がこの熱々なふたりの夕食にお邪魔しているかというと、すべては先週の怪我が発端だった。

あの後病院で精密検査をし、異常なしの診断は出たものの頭部を強打して意識を失ったことを考慮に入れて、俺は三日間の休養を命じられた。そして、後々何か危険な症状が出た時にひとりでいるのは危ない、という判断で俺はオリーさんに連れられ、彼の家へとやってきたのだ。

憧れの人のプライベート空間万歳！とここぞとばかりに、現役時代のユニフォームだとかグローブだとか見せてもらったり、この間の試合についてアドバイスをもらったりと、非常に濃いサッカー的時間を過ごしたのは夕飯まで。

会社から帰宅した麦子さんが、お鍋の材料片手にやって来たとなん、俺の憧れのオリーさんは彼女にメロメロなただの人になってしまった。

何だかんだと彼女にちょっかいをかけては、怒られる。それがまた嬉しいらしく、とにかくでかい身体を小さな麦子さんにまわりつかせていた。なんていうか、空気が桃色。

支度を手伝おうとして、「怪我してる人は安静に！」と言われた俺は、そんないちゃいちゃぷりをただ見ているしかなかったのだ。さっきのまでの二人のラブラブぷりを思い出し、思わず大きなため息をついた俺に、麦子さんが心配そうな目を向ける。

「疲れた？ 気分悪い？」

「あー、ええと、鍋とかってすっごい久しぶりだなあと思って」

そうだ。なんかこう座り心地が悪いというか、むずむずするようなこの気持ちはんたろうと思えば、誰かこうして鍋をするのが久しぶりだったんだ。

チームメイトとももちろん飯を食べに行ったりはするが、たいて

い大盛りのできる定食屋なんかだし。

「そうなんだ。じゃあ、これからも時々鍋とかしようよ、他の人も誘って」

「Ja! モトハシとフラウ、それとイリエのためにコマコも呼びまするね!」

無邪気な麦子さんの提案に、オリーさんが笑顔で付け加えた最後の人物の名前に、俺は思わず咳き込んでしまう。俺のために内藤さんって、それって!

涙目になりながらオリーさんを見れば、彼はいつもはへの字になっている口をにんまりと笑みの形にしている。な、なんでバレてるんだろう!

「オリーは、とっても観察うまいですよ?」

いやいや、完全に自分にむけられてる好意には気付いてないですよね!?

得意げに胸を張るオリーさんに、麦子さんの前でそんなことを突っ込めるはずもなく、俺はさっき彼に入れられた大量のしらたきを食べてその場をしのぐ。

その俺の微妙に複雑な表情を読んでくれたのか、麦子さんからは特に追求もなく、その後は穏やかに夕食を終えたのだった。

だけど、俺でもあてられまくったあの二人のところに、オリーさんに片想いな内藤さんが来るってのはまずいよな、いくらなんでも、でも、オリーさんのことだから何の悪気もなく誘いそうだし、内

藤さんは内藤さんでちょっと天然入ってるから頷いちゃいそうだしなあ。あああ……どうする、どするよ、俺！

なんて広い居間のソファで唸り声を上げると、シャワーを浴びに行っていたオリーさんがいつの間に戻って険しい表情でこちらを見ていた。

「あ、オリーさん」

「イリエ、頭悪い？」

「え」

突然の言葉に、俺はその意味を理解しかねる。頭は悪いけど、なんで？

するとオリーさんは自分の額を指さし、それから俺の頭を同じ手で示す。ええと、ああ。俺が唸ってたから、また頭が痛み出したと思って心配してくれたのか。

「平気っす。すみません、迷惑かけて」

「Nein、オリー迷惑ないよ？ 接触、キーパーは怖いです。だけどイリエ、怖がってはダメ。乗り越えるよ」

真剣な瞳でそんなことを言うオリーさんに、俺は戸惑いつつも頷いた。確かにひどい出来事だったけれど、軽い脳しんとうで済んだし。ちよつとくらい額に傷が残るかもしれないとは聞いたけど、まあ男だしな。

そんな俺をじっと見ていたオリーさんは、もう何も言わずに少しだけ息を吐く。そうして「シャワー空いてます」とだけ言うと、台所へと姿を消した。

この時、オリーさんが伝えたかったことを、俺は次の試合で身をもって知ることになる。

それは怪我から復帰した最初の試合。

残り試合数のなくなってきたこの時期、アウェイでの貴重な勝ち点がかかった試合だった。前半、キャプテン河合さんのシュートが決まり、1対0。相手は格下で、きちんとやれば勝てる相手だった。なのに――。

ネットに突き刺さったボールが、跳ね返って俺の目の前を転がっていく。それを嬉しそうに抱え上げて走っていく背中に、駆け寄ってきた相手チームの誰もが喜んで、抱きついて。

それを見てうなだれるチームメイトたちに、俺はなにひとつかけられる声を失ってしまった。

アウェイで勝ち点を逃した。

今のチームの得点を考えれば、ひとつだって取りこぼせないはずだ。チームは今、二位につけている。J2優勝だって狙える位置だ。この間と同じ状況。DFを抜かれて迫ってくるFWとの一対一の場面で、いつもの俺だったら余裕を持って処理できていたはずだった。

それが、芝生に縫いつけられたように動かない両足。全身から吹き出す嫌な汗。仲間が俺にむかって何かを叫んでいるのに、まるで耳に届かない。なんだこれ、なんだこれ、なんだこれ。

そして我に返った時にはもう、そこには相手チームの歓喜の瞬間。俺は一步も、動けなかった。

あの時の痛みを鮮明に思い出した俺は、ただひたすらに恐れてしまったのだ。自分が立つ、この緑の海を。

「入江、俺が言いたいことはわかってるな」

結果、1対1での引き分けとなった試合の直後。

誰しもが険しい顔でロッカーに戻っていく背を呆然と見ていた俺に、監督がその声をかけた。俺が拳を握りしめ「はい」と答えると、監督は小さく頷きこちらに背を向ける。

「チームが今大事な時だってことはお前もわかるだろう。俺がどんなにお前を使ってやりたくても、今日みたいんじゃ降ろすしかないからな」

次は絶対に、そう言おうとして俺は唇を噛んだ。

次こそはなんてそんな甘いこと、通用するはずがない。無言で立ち去る監督の背が視界から消えても、俺は自分への苛立ちをうまく処理できずに立ち尽くしていた。

「くそっ」

吐き捨てて、握りしめた拳を壁に叩きつけようと振り上げる。その手を、いつの間に近くに来ていたのか、内藤さんが押しとどめた。そんなに身長が高いほうではないのに、必死に手を伸ばして、俺の拳を両手で包む。

その温かさに俺の身体から力が抜け、静かに手を降ろすと内藤さんはほうっと安心したように息を吐き出した。そして、ぎこちなく俺に微笑みかける。

「駄目だよ、入江君。手を傷つけたら、試合に出られなくなっちゃうよ」

「内藤さん……」

言われて初めて、今自分が何をしようとしたのか気付く。この手を壁に叩きつけて、それで俺はどうしよう？

怪我をすればここから逃げられる。怪我をすれば、駄目だったことに理由がつく。諦められる。仕方がなかったんだ、そう自分誤魔化して――。

恥ずかしい。

一瞬でも楽な方を無意識に選択しかけた自分が、ひどく醜い。

本当に悔しいのは、責めたいのはチームメイトたちだろうに。それなのに、俺は今自分のことしか考えてなかった。そうして暗い沼に沈み込みそうになった俺の頬に、ふっと優しい温度が触れる。

驚いてぎゅっと閉じていた目を開ければ、この間俺を覗き込んでいた茶色の瞳が深い感情をたたえてそこにあった。

「格好悪くても、大丈夫。入江君は、大丈夫」

頬を包んだ手が俺をなだめるように、目の下を小さく撫でていく。傷つけないようにと気遣われるその言葉が、今は痛い。

俺はその手をそっと外し、きつとひどく不細工だろう顔をそらした。かっこわるい。

「無責任なこと、言うなよ――」

こんな気持ち、何もわからないくせに。

絞り出すような俺のその拒絶に、彼女が目を大きく見開いたのがわかった。

柔らかなそこに俺が今、たった今、傷をつけた。それは荒んだ俺の胸の内に、どこかほの暗い喜びを与えて……それだけだった。

さっきの恥ずかしさと比べものにならないくらいの、自己嫌悪。
どす黒い独占欲。嫉妬。自分の苛立ちを彼女にぶつけて、それで満足するなんて——最低だ。

凍り付いたように立ち尽くす内藤さんをその場に残し、俺は振り切りようにしてロッカールームへと走り去った。ただ、消えてしまいたかった。

緑の海の騎士は恋する 3

余裕がある時には優しくできるなんて、そんなの当たり前なんだ。ぎりぎりの淵に立った時にどれだけ色んなことを考えられるのか、それが本当の気持ちのような気がする。

それなのに、俺は初めて経験する大きな挫折に、ただただ戸惑うばかりだった。

『今日は佐野でいくから』

告げられた言葉に、俺はなにも言えずにただ奥歯を強く噛み締めた。

チーム状況を考えたら、当然の選択だ。使えるかどうかかわらない俺よりも、安定している佐野を出す。俺たちはプロなんだ。これは、仲良しごっこじゃない。

ベンチの中で、ただじっと目の前の試合を見つめる。それは不思議な感覚だった。

プロになってから七年、幸運なことに俺はほとんどの時間をフィールドで過ごしてきていた。

高校卒業してすぐにプロになり、とんとん拍子で結果を残し、J2のこのチームで今は正ゴールキーパーをやれている。

考えてみれば、こんな風に立ち止まって考える時間はまったくなかった。小さな挫折は確かにあったけれど、それも努力で乗り越えてきた。

だけど今は、どうやって何をすればいいのか、全然わからなくなってしまうんだ。そんなこと言ってる場合じゃないのに、変なプライドが邪魔をして、ゴールに立つのが怖いなんて誰にも言えない。

考えないようにすればするほど、今度は練習中にも動きはぎこちなくなる。そうして余計なところに思考を取られている分、判断力も何もかもが遅れてしまう。泥沼だった。

今週の俺の練習を見ていれば、誰だって今日の試合には出さないだろう。

内藤さんとも気まずく、俺はできるだけ彼女を避けていた。

ずるい、卑怯な奴。苛立ちを八つ当たりしたのは俺なのに、謝らなければいけないのに、俺はそこから逃げ続けている。時々遠くから、彼女が心配そうな悲しそうな視線を投げってくるのに気がついていながら、俺はそれを無視していた。もう、何もかもわからない。どうしたらいいのか。

「イリエ」

隣に座っていたオリーさんが、そんな俺に声をかけてきた。

飽きもせずに暗い思考の沼へと沈み込んでいた俺は、はっとして真っ直ぐに試合を見つめるオリーさんの横顔を見上げた。

「今日の試合のあと、話しますよ」

「え……？」

「練習場、オリーは許可を取りました」

淡々とこちらをむかずに続けられたその言葉に、俺は面食らう。

それは試合の後に練習場に行けっことだろうか。使用許可を取ったってことは、特別メニューか何かがあるのか？

わけのわからないまま、それでも俺が「はい」と返事を返すと、オリーさんは黙って頷いた。

その日の試合は2対0で街田の勝利で終わり、俺は複雑な気持ちのまま、笑顔で帰ってくるチームメイトたちを迎えたのだった。

いつもと違い、ほとんど言葉を発することなく練習場へとやって来たオリーさんと俺は、そこで先に来ていたらしい本橋コーチと合流した。

相変わらず飄々とした本橋コーチは、内心どきどきしている俺を見てにんまりと笑う。

「おまえ、ここでオリーにばこられると思ってただろ」

「えっ、いやっ、そんな！」

「オリー、そんな乱暴したことないですよ、モトハシ」

悲しげに眉をひそめてそんなことを言うオリーさんに、コーチと俺は思わず「いやある！」と同時に突っ込んでしまった。

だってオリーさん、あなた昔なかなかPKを蹴らない相手チームの選手の、首根っこ掴まえて引きずり回したりしましたよね。

加えて、監督に「相手に噛みつくつもりでいけ」って言われたからって、相手選手の耳噛んだりしてましたよね！？

俺たち二人のその視線をもとせず、オリーさんは「試合してる時のオリーはオリーじゃないのです」と、しれっと言い放った。

「イリエ、身体暖めてゴールに立ちましょう。オリー、蹴ります」

「え、あ、は、はいっ」

ゆるみかけた空気を一新するように、オリーさんが厳しい顔のまま俺にそう指示する。

慌てて着ていたベンチコートをその場に脱ぎ捨て、寒さに固まっていた身体を伸ばす。素早く、けれど怪我をしないように身体を温

めた俺は、急いでゴールマウスへと向かった。

その間に本橋コーチがボールを用意し、オリーさんに渡す。

「オリー、まっすぐ走ります。まっすぐ蹴ります。止められますね？」

「……はい」

予告されたシュートに、俺はグローブをはめながら答える。

そんな風に言われること自体、俺にとって……いや、キーパーにとって侮辱されたようなものだ。

険しくなった俺の顔を見て、オリーさんは満足そうに頷く。煽られたんだ、ということとはわかったが、点いた火を消そうとは思わない。

少し距離をとったオリーさんが軽く手を挙げ、始まりを合図する。俺はそれをじっと睨み付け、いつものように両足を小刻みに動かし、中腰の姿勢を作る。落ち着け。

真正面から宣言通りにオリーさんが走り込んでくる。緑の海を泳ぐように。現役を離れてからしばらく経つが、その走りやボールさばきに衰えは見られない。

その大きな姿がセンターラインを越え、こちらに迫ってきた、その瞬間。

「っ！」

意志とは関係なく震え出す両の手。額から流れる汗。フラッシュを焚いたように、怪我をした時の光景が次々に甦る。痛み、よりも恐怖。

違う、違う違う！

今はあの時じゃない。怪我もしていない。怖くないはずだ。怖い自分なんか必要じゃない！

極度の興奮状態なのか、緊張状態なのか、迫ってくるオリーさんがひどくゆっくりと動いている。その右足が思い切りボールを蹴り飛ばす。ゆっくりと、でも確実にこちらへと飛んでくるボール。

動け、動かなければ――！

ぱちり、と瞬きをひとつ。固まったままで視線を横にやれば、そこにはネットに当たってはじき返されたボールが転がっていた。無意識に止めていた息を、吐く。

まっすぐに来ると予告され、実際にまっすぐ入ってきた、そのシュートを。俺は、一步も動くことができず、止められもしなかった。力が、抜ける。

放心状態になっている俺を見て、それでもオリーさんは「もう一回やりますよ」とだけ言い残し、またセンターラインの向こうへと歩いていく。その背中が、やけに大きく見えた。

それから何度も何度も、それこそ何十回と同じことを繰り返したが、俺の身体は慣れるどころかますます固くなり、ゴールを許し続けた。

遊びでも、練習でも、ゴールを入れられ続けるということは、キーパーにとっては辛い。

数え切れないシュートのあと、俺はついにゴール前で膝をついてしまった。ぽたぽたと芝生にこぼれ落ちていくのが汗なのか涙なのか、わからない。

なんだかおかしくなって、笑い声を上げる。なんて、滑稽な自分。

「かっこわるい。こんなに自分が弱っちいなんて、思ってもみなかった……」

自嘲気味に呟いたその言葉に、目の前に立ったオリーさんは少しの沈黙の後口を開いた。

「弱いイリエは、いらないイリエですか？」

「え……」

「弱いイリエ、全部捨てるですか？ イリエ、今までいっぱい頑張りましたね。でもそのたくさん、ひとつのため諦めたら、全部ダメ。全部やらないことになってしまいうですよ」

見上げれば、すっかり暗くなったピッチを照らす光に影を作りながら、少し悲しげな顔をしたオリーさんと目が合った。透き通るような青い瞳に、息を飲む。

ここで諦めたら、全部無駄になる。

今まで俺がやってきたことが、全部やらなかったことに変わってしまう。

「怖いのは怖いこと違いますよ、イリエ」

膝をついたままの俺と視線を合わせるようにして、しゃがみ込んだオリーさんが言う。俺は汗と涙とでぐしゃぐしゃになった顔のまま、その瞳を見つめた。

「怖いのは、怖いこと怖いと思うイリエですよ」

「怖いことを怖いと思う、俺……？」

よく意味がわからずにきよとした俺に、オリーさんの後ろから歩み寄ってきた本橋コーチがフォローを入れてくれる。

「あー、つまり、だ。恐れることを恐れるな、それを恐れる自分を恐れるってことかな？」

「Ja！」

言われたその言葉の意味を考え、俺ははっと目をみはった。
弱い俺はいらない俺？

——違うだろ！

迫ってくる相手選手も、避ける間もなくあたったスパイクも、痛みも、怖かった。でもさっきまでの俺は、怖かったなんて認められなかった。そんなこと、情けないと思ってた。

でも、違うよな。そうじゃないよな。

そんなの、怪我をすれば怖いと思うのは当たり前だ。痛みを覚えた身体が反射的に逃げようとするのだって。俺が怖がっていたのはそんなことじゃない。俺がずっと怖がって、認めたくなかったのは、怖がっている自分だった。

好きな人を傷つけてまで、守っていたのはそんなちっぽけな自分だったんだ。

「Das macht nichts! イリエは緑の海のリッターですよ！」

「緑の海の、リッター？」

「騎士ってことだ。緑の海の騎士」

満面の笑みで俺の肩を叩いたオリーさんの言葉に、本橋コーチが意味を話してくれる。

緑の海の騎士。

なんだかその言葉がひどく勇ましく、俺の胸の中にずっと入り込んだ。ぎゅっとそこを握りしめれば、温かい何かが沸き上がるのを感じた。腕でぐいっと顔を拭い、俺は前を向いて立ち上がる。

（格好悪くても、大丈夫。入江君は、大丈夫）

あの時の内藤さんの言葉が脳裏に甦り、俺は大きく頷いた。
俺はもう、大丈夫。

そんな俺の様子を見ていた二人は顔を合わせ、なぜかにやり、と妙な笑みを浮かべて見せた。その小学生男子的な笑顔に、俺は嫌な予感を覚える。

「イリエ」

「入江くーん」

「な、なんですか、俺なんかしましたかっ」

焦って訊ねる俺の後ろを、本橋コーチがちよいちよいつと指さした。その仕草に眉をひそめつつ俺が後ろを振り返ると、そこには――

「なっ、内藤さん！」

「ご、ごめんねっ、大事な時に！ あのね、なんかもうずっとだから、少し水分とかとったほうがいいかもって思っ、えと、これ……」

俺以上に慌てた様子の内藤さんは、あわあわとしながらもタオルとスポーツドリンクを差し出してくれた。いつものように。ひどいことを言ってしまった、俺に。

受け取っていいのかと思うながらも、必死にそれをこちらに差し出している内藤さんに気圧され、恐る恐るそれを受け取った。

とたん、今にも泣き出しそうだった内藤さんの顔が、一瞬にしてぱあっと晴れやかな笑顔に彩られた。その不意打ちの笑顔に、俺の胸が性懲りもなく高鳴った。

「内藤さん、俺……」

「待って、入江君！ 私っ、よ、余計なこと言って、ごめんなさい！」

あの時のことを謝ろうとした俺を遮って、なぜか内藤さんのほうが頭を下げる。

俺はただそれにびっくりして、言葉を詰まらせた。なんで彼女が謝るんだろう？

そう思っ眉を寄せた俺の顔をどう見たのか、内藤さんはなぜか顔を真っ赤に染めて続きを口にする。

「私、すっごい嫌なこと考えたの！ 入江君が大変だってわかったのに、なんでかわからないけど、私が一番に慰めたかったの。一番最初に大丈夫って言ってあげたくて……なんか自分のことばかり優先して、入江君のこと傷つけちゃった……」

「え」

おい、ちょっと待てよ。それって、それって、そういうことですか！？

今俺が考えたその予測が正しいのかを判定してもらいたくて、さっきまでそばで見えていたオリーさんと本橋コーチの姿を探すが、彼らはいつの間にかどこかへと立ち去った後だった。ええええ。

「本当に、本当にごめんなさいっ」

また泣き出しそうな顔になってしまった内藤さんの頬を、俺は慌ててグローブを外した手で撫でる。突然の接触に少しびっくりして身体を強張らせた彼女は、それでも俺の手の感触に安心したように瞳を閉じた。

ええええええええええ。

待て待て待て待て、落ち着け俺！

確認……そうだ、確認だ。チャンスだと思って攻めていても、カウンターくらってがら空きのゴールに突っ込まれたんじゃない、あまりにひどい。

よ、よおし。

「ええと、その……こんな時になんだけどさ。内藤さんって、オリーさんのこと……好きなんだよね？」

ものすごい不自然にどもりながら、俺が目を閉じて俺の手に頬を寄せていた内藤さんに尋ねると、彼女はきょとした顔をしてから大きく頷いた。あ、やっぱり？

「こ、婚約者がいてもいいくらい、好きなんだよ、ね？」

「うん。婚約者さんをものすごく大事にしている、オリーさんが好きだよ？」

「え？」

「え？」

確認に返ってきた言葉が、ものすごく恐ろしい予想を俺にもたらしした。

オリーさんが好き⇨婚約者がいても好き⇨切ない片想い。

オリーさんが好き⇨婚約者がいる⇨そんなオリーさんが好き。

あああああれ、おかしいな。これって小さいけど、大きな違いじゃね！？

「それ、片想いって言わないよね！？　それ、憧れの人ってことだよね！？」

「え、え？」

俺の怒濤の突っ込みに、内藤さんが目を白黒させる。そんな彼女も可愛らしい……いや、そうじゃないだろ、今はそこじゃないだろ俺！

もしかして、もしかしてこの人。

「……天然？」

「ち、違うよ！ オリーさんは、初恋なの。だって初恋って実らないものじゃない？」

それに好きな人を大切にしてる人って素敵だし、と続ける内藤さんに、俺はなんだかおかしくなってきたって、発作的に笑い出した。

それを見て、最初はむっとしていた彼女もつられて笑い出す。

こんなところにもいた、俺の中の弱い俺。勝手に好きになって、何にも言わないうちから「どうせ」って諦めて。振られたら格好悪いと思っ、ただそういうふりをしたんだ。

内藤さんのこと笑えないかも。

さっきまでの俺の気持ちは、彼女にとってのオリーさんと同じだった。でも、今は。

「俺、君のことが好きだよ。すごく、すごく好きだよ」

ひとしきり笑った後にするりと出てきた言葉に、内藤さんどころか俺自身まで驚いて赤くなる。あー、言っちゃったよ。そんな気分でも、なんだかひどく爽快な感じがして、俺はパニックになりかけている内藤さんをえいやと抱き締めてしまった。

「いいいい、入江君！？」

「残りの試合、俺絶対に出るから。そんでもって、一点だって取らせない。約束する。だからさ、内藤さん」

そこで言葉を区切って、そっと身体を離し、俺は真っ赤になった彼女の顔を覗き込む。

心配してくれたり、俺の言葉に傷ついたり、よくわからない独占

欲をぶつけてみてくれたり。そんな内藤さんの茶色の瞳をじっと見つめて。

「J1に昇格したら……っていうか、絶対にするけど。そしたら返事、聞かせてよ」

俺の言葉に、内藤さんは首が千切れちゃうんじゃないかと思うくらい、何度も何度も頷いてくれた。ああ、もう負けられないなあ。負ける気もないけど。

久しぶりの晴れやかな気分背伸びをして、俺はそっと片手を内藤さんに差し出した。

「じゃあ、帰ろっか」

「……うん」

乗せられた彼女の手は小さくて、でも温かくて、俺は壊さないようにそっと握りしめる。

練習場の出口へと歩きながら、もう少しだけこの緑の海に彼女といたいと小さく願いながら――。

そうして、なんとか戦線に復帰した俺とチームがJ1昇格を決めて。彼女がどんな返事を俺にくれたのかは誰にも教えない、ふたりだけの秘密だ。

ただ今は、麦子さんのお鍋が楽しみでしようがない、とだけ言うておく。

緑の海の騎士は恋する 3 (後書き)

入江君編、終了です。一番難しかった！

これもすべて年の瀬の一日（前書き）

下品な言葉や表現が出てきます。苦手な方は注意してください。

これもすべて年の瀬の一日

今日も今日とて、まるでぬいぐるみのように抱きかかえられテレビを見ていた私が、オリーの異変に気がついたのは、夜も大分更けてから。

夕食の時にビールを飲んで、その後もこたつに入って日本酒をちろちろと舐めていたから、最初は酔っぱらっているのかな、と思っていたんだけど。どうも、背中に感じる体温がかなり熱い。しかも、なんだかゆらゆらと不思議に揺れている。

何事かと包み込まれた腕の中で、背後のオリーを振り返ってみれば、彼はその顔を見るからに赤くして、ぼんやりと宙を見つめていた。おかしい。

「オリー？　ねえ、酔ったの？」

「コムギ、可愛いですね」

へらり、としまりのない顔で笑いかけたオリーの額に、私は手を当てた。すると、これでもかと言うほどの熱。高熱。心なしかその青い瞳もうるんで見える。

どんなに体格のいい人でも、風邪ってひくもんなんだなあ、なんて変に感心している場合じゃなかった。

いつから発熱していたのかわからないが、体力の限界がきたらしい。そのまま、ずるずると私に覆い被さってくる巨体に、冗談ではなく命の危険を感じる。おおおお、重いっ。

「こらっ、オリー！　しっかりしてよ！　私じゃ支えきれないんだってばあっ」

「コムギい。コムギは柔らかいですね……」

「ちょ、乳を触らないっ!」

どさくさに紛れて、するりとお腹から胸に移動してきた手を払い落とす。その大きな手も、今まで感じたことがないくらいに熱を持っていた。あああ、もう、どうしよう!

ここが家なら両親に助けを求めるところだけど、あいにく今いるのはオリーの家。携帯はダイニングテーブルの上。電話はさらに遠く。

つまり、ここでオリーに押しつぶされかけている私に、助けを求める手段がない。

い、いやだあああ! ドイツ人に潰されて圧死とかいやだからあああ!

あんまり想像したくない光景が頭に浮かび、私はぶるぶると首を振った。そうして、なんとか堅固な腕の中でもがき、オリーと向かい合うような形に持っていく。ひとまず座っていた状態から膝立ちになって、その重い体を支える。そして正気取り戻させるように、どこかかと目の前の厚い胸板を叩いてみた。こっちの手が痛くなるってどういう筋肉してるの!?

「オリーっ、しっかりして!」

私の呼びかけに、熱でぼうっとしているらしいオリーは緩慢な唸り声を上げる。そしてむしろ、さらに強く私を抱き寄せた。オイルヒーターのきいた室内は暖かく、少し薄着のオリーの身体から伝わる熱が、ダイレクトに私を浸食していく。熱い、熱いってば、オリー!

これ以上ないっていうくらいに密着した肌から、なんだか決して不快じゃないオリー自身の匂いが鼻を掠める。なんていうんだろう、お日様をいっぱい浴びたひまわりみたいなの。なんだか身体がムズ

ムズする。

膝立ちで抱き締められたまま肩に顎を乗せ、全身で感じる熱さと苦しさ、私は大きく息を吐き出した。するとオリーの身体がぴくり、と反応する。そしてその大きな手が私の背骨をなぞり、繊細な動きでするりとすべり落ちた。

「うひゃっ」

へ、変な声出た！

びくっと身体を揺らした私の耳に、今度はちゅっともはや聞き慣れたリップ音。それに一瞬フリーズした思考が、かりかりかりと音を立てて再起動する。

これは、その、あらゆる意味で命が危険！？

続けて首筋からうなじへと触れてくるその唇に、思わずぞくりと甘い震えを覚え、身体の力を抜きかけて――待て待て待て待て待てえっ！

「いい加減にするっ！ 熱が出てるって言うてるでしようが！」

「違います。これは、コムギが欲しいだけ」

「だが断るっ！」

唇の動きがわかるほど近く、耳に低く囁かれた言葉をびしりと却下。すると抗議の意味なのか、耳たぶを甘噛みされて私はついに実力行使に出た。

ホールドされて反撃の余裕がない手足は諦め、唯一自由になる頭を思いっきり左へとスイング。ごすつと音がして、身体に回されていた腕がゆるんだ。

「コムギ、ひどい。オリー、目が回りますよ」

「私だって痛い！ それと、目が回るのは熱が出てるからだから！」

私の頭が当たった左頬を押さえ、私から身体を離れたオリーは床にへによりと転がった。だーかーらあ！　ここで寝るなっ。

その巨体を私はゆさゆさと揺り起こす。とにかく、寝室まで行ってもらわなければ。

「こんなところで寝ちゃだめだってば」

「床冷たい。オリー、ここで寝ます。Gute Nacht……」

「寝るなあっ！　寝たら死ぬんだからねっ」

むう、と眉を寄せ、ラグの引かれていないフローリングに頬を擦りつけたオリーは、本気でそのまま寝入る体勢に入ろうとする。リーグも終わり、しばらく休暇に入ったからって、風邪をひいたら何にもならないじゃん！

私はそのオリーの身体を再び仰向けに転がすと、勢いよくその鍛えられた腹の上に飛び乗った。こうなれば、両頬を引っぱたいてでも起きあがらせてやる！

固い腹筋を持っているとはいえ、さすがのオリーも突然腹にのしかかった重みに咳き込む。苦しげなその様子に、私は上体を曲げて顔を近付けた。

小さく開かれている唇から、苦しげな荒い呼吸が漏れている。いつもは白い頬は上気していて、閉じられた目元にまで赤が広がっていた。

はい、惑うことなく、風邪！

「起きてよ、オリー！　私じゃ寝室まで運べないんだって！　ねえ！」

「Ich fühle mich nicht wohl……Mir ist heiss……」

「もおお、ドイツ語わからんっ。何でもいから、早く寝室に行き

たいのっ」

もごもごと何事か唸っていたオリーが、私のその叫び声にぱちりと目を開いた。

熱のためか少し充血している青の瞳が、ゆっくりと腹の上に乗っかっている私を見定める。そうして、その大きな手のひらががしりと私の腰を掴んだ。うん？

「コムギ、とても寝室行きたいですか？」

なんだかひどく真剣な顔でそんなことを訊いてくるオリーに、私はきよんとしたまま小さく頷く。そりゃあ、ベットに寝てくれないと看病もできないんだけど。

するとなぜか、さっきまで熱に浮かされぼんやりしていたオリーの顔が、きらきらと輝きを放ち始めた。えええ？

がばり、と見事に腹筋だけで起きあがると、私の腰を掴んでいた手を滑らせる。えっと思う間もなく、オリーはそのまま立ち上がった。腕の中の私に何の重みも感じないような、その動き。

ぐるん、と回った視界に私が啞然としてみると、オリーは私を横抱きにしたまま歩き出してしまった。まったく意味がわからないんだけど！？

ダイニングを抜け、廊下を通り、階段を上って目指しているのは寝室？

「お、オリー？」

「早く行きます。寝室、早くたどり着きます」

「え、あ、うん？」

さっきまでの駄々はどこへやら。なぜか寝室にむかう気満々になったオリーが、どこか焦れたような口調で私にそう宣言した。やあ、

まあ、当初の目的は果たされたような気がするからいいんだけど。でも、何でオリーだけじゃなくて私まで寝室に行くの？

行動理由がわからないままにたどり着いた寝室の、しかもベットに直行したオリーは、そこに私の身体をそっと横たえた。あれ？

「ま、待って、なんか誤解が生じてない？」

「A c h j a ?」

寝転がされた私の上に、ぎしりと音を立ててオリーの身体が覆い被さってくる。なんていうか、既視感。それも、ものすごく悪い予感の。

こうなる状況を生み出すような言葉があったかどうか、必死に回想している私の唇に、あっさりとその熱っぽい唇が重なった。

いつもよりも乱暴に割り開かれた口腔に、侵入してくる舌もまた熱を持っているのか熱く、私の脳みそは一気に沸騰寸前まで追いやられる。ちょっと待てえええ！

さんざん私を蹂躪し、下唇を舐めて離れていったオリーに、私は両手のひらを見せてストップをかける。

「病人が何をおっぱじめようとしてるの！」

「コムギとオリー、今からするは性行——」

「何でそれは日本語なの！？　ていうか、そういうことじゃなく！」

満面の笑みで嬉しそうに答えようとするオリーの口を手で塞ぎ、私は大声を上げる。かかか、風邪っぴきが何を言うか。

「落ち着いて。落ち着いてよ、オリー。あのね、オリーは病気なの。熱が出るの。だから、大人しくベットに横になって早く寝なきやいけないの」

「熱出たら、汗を掻くのがいいですね」

「布団を被ってひとりで汗を掻いてよおおおっ」

私の言葉なんぞなんのその、不埒な動きを始めたオリーの手。それにうっかり翻弄されてしまった私は、そのままベットに沈んでしまふのだった。この元氣はどこから来るんだ！

翌朝、いやにすつきりとした顔で見事に熱を下げたオリーとは反対に、私はそのまま風邪をひいて寝付いてしまったのであった。オリーのが遷ったっていうか、これ絶対、冬に服を着ないで寝るのが悪いんだよ！

人間、肩を冷やしたら風邪をひくんだよ！ 例え基礎体温が高い人に抱き締められてようとも！

またオリーが風邪をひいたとしても、次は絶対放置して家に帰ろうと、心に深く刻んだ年の瀬の一日。心配そうに頭を撫でるその暖かさに私は、再び眠りの中に沈み込んでいったのだった。

これもすべて年の瀬の一日（後書き）

クリスマス創作をしようとしたら、クリスマスのクの字も出てきませんでした。

誰がためにゴリラは笑う 前編

「メリークリスマスっ！ いい子のみんなに、サンタさんとトナカイさんが来てくれたよーっ！」

優しい保育士さんのその言葉に、部屋の中で遊んでいた子供たちがぱあっと目を輝かせてわっところらに寄ってきた。うんうん、つかみはオッケーだな！

扉の外で待機している俺たちに、中の彼女から目配せの合図。よし、地域交流、いっちょ頑張りますかあ！

「行くぞ、オリー」

「Ja！」

小さく頷きあった俺たちは、派手に目の前の扉を開けて部屋の中へと突入する。そして、できるだけ子供受けするように楽しそうな声を上げた。

「メリークリスマスっ！ つぼみ幼稚園のよい子のみんなーっ、涼太郎トナカイさんだよーう！」

「Frohe Weihnachten！ オリーサンタですよ！」

トナカイの格好をした俺の後ろから、どう見ても気の早いなまはげか節分の赤鬼、みたいなオリーが顔を出したその瞬間。園児たちの期待に満ちた笑顔は凍り付き、そして部屋中が阿鼻叫喚の地獄絵図と化してしまった。

ああ、うん、わかってた。このイベントを引き受けた時から、わ

かった。こういうことになるって。

大慌てで園児たちをなだめ始める保育士さんたちを見つつ、俺はちらりとサンタの格好をしたオリーに視線をやれば、彼は呆然と固まってしまっていた。そうしてしょんぼりと肩を落とす。

「まあなんだ、ほら、お前んところは悪いサンタもいることだし」

「でもオリー、今日はシュヴァルツ……黒じゃないですよ。赤いのと白いの、素敵ヴァイナハツマンですよ。良い子、プレゼントあげるほうなのに……」

肩に担いだ大きな袋を床に降ろし、紅白の衣装に白い髭姿の元ドイツ代表GKは、とうとうしゃがみこんでしまうのだった。

本国でも子供に近づけば泣かれるこの男が、こんな風にその悲しみを露わにする姿に、俺は少しだけ笑みを零す。前ならば、そんな素振りは見せずに見方によっては不機嫌そうにも思える無表情でやり過ごしていたはずだ。人に弱みを決して見せない、緑の海のキャプテン。

これも麦子ちゃん効果かなあ、なんて喜ばしく思いながら、俺はふと彼と初めて出会った時のことを思い出していた。

あれは、俺がまだ現役の選手だった頃。

日本代表でのプレーが認められ、ドイツの名門クラブに移籍した時のことだった――。

「日本から来た本橋です。本橋涼太郎。ポジションはMF。よろしく！」

いつかはと夢見ていた頃から勉強してきたドイツ語は、多少ぎこ

ちなくとも通じたはずだ。それなのに、俺の目の前にベルリンの壁の如く立ちはだかったその男は、かすかに眉を動かしただけで、俺の挨拶を見事にスルーした。おいおい、ちょっと待てよ。

「日本から来た本橋です。本橋涼太郎。ポジションはMF。よろしくっ！」

綺麗に言い直して再度アタック。一回蹴りこんだボールが防がれ跳ね返っても、誰が諦めるかつつの。

そんな俺の行動に今度は軽いため息をついたそいつ——オリヴァー・ビルケンシュトックは、ようやくこちらを真っ直ぐに見下ろした。悔しいが、身長的にはこいつのが圧倒的有利だ。そうして、目の前に差し出してやった俺の手を、思いつき握る。痛い痛い痛い。

「オリヴァー・ビルケンシュトック。第一GK」

妙にいい声でそれだけ言うと、オリヴァー……オリーは今度こそ俺を通り過ぎ、ロッカールームへと消えていった。無愛想もここまできるといつそ気持ちがいにくいだ。

その大きな背中を目で追いながら、俺は久々にふつふつと沸き上がる熱い気持ちを自覚する。なんていうか、野良猫でなづけてやるぜ、みたいな？

まあ、日本と違ってこっちじゃあ個人主義なのかもしれないが、俺は楽しくみんなでサッカーがしたいんだよ、コノヤロウ。甘ったれた関係じゃなく、信頼できる仲間と。憧れの選手と。

「ぜってえあいつと仲良くなってやるかな！」

移籍早々、本業に関係あるようなないようなところで気合いを入れた、そうして俺のブンデスリーガは始まったのだった。

「ダメだ、どうしてもあのベルリンの壁が崩せねえ……」

練習後、シャワーを浴びて戻ってきたロッカールームでそう愚痴る俺に、その場にいたチームメイトたちが野次を飛ばしてくる。

「ついに諦めんのか、リョウ！」

「三ヶ月か、保ったほうかもしれないな」

それは、日本にいた頃にはテレビでしか見ることの叶わなかった、世界屈指の名プレイヤーたち。中でもフランス代表のジェラルト、その悪友でもあるイタリア代表ロレンツォが、にやにや笑いながら俺の両隣へと腰掛けた。そして、悪巧みでもするように顔を寄せてひそひそと話し出す。

「おまえなあ、簡単に諦めんなんて。まだ一ヶ月目だぞ」

「Si！ リョウなら大丈夫さ。そのガッツでもうひと月くらい、いけるって」

「いくら賭けてんだ？ ん？」

妙に真剣なその顔に俺はあるひとつの可能性を思いつき、ふたりの額をべしべしと叩く。

すると、とたんにジェラルトはそのそこそ秀麗な顔をにやあつと崩した。ロレンツォなんぞは、いまさら何を誤魔化したいんだか、口笛を吹いて明後日の方向を向いている。

こいつら、俺とオリーをダシに賭けを主催でもしてんだろ。

反対に言えば、それくらいオリーは人間関係において頑なだった。それは昨日今日ここへやってきた俺よりも、元々のチームメイトたちのほうが身に染みて知っている。

仲が悪いわけではない。ただ、ある一点より先に決して踏みこませない、そんな壁が奴の中には存在しているようなのだった。

「別に悪い奴じゃないんだけどね。僕にはドイツ人のイメージそのまんまだし」

逆にイタリア人のイメージそのままのロレンツォが、頭を振りながら言う。

いつの間にか、ロッカールームには俺とロレンツォとジェラールだけが取り残されていた。その彼の言葉に、ジェラールもうんうん同意する。

「いかつくて、論理的で、ルールはルール絶対厳守！ んでもって、何事にも全力だろ。なんつうか、真面目すぎてぶっ飛んでる辺り、ちょっと日本人も似てるとこあるよなあ」

「この間なんてさあ、オリーの奴、せっかく休暇だったのに練習に来て『休暇に飽きたから参加する』とか言い出してさあ。ゆるーくやって帰ろうと思ってたみんな、すっごいびびっちゃって、疲れたなあ」

「なんか、ツツコミたい場所が色々あるけど、やめとくわ」

のほほんと語るふたりに、俺はため息をついて立ち上がった。こんなところでのんびりしてる場合じゃなかった。

日本にいる姪っ子にねだられてるものを買に行く予定だったのだ。

下着の上から手早く洋服を身につけ、俺はいつの間にかドイツ人女性の魅力について熱く討論し始めたふたりを置き去りに、ロッカ

ールームを出た。つきあってられん。

駐車場を自分の車へと歩きながらふと、そういえばオリーは車を持っていなかったことに気付く。

ドイツは確かに電車でも便利は便利だけれど、外人にしては珍しいなあ、と思い、しかし俺はそれをすぐに忘れてしまったのだった。

今年五つになる姉の子供は、俺がドイツに行くと思った瞬間、まるで恋人とでも引き裂かれるかのように大泣きしてくれた可愛い奴である。

まあ、決して暇なわけではないが比較的社会勤めよりも時間の自由がある俺が、それこそ産まれた時から世話してきたのだから、当然っちゃ当然。しかし、子供つつうのがあんなに可愛いもんだとは思わなかった。

電話するたびに「いつ帰ってくる？ 明日？」とぐずる彼女に、こっちまで涙腺ゆるませながら「代わりに何か贈るから」と約束したのは、つい先日。何が欲しいのか姉にリサーチしてもらったところ、ドイツといったらデディ・ベアでしょ！と返されたので、それに素直に従うことにした。

しかし、あれが年頃になってとんでもねえ彼氏とか連れてきた日には、義兄さんよりも俺が先にぶちきれ自信がありまくりだ。そんなことを考えながら、俺は街のデパートに足を踏み入れる。

ぶらぶらしながらぬいぐるみ売り場を目指していた俺の目に、その恐ろしい光景が飛び込んできたのはその時だった。

思わず、固まる。

どこからどう見てもメルヘンチックなぬいぐるみ売り場の、クマというクマが陳列されているそこに立っていたのは、俺の悩みの原因であるオリヴァー・ビルケンシュトック、その人だった。

そんな危険な幻覚を見るほど、今日の練習はきつくなかったんだけどな、といったん後ろをむいてみる。眉間を手でもみほぐしながら、気のせい気のせい、ドイツの陽気な妖精さんにでも化かされたんだ！ともう一度振り向いて轟沈。

いる。なんか、いる。なんか、ゴリラ的に威圧感満載の何かが、いる。

しかも、キーパーグローブを付けていなくてもでかいその手に、ふわっふわで愛らしいクマのぬいぐるみを持ち、じーっと見つめ合っている。え、これドイツでは当たり前前の光景なの！？

半ばパニックになりながら辺りを見回せば、それなりに有名人である彼を遠巻きに見ているお客さんを多数発見。ですよねえ。

俺はとりあえず、大事な場面でPKを蹴るよりもひどい緊張感を覚えつつ、ゆっくりとそのオリーへと近づいていった。そうして、できるだけ自然な笑顔を心懸けつつ、その肩を叩く。

「よ、よお、オリー。ぐ、偶然だな！」

「……モトハシ？」

びくっとその大柄な身体を揺らし、オリーが青い瞳をまん丸にして俺を振り向いた。こいつも驚くことがあるんだな、なんて変な感想を持つ。

オリーはしばらく俺と見つめ合ったあと、はっと気がついたようにその手の中のクマを陳列棚へと戻した。心なしか、その頬が赤くなっているのは俺の気のせいだろうか。

「え、ええと。お前も買い物、とか？」

「……」

なんだろう、この四方八方が地雷原みたいな空気。

そこまで暑いはずがないのに、俺の額からはだらだらと汗が流れ

ていく。そんな俺を、オリーはいつもの無表情でじっと見下ろしていた。

なんか、会話が途切れた瞬間パンチングのひとつでも喰らわされそうな緊張感に、俺は聞かれてもいないことまでべらべらと話し出す。いのちだいじに！

「お、俺はさあ、日本の姪っ子にねだられちゃって。ほら、ドイツって確かこういうのが有名なんだよな！ クマのぬいぐるみ！」

「クマではない」

「は？」

可愛らしい様々なぬいぐるみが置かれている棚を指さし、俺が笑顔でそう言くと、そこで初めてオリーが口を開いた。

なぜか、さっきよりもものすごく眉間にしわが寄っている。この間、失点した時にロッカールームで二時間説教をくらっていたDFって、こんな気持ちだったのかもしれない。

「クマではない。テディ・ベアだ。それと、彼はアンディで彼女はエイミー。断じてクマではない」

「……」

オリーは俺が指を指した水兵さんスタイルのクマを見て、そう説明してくれる。今度は俺が絶句する番だった。ええと、なんですと？

「ちなみに姪御さんがいくつかは知らないが、お勧めはこの『おやすみテディちゃんピンク』だ。これは丸洗いができる上に、人体と環境に無害なもので作られている。何でも口に入れたり汚したりする子供には最適なパートナーとなるだろう」

「え。あ、じゃあ……それにする」

「かしこい選択だ」

そこはかたく満足そうなオリーを見ながら、俺は勧められたとおりのぬいぐるみを手取る。ふわふわの茶色い毛並みと、ピンク色のパジャマがなんとも可愛らしい。

姪っ子の喜ぶ姿を思い描き、俺はさっきオリーの口から出た『おやすみティちゃんピンク』なんていう単語を抹消する。聞いてない、俺は何も聞いてないぞ。

「オリーったら、やっぱりここにいたのね！」

「アンデラ」

ぬいぐるみを手にしたまま固まる俺と、それを満足そうに眺めるオリーのところへ、エスカレーターの方から声がかけられた。

見れば、長身の美女がひとり、こちらへ足早に歩いてくる。それはもう、どこのモデルだったてくらいの。

オリーと似たような、きらきらの金髪はゆるくカーブして背中にかかり、小さな顔にくっきりとした目鼻立ち。多少化粧をしているんだろうが、それがなくても華やかさのある美しい造作だった。

かつかつ、と赤いヒールを踏みならし近づいてきた美女は、なんの遠慮も恐れもなくオリーの脇腹を思いっきりどついて見せた。うわあ。

「エスカレーターのところで待っててって言ったでしょうが！ まったく、目を離すとクマに吸い寄せられる癖、なんとかしなさいよっ」

「く、クマではない、ティ・ベア……」

軽く呻きながら、それでも律儀に訂正を入れるオリーにもう一発お見舞いした美女は、啞然とそれを見ていた俺に視線を移した。ひい。

「オリー、こちらは知り合い？」

「あ、俺は本橋って言います。オリーとはチームメイトで……」

「ああ！ 今季加入したMFね！ オリーからよく聞いてるわ！」

「え？」

大輪のバラのような笑顔に思わず見とれて聞き逃しそうになったが、俺のことをオリーがよく話してるって、嘘だろう？

にこにこしている美女に、いったいどんな話をと突っ込んで聞こうとすると、脇腹を押さえ痛みを堪えていたオリーが焦ったように俺たちの間に割り込んだ。

「アングラ、時間がない。早く行こう」

「ええ？ 私はもう少しモトハシと話が……」

「時間に遅れるのはよくない！」

美女の手を引っ張り、オリーはさっさとエスカレーターへと移動していく。

アングラ、と呼ばれた彼女はわけがわからない、という感じでそれに従いつつ、それでも残された俺に大きく手を振って別れの挨拶をしてくれた。美人で癒しだな。

そうして俺は、短い時間で起こったありとあらゆる超常的な出来事に、ついていききれずにぽかんとその場に立ち尽くすのだった。

その後、遠慮がちに店員に声をかけられた俺は、無事そのクマ―ではなくデディ・ベアを購入し、姪っ子へと贈る。ものすごく喜ばれたから、まあ良しとしよう。

今思えばここから俺とオリーの関係は少しずつ変わっていくことになる。

誰がためにゴリラは笑う 前編（後書き）

本橋さんとオリーの出会い編。『おやすみテディちゃんピンク』は
実在しません。『おやすみクマちゃんピンク』はシュタイフ社か
ら発売中です。

誰がためにゴリラは笑う 後編

そんなことがきっかけで、俺とオリーはそれからちよくちよく会話をしようになっただけだった。

それは本当に些細なことで、例えば「おはよう」の挨拶から、こちらの方言での言い方だとか。けれど、それまで頑なに他人と関わることをしてこなかったオリーのことにだけに、周りの驚きようったらない。

あの悪童コンビから年下の選手から、用具係やユニフォーム係、果てはフロントのお偉いさんたちまで「どうしたんだ、なんてことだ」の大合唱。終いには俺を『猛獣使い』だとか、『飼育員』なんて呼びだす始末。気持ちにはわからないでもないけれど。

「オリー、おまえどんだけ人見知りだったんだよ？」

「人見知りした覚えはない。必要がないから話さなかったただけだ。試合の時にはきちんとコーチングもしている」

呆れたような俺の言葉に、オリーは眉間をぐっと寄せながら、いかつい表情でそう真面目に返してくる。だから、顔が怖いっての。

ロレンツォが主催のホームパーティに参加していた俺たちは、夜も遅くになって辞し、風に当たりつつ俺の車を目指して歩いていた。そもそも、こんな公式でもない私的な集まりに、こいつが顔を出すというのが珍しいらしい。

来る時には別々だったが、オリーが手土産を持ってロレンツォの家に姿を現すと、なぜか参加者大興奮。びっくりしたらしいオリーが、反射的に帰ろうとしたのを取り押さえるのは苦労した。

美味しいビールで釣りつつ、終電でまたもや帰ろうとするオリーを

「送るから！」と引き留めた俺の尽力を、あいつらはあとで返すべきだな、マジで。そのために今日はノンアルコールを通してきたんだからな！

俺たちの家はここからそんなに遠くないし、家同士も比較的近い場所にある。戸惑うようにしていたオリーをそう言って説得すると、俺はこっちに來てから奮発して買った車にオリーを押し込んだ。アクセルを踏みこんで、出発。やっぱドイツ車はいいなあ。

そうしてしばらく無言で運転していた俺は、車が流れに乗ったころに再びさっきの続きを口にする。

「でも、わかるだろ。オリーが俺と話すようになってから、他の奴らもおまえに話しかけるし、くだらないことでも笑いあえてれば試合の時もまとまりやすいし」

ちらりと右を見れば、オリーは眉間にしわを寄せたままじつと前方を睨み付けている。んなに難しい顔して考え込むようなことかね。悪い奴じゃないのは承知だが、どうもこいつは真面目すぎるところがある。理由はよくわからないが、どうも軽々しく他人を自分の内には入れたがらないというか。

なんか、過去にあったのかもしれないが、そこには触れないでおく。他人に言われるよりもずっと、本人がわかってるんだらうから。

「みんなおまえのこと好きなんだよ」

なんでだろうか。こんな恥ずかしいこと、日本語だったら絶対に言わないのに。

俺は今さらながら照れて、少し乱暴にアクセルを踏みこんだ。カーブを曲がり、街の中心から少し離れていく道に入る。それだけで行き交う車はほとんどなくなり、両側に立ち並ぶ木々が風に揺れているだけ。

車内は沈黙に満たされている。エンジン音を聞くのが好きだから、俺の車にはカーラジオなんていうものは装備されていない。

いつもよりオリーの中に深く踏みこんだ自覚はあったので、なんとなく気まづくなって、俺は黙り込んだままのオリーに視線をやった。

「オリー？」

いつの間にか、渋面の彼の顔に脂汗が浮かんでいた。あきらかに、どこか体調がすぐれないとわかる、その表情。

暖色の街灯と薄闇の中でも、顔色が紙のように白くなっていることがわかる。俺は動揺しつつ、ゆっくりとスピードを緩めて路肩に車を止めた。

「おいっ、オリー！ 車酔いか！？」

「モトハシ……」

サイドを引いて俺はオリーに手を伸ばす。

そういえばこいつ、いつも電車だったな、とその時ふと思いつく。もしかして、乗り物酔いしやすい質とか。チームで移動する時も、一番後ろを陣取って目を閉じていることが多かったかもしれない。少し外に出して休ませた方がいいんだろうか、と俺が思案している間に、オリーは自分でシートベルトを外し、車外へと出ていった。それを俺も追いかける。

反対側から回り込んだ俺の目の前で、その大きな身体が崩れるように地面にしゃがみ込み、隠すようにして二、三度吐瀉した。

それを見て俺は一度戻って車の中からミネラルウォーターを取り、オリーのもとへと近づいた。

「大丈夫か、オリー。これ、開けてあるけどまだ口はつけてねえか

ら」

「……っ」

まだ大分苦しそうなオリーの背中をさすりながら、俺はペットボトルを彼へと渡す。オリーは軽く頷くと無言でそれを受け取った。誰かに連絡したほうがいいのか。もしかして、ずっと体調が悪かったんだろうか。俺が無理に引き留めたりしたから、言い出せなかったんだろうか。

ちよつとしたパニックに陥りかけていた俺に、水で口をゆすいだオリーがようやく顔を上げて口を開いた。

「もう、大丈夫だ。すまない……」

「や、別に俺はいいけど、本当に平気なのか？」

俺の言葉に頷いてみせるけれど、オリーの顔にはまだ血の気が戻ってきていない。もう肌寒くなってきた季節だから、あんまり外にいさせるのも心配だ。

いまだ立ち上がれずに何かを我慢するような顔をしているオリーに、俺はとりあえず自分の着ていたコートをかけてやる。

「気分が悪いのか？ 車に弱いとか？ 誰か呼んだほうがいいか？」

矢継ぎ早の質問に、オリーは少し口元に笑みを浮かべて首を振る。水を一口飲んで、それからぽつり、と呟いた。

「車が、苦手なんだ」

「やっぱり！ ごめん、俺……」

「そうじゃない」

無理を言ったから、と頭を下げようとした俺を押しとどめ、少し

その青い瞳を彷徨わせたオリーは、意を決したようにこちらを真っ直ぐに見た。俺は黙ってその続きを待つ。

どこかに痛みを覚えているような、そんな複雑な表情がその顔に浮かんでいた。

「俺がサッカーを始めた頃、両親がいつも送り迎えをしてくれていた。その日も試合の帰りで、運転は母が。父はその隣で試合について批評していて、俺は後ろでそれを聞いていた。今と似たような道だった。前から走ってきた車がハンドル操作を誤ったらしい。スピードも出過ぎていたように思える。そのまま、こちらに、突っ込んで――」

そこまで言うと、オリーは絶句した。

聞かなくてもその続きを容易に想像できて、俺もかける言葉を失う。

多分、それが大きな心の傷なんだろう。今でも、決して自分からは車に乗らないように。

「俺、何も知らないで……ごめん」

「モトハシは悪くない。謝らないでくれないか。このことを知っているのは、コーチたちとアンゲラだけだ」

「アンゲラ？」

その名前に、俺は前にデパートで会ったあの長身の美人を思い出した。もしかして、恋人かなにかなんだろうか。

俺の疑問は口に出すまでもなく伝わったらしく、少し赤みの指してきた顔をオリーは横に振った。

「アンゲラは、従姉妹だ。両親を亡くしたあと、俺を引き取ってくれた叔母さんたちの一人娘。俺とは兄妹みたいに育った」

「そうか」

「初めてだ、これを人に話すのは。今までは知っている人間と、話さなきゃならない人間としかいなかったから。……親しい関係が苦手なわけじゃないんだが、少し怖かったのかもしれない。失うことを、考えてしまうから」

今まで見たこともない弱々しい笑みで、オリーが静かにそう告白する。俺は黙ってその金色の頭を乱暴にかき回した。

いかつくて、生真面目で、厳格で、戦争よりもあいつが怖いなんてチームメイトにからかわれたりして。誰よりも、強い、俺たちのキャプテン。

初めて明かしてくれた心の内に、俺はちよつと感動して泣きそうになるのを誤魔化すように、その筋肉のついた肩を引っぱたいやった。

「うちのチームメイト、誰ひとりとっても殺しても死にそうにねえって。ロレンツォなんか、可愛い女の子が前を通りゃ、墓場の下からだって甦ってくるし。ジェラルは絶対ゾンビになってもボール追っかけてくるぜ。サッカー馬鹿だから！」

「モトハシも？」

「あつたりまえだろーが。こんな寒くてじゃがいもばっか食ってる国に来てまでサッカーしてんだぜ！……おまえに背中預けて、目一杯楽しいサッカーしてえよ」

まくし立てるように言って、俺はオリーを安心させるように笑ってみせる。

暗いところにひとり閉じこもってないで、こっちに来て一緒にサッカーをしよう。みんなで。

そんな思いを込めて俺は先に立ち上がると、手をオリーへと差し出した。オリーは少しぼかんとしてような顔で、目の前の手を黙っ

て見つめている。

これで断られたら俺はどうするんだ、と悩み始めていたその時、ぐっと強い力でその手を握りしめられた。

それは、初めて会った時の握手のように。

「俺も、お前らの背中を怒鳴りつけて、サッカーしたい」

「あれ以上は勘弁してくれ！」

混ぜっ返すようにそう言うと、オリーは初めて見るような無邪気な顔をして大笑いを始める。

こんな顔できるじゃねえか、と俺もつられて笑う。深夜の道ばたで、大柄な男二人が大笑いして、なんて滑稽なんだろう。

そうして俺たちは、再び固く握手を交わす。

「優勝しかないな」

「だな」

多分、俺とオリーはその時ようやく友達になったんだと思う。

そしてそれは俺がドイツを去り日本に帰ったあとも、選手を引退したあとも、ずっとずっと続いている。彼が日本にやってきてからも、それは変わらず――。

「サンタさん、泣き虫めーなのよ！　ほらマナが、いい子いい子したげるねっ」

しょんぼりとしゃがみ込んでいたオリーに、ひとりの園児が声をかける。

長い長い記憶を思い返していた俺は、その声にはっとしてそちらを見やった。オリーのひよこのような金の髪を、ようやっと背伸びした少女が、わしゃわしゃとその小さな手で撫でている。

するとそれまで、不幸のどん底とはここである、といった風のオリーが、そのガラス玉のような目を輝かせて少女を抱き上げた。

「マーナ？ よいこですね！ オリーはマーナ大好きですよ！」

「すごーいっ。高いねえ！」

突然のことに泣き出すかと思われた少女は、反対に急に高くなった自分の目線にひどく喜んだ声を上げた。

それを聞いた他の園児たちが、さっきとは打って変わって、我も我もとオリーの足下にむらがってくる。子供って、好奇心には勝てないんだよな。

オリーに比べると本当に小さな子供たちに、彼は戸惑いつつも嬉しそうに次から次へと子供たちを抱き上げてやる。終いには、両手に何人もぶらさげてゆっくりと回ってやつたり、床に座って子供たちが珍しがる金の髪を引っ張られたりして。

その厳めしい顔が、いつかのように無邪気に笑う。

『あらあ、心配して来てみれば。オリー、人気者じゃない！』

華やかなその声に振り向けば、そこには予想通りの姿があった。

オリーによく似た金色の髪を波打たせ、彼よりも濃い青の瞳が嬉しそうに子供に囲まれているオリーにむけられる。

『アンゲラも来たのか』

『あなたたち二人じゃ心配だったんだもの。でも、余計だったみたいね』

大輪のバラのように綺麗な顔をほころばせ、彼女はそっと俺の腕に手を絡めた。俺もその髪に唇を寄せ、笑う。

俺がドイツで得たのは大親友だけじゃない。この、美しい奥さんも。

『オリー、麦子ちゃんに会ってから本当に変わったよな』

もはやオリー対ちびっ子怪獣の戦いになりつつある光景を眺めながら、俺が愛しの奥様であるアンゲラにそう言えば、彼女は「そうかしら」といたずらっぽい笑みを浮かべて俺を見た。

『私は、あなたと会ってからだと思うわ。ありがとう、リヨウ』
『アンゲラ……』

その言葉に感極まってしまった俺が、思わずその唇に自らのものを重ねようとした、その時。

「あーっ、お姫様がちゅーしてる！」

「ちゅー！」

「ちゅーしてるうっ」

いつの間にやら集まってきていた園児たちが、俺たちふたりを見上げてはやし立てる。それを、オリーまでもがにやにや笑って見つめていた。

ほんつとにいい性格になったもんだ！

ちよっと頬を染めたアンゲラは、女の子たちに引っ張られるようにして、子供たちの輪に入っていく。どうやら、金色の長い髪が、彼女たちにとっては物語のお姫様に見えたようだ。アンゲラも満更ではないらしく、楽しそうに少女たちと片言の日本語を交わす。

そろそろ、本気で子作りしようかなあ。こういうのが幸せってい

う奴なんだろう、と俺も笑ってその輪の中に入っていくのだった。
それが、俺たちのクリスマスの一幕。

『なあ、もしかしてお前がこのチームに移籍してきたのってさあ、
マスコットがクマだからじゃねえの？』

『クマではない、あれは“ベアード”くんだ！』

『はいはい……』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0649z/>

ドイツさんと私

2012年1月10日01時52分発行